長野県木曽郡木祖村

県営担い手育成畑地帯総合整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

柏木遺跡・細畑遺跡・大原遺跡
小沢原遺跡・藤切遺跡・雨池遺跡・蒲原遺跡

2005. 2

長野県木曽地方事務所
木祖村教育委員会

長野県木曽郡木祖村

県営担い手育成畑地帯総合整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

柏木遺跡・細畑遺跡・大原遺跡
小沢原遺跡・藤切遺跡・雨池遺跡・蒲原遺跡

2005. 2

長野県木曽地方事務所
木祖村教育委員会

遺跡遠景１（大原遺跡より南を望む）

遺跡遠景２（大原遺跡より北を望む）

はじめに

木祖村は木曽川の源流に位置し、標高1,000メートルの冷涼な気候を生かした高原野菜「御岳はくさい」の生産が盛んで、年間約30万ケースを関西、中京、関東方面へ出荷しています。その最大の生産団地である西山地区で、平成13年度から県営担い手育成畑地帯総合整備事業が実施されることになりました。

これまでも、西山遺跡として一部は確認されていたところですが、土地改良事業が広範囲に渡ることから、平成12年11月に分布調査を実施し、また、平成13年11月と平成14年４月には試掘調査を実施し、新たに雨池、蒲原、大原、細畑、柏木、小沢原、藤切の遺跡を確認しました。

これらの結果を受け、県教育委員会、事業主体であります県木曽地方事務所土地改良課との三者協議を実施し、雨池、蒲原、藤切遺跡については盛土などによる工事となるため、また、小沢原遺跡は既に大型農業機械による破壊が著しいため本調査は実施しないことになりました。

今回は、平成16年４月から６月にかけて発掘調査を実施した大原、細畑、柏木の各遺跡と、他の遺跡の試掘調査等の結果も併せて報告させていただきます。

本調査の実施にあたり、ご理解ご協力いただきました地権者、耕作者のみなさん、発掘作業にあたっていただいた小木曽地区のみなさんはじめ、ご指導いただき調査報告書をまとめていただいた木曽広域連合ほかの関係された多くのみなさんには深甚なる感謝を申し上げる次第です。

この事業の成果が埋蔵文化財保護の意識を一層向上させ、木祖村の埋蔵文化財を多くの皆様に知っていただけることを願って、序文とさせていただきます。

平成17年２月

木祖村教育委員会
教育長　奥谷　次郎

例　　言

1　本書は県営担い手育成畑地帯総合整備事業の実施に伴い発掘調査された、長野県木曽郡木祖村西山地区に所在する蒲原・雨池・大原・細畑・柏木・藤切・小沢原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業は、木祖村教育委員会が長野県木曽地方事務所の委託を受けて実施した。木祖村教育委員会では『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』に基づき、木曽広域連合に調査指導を再委託した。これを受けて木曽広域連合では、長野県教育委員会の指導のもと、発掘調査と整理作業に係る指導業務について、㈱武蔵文化財研究所に調査の技術支援を委託して同業務を遂行した。

3　調査は平成13年度に第一次の試掘調査、平成14年度に第二次の試掘調査を実施した。それら予備調査の成果に基づき、平成16年度に大原・細畑・柏木遺跡を対象とした本掘調査、及び蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡の試掘調査成果を含めた整理作業、発掘調査報告書の作成ならびに刊行を行った。

4　調査にあたっては、以下の諸作業をそれぞれの事業者に委託して行った。
表土除去・作業員監理：木曽土建工業㈱　各種測量：㈱日研コンサル　自然科学分析：パリノ・サーヴェイ㈱　技術支援：㈱武蔵文化財研究所

5　発掘調査および整理に際し、以下の諸氏、諸機関より御指導と御協力を賜った。（順不同、敬称略）
西山耕地組合　西山ほ場整備実施委員会　長野県教育委員会　長野県木曽地方事務所土地改良課　塩尻市教育委員会　松本市教育委員会　神村 透　㈱アルカ　㈱武蔵文化財研究所　木曽土建工業㈱

6　発掘調査および整理作業の参加者は、以下のとおりである。
青木昌子　大屋美代子　熊山勝三　小林佳奈子　清水宗一　西川淑子　藤原トシ子　藤原まさ江　藤原優子　柳沢 修（以上発掘･整理作業員）　大藏 茂　翁像秀雄　奥原 修　北川 聡　澤頭修自　嶋田次夫　星 梓　吉田長久（以上文化財保護審議会委員）

7　調査体制、調査期間についての詳細は第Ⅰ章第１節に記したとおりである。

8　本書の執筆は第Ⅰ章第１節を笹川正則が、それ以外を郡山雅友が行い、一部に百瀬忠幸が加筆した。加えて、木祖村教育委員会が全体を校閲した。付篇にパリノ・サーヴェイ㈱の原稿を掲載した。

9　本調査により出土した遺物ならびに図面等の記録類は木祖村教育委員会が保管している。

凡　　例

1　本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。
小竪穴状遺構１：20　土坑１：20、１：30　ピット１：30　掘立柱建物１：40　焼土１：20
縄文土器拓影１：２　石器１：１、１：３、１：６　陶器１：３

2　遺構断面図の数値は標高を表し、方位は座標軸の北をＮ-０°とした。

3　遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

4　遺構実測図中のスクリーントーンは焼土範囲、土器断面図では胎土に繊維が含まれることを、石器実測図中のスクリーントーンは付着物を示す。

5　土層の色調は、新版『標準土色帖』（2003年版　農林水産省農林水産技術会議　監修）を使用した。

目　次

巻頭カラー
はじめに
例言
凡例
挿図目次
表目次
図版目次
第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査の経緯と経過……1
1. 調査に至る経緯……1
2. 調査体制と経過……1
第２節　調査と記録の方法……4
第Ⅱ章　遺跡の概観と立地
第１節　遺跡の立地と環境……7
第２節　周辺の遺跡……8
第３節　基本層序……11
第Ⅲ章　柏木遺跡
第１節　縄文時代の遺構……17
1. 小竪穴状遺構……17
2. 土坑……18
3. ピット……20
第２節　縄文時代の遺物……22
1. 石器……22
第Ⅳ章　細畑遺跡
第１節　縄文時代の遺構……23
1. 土坑……23
2. ピット……29
第２節　縄文時代の遺物……30
1. 石器……30
第Ⅴ章　大原遺跡
第１節　縄文時代の遺構……32
1. 土坑……32
2. ピット……33
第２節　縄文時代の遺物……35
1. 土器……35
2. 石器……36
第３節　歴史時代の遺構……40
1. 掘立柱建物……40
2. 土坑……40
3. 焼土……41
4. ピット……42
第４節　歴史時代の遺物……43
1. 陶器……43
第Ⅵ章　蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡
第１節　縄文時代の遺物……44
1. 土器……44
2. 石器……44
第２節　その他の遺物……49
第Ⅶ章　総括……50
引用・参考文献……51
付篇　自然科学分析……52

挿図目次

第１図　遺跡の位置と調査地区……５・６
第２図　遺跡周辺の地形
（『木祖村誌』より抜粋、一部改変）……７
第３図　遺跡付近の段丘断面
（『木祖村誌』より抜粋、一部改変）……８
第４図　村内の遺跡……９
第５図　柏木・細畑遺跡基本土層……11
第６図　大原遺跡基本土層……12
第７図　柏木遺跡全体図……13
第８図　細畑遺跡全体図……14
第９図　大原遺跡全体図……15・16
第10図　１号小竪穴状遺構……17
第11図　１号土坑……18
第12図　２号土坑……19
第13図　３号土坑……19
第14図　４号土坑……20
第15図　ピット……21
第16図　石器……22
第17図　１号土坑……23
第18図　２号土坑……24
第19図　３号土坑……24
第20図　４号土坑……25
第21図　５号土坑……25
第22図　６号土坑……26
第23図　７号土坑……26
第24図　８号土坑……27
第25図　９号土坑……27
第26図　10・11・12号土坑……28
第27図　13号土坑……28
第28図　ピット……29
第29図　石器（１）……30
第30図　石器（２）……31
第31図　Ｊ１号土坑……32
第32図　Ｊ２号土坑……33
第33図　縄文時代のピット……34
第34図　土器……36
第35図　石器（１）……37
第36図　石器（２）……38
第37図　縄文時代遺物分布図……39
第38図　Ｈ１号掘立柱建物・Ｈ１号土坑……40
第39図　Ｈ２号土坑……41
第40図　Ｈ１号焼土……41
第41図　歴史時代のピット……42
第42図　歴史時代の遺物……43
第43図　土器……45
第44図　石器（１）……46
第45図　石器（２）……47
第46図　石器（３）……48

表目次

表１　村内遺跡一覧……８
表２　ピット一覧……20
表３　石器一覧……22
表４　ピット一覧……29
表５　石器一覧……31
表６　縄文時代のピット一覧……35
表７　石器一覧……38
表８　歴史時代のピット一覧……43
表９　石器一覧……49

図版目次

図版１　西山地区遠景（東より）　柏木遺跡近景（調査前西より）　柏木遺跡全景
図版２　柏木遺跡１号小竪穴状遺構　柏木遺跡１号土坑　柏木遺跡２号土坑・１号ピット　柏木遺跡４号土坑　細畑遺跡全景
図版３　細畑遺跡遠景　細畑遺跡２号土坑　細畑遺跡３号土坑　細畑遺跡５号土坑　細畑遺跡６号土坑　細畑遺跡７号土坑、１・３・６・７号ピット　細畑遺跡作業風景
図版４　大原遺跡近景　大原遺跡全景　大原遺跡１号テストピット　大原遺跡Ｊ１号土坑
図版５　大原遺跡Ｊ１号土坑　大原遺跡Ｊ２号土坑　大原遺跡Ｊ５～10号ピット　大原遺跡Ｊ15～17号ピット　大原遺跡Ｊ２号土坑、Ｊ１号ピット、Ｈ１号掘立柱建物、Ｈ１号土坑　大原遺跡Ｈ２号土坑　大原遺跡Ｈ２号土坑、Ｈ12・13号ピット　大原遺跡Ｈ12号ピット
図版６　大原遺跡工事施工後状況（南西より）　大原遺跡工事施工後状況（北より）
図版７　蒲原遺跡近景（南東より）　雨池遺跡近景（南西より）
図版８　藤切遺跡近景（南東より）　小沢原遺跡近景（南東より）
図版９　大原遺跡縄文時代の土器　大原遺跡歴史時代の遺物　蒲原・藤切遺跡縄文時代の土器
図版10　柏木遺跡縄文時代の石器　細畑遺跡縄文時代の石器　大原遺跡縄文時代の石器
図版11　蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡縄文時代の石器

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

本書にその成果を所収する大原遺跡ほかの調査は、長野県木曽郡木祖村西山地区において、水田ならびに畑地の土地改良を目的とした県営担い手育成畑地帯総合整備事業が計画、実施されることになったため、平成12年～同16年にわたる各事業年度に継続して行われたものである。

事業対象となった西山地区内では、事前の表面踏査等により複数の遺物散布地が確認され、それぞれが埋蔵文化財包蔵地として登録、周知されていた。このため事業の着手に先立ち、長野県教育委員会・木曽地方事務所土地改良課・木祖村教育委員会の３者で保護協議を行い、事前の保護策を講ずることとなった。平成13年度および14年度にそれぞれ対象となった遺跡の試掘調査を行った結果、事業地内に埋蔵文化財の遺存が改めて確認されたため、当該事業の実施により遺跡の損壊が避けられない範囲については、事業実施前に発掘調査による記録保存が必要と判断するに至った。

事業予定地内の試掘調査および包蔵地の発掘調査にあたっては、木曽地方事務所と木祖村教育委員会の間で埋蔵文化財発掘（試掘）調査業務に関する委託および受託契約を締結し、木祖村教育委員会が主体となって実施した。

木祖村は『木曽郡埋蔵文化財調査委託実施要綱』に基づいて、長野県教育委員会の指導に準拠しつつ、木曽広域連合と発掘調査指導委託契約を締結した。一方、木曽広域連合では木祖村教育委員会の統括のもと、発掘調査から報告書作成に係る技術支援を㈱武蔵文化財研究所に委託するとともに、専門的な立場から全体を監理した。

以上の経緯のもと、大原遺跡ほかに対する発掘調査・整理から報告書刊行に至る一連の記録保存調査が行われた。

2. 調査体制と経過

対象遺跡に係る関連機関との協議経過ならびに調査体制、試掘調査および本発掘調査、整理作業から発掘調査報告書の発刊に至る経過は、以下に掲げるとおりである。

年度を追ってその概略を記す。

平成12年度

調査対象　西山地区　（蒲原遺跡 雨池遺跡 大原遺跡 細畑遺跡 柏木遺跡 藤切遺跡 小沢原遺跡）

調査体制　事務局　木祖村教育委員会
　　青木　茂人（教育長）
　　栗屋　　明（教育次長）
　　調査担当　百瀬　忠幸（木曽広域連合埋蔵文化財調査室）
　　松原　和也（木曽広域連合埋蔵文化財調査室）

経　　過

８月１日　　西山地区畑地帯総合整備事業役場関係各課事務打合せ会議を開催。
　　平成13年度の事業採択に向けた調整を行う。埋蔵文化財調査については、

木曽広域連合と連携して早急に調査時期や方法等を調整することとする。

10月24日　西山地区地権者、耕作者に対し埋蔵文化財分布調査の協力を依頼する。

11月１日　木曽広域連合と西山地区全体の埋蔵文化財分布調査指導委託契約を締結。

11月６～14日　西山地区全体の埋蔵文化財分布調査（表面調査）を実施。

11月17日　木曽広域連合より埋蔵文化財分布調査報告書の提出を受ける。
対象地区内に縄文時代早期などの埋蔵文化財包蔵地７箇所を確認する。

12月６日　県教育委員会事務局担当者による現地視察と調査に向けた指導を受ける。

平成13年度

調査対象　蒲原遺跡

調査体制　事務局　木祖村教育委員会
青木　茂人（教育長）
栗屋　　明（教育次長）
調査担当　百瀬　忠幸（木曽広域連合埋蔵文化財調査室）

経　　過

８月27日　木曽地方事務所土地改良課、木曽広域連合、村建設農林課および村教育委員会事務局による調整会議を行う。

９月10日　県教育委員会事務局と木曽地方事務所土地改良課を交えた３者協議。
平成14年度施行予定の蒲原遺跡について、試掘調査を11月に実施することとする。

10月５日　蒲原遺跡の地権者、耕作者への説明会を開催。

10月10日　木曽広域連合との間で蒲原地区の埋蔵文化財試掘調査指導委託契約を締結。

11月12～30日　蒲原遺跡の試掘調査と整理作業を実施。試掘調査報告書の作成を行う。

12月３日　蒲原遺跡の試掘調査結果に基づく３者協議を開催。
蒲原遺跡は当初の事業設計を変更して盛土で施工する計画とし、本調査は実施せず試掘調査にとどめることとなった。雨池遺跡等については、平成14年度に試掘調査を実施することとした。

１月22日　木曽地方事務所長より雨池、大原、細畑、柏木、小沢原の各遺跡について文化財保護法57条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」提出を受ける。同日付けで県教育委員会教育長宛に進達する。

３月20日　雨池遺跡ほかの土地所有者、耕作者への説明会を開催。

平成14年度

調査対象　雨池遺跡　大原遺跡　細畑遺跡　柏木遺跡　小沢原遺跡

調査体制　事務局　木祖村教育委員会
奥谷　次郎（教育長）
栗屋　　明（教育次長）
調査担当　百瀬　忠幸（木曽広域連合埋蔵文化財調査室）

経　　過

４月15日　木曽地方事務所長より、雨池、大原、細畑、柏木、小沢原遺跡の埋蔵文化

財試掘調査委託契約について協議書が提出される。同日、契約を締結する。

４月15日　木曽広域連合との間で雨池、大原、細畑、柏木、小沢原遺跡の試掘調査及び整理作業指導委託契約を締結する。

４月15～30日　雨池、大原、細畑、柏木、小沢原遺跡の試掘調査を実施。

９月24日　雨池遺跡ほかの試掘調査結果に基づく３者協議を開催。

雨池遺跡は、設計変更を行い盛土施工による保存をはかることとする。大原遺跡は工事による損壊を避けられない約2,000㎡を記録保存することとし、細畑遺跡は道路、水路に係る20m×５mを、また柏木遺跡も道路と水路により切取られる35m×５mの範囲をそれぞれ記録保存することとした。

３月19日　木曽地方事務所長より大原、細畑、柏木の各遺跡について文化財保護法57条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」提出を受ける。３月22日付けで県教育委員会教育長宛に進達する。

３月22日　大原、細畑、柏木遺跡の地権者及び耕作者に調査への協力依頼を行う。

３月29日　埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を受領する。

平成16年度

調査対象　大原遺跡　細畑遺跡　柏木遺跡

調査体制　事務局　木祖村教育委員会

奥谷　次郎（教育長）

笹川　正則（課長補佐）

調査担当　百瀬　忠幸（木曽広域連合埋蔵文化財調査室）

技術支援　㈱武蔵文化財研究所

経　過

４月１日　木曽広域連合へ埋蔵文化財発掘調査指導（大原、細畑、柏木遺跡の発掘調査）の委託について協議書を提出する。

４月13日　平成16年度文化財関係国庫補助金の内示を受領する。

４月15日　木曽地方事務所長との間で、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結する。

４月16日　木曽広域連合との間で、発掘調査指導委託契約書を締結する。

４月19日　大原、細畑、柏木遺跡の発掘調査を開始する。

４月20日　平成16年度埋蔵文化財関係の補助金交付申請書を提出する。

６月５日　縄文時代早期の遺物や土坑等の出土を見、各遺跡の発掘作業を終了する。

６月17日　木曽広域連合との間で、発掘調査指導委託変更契約書を締結する。

２月25日　大原遺跡ほかに係る埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行。

第２節　調査と記録の方法

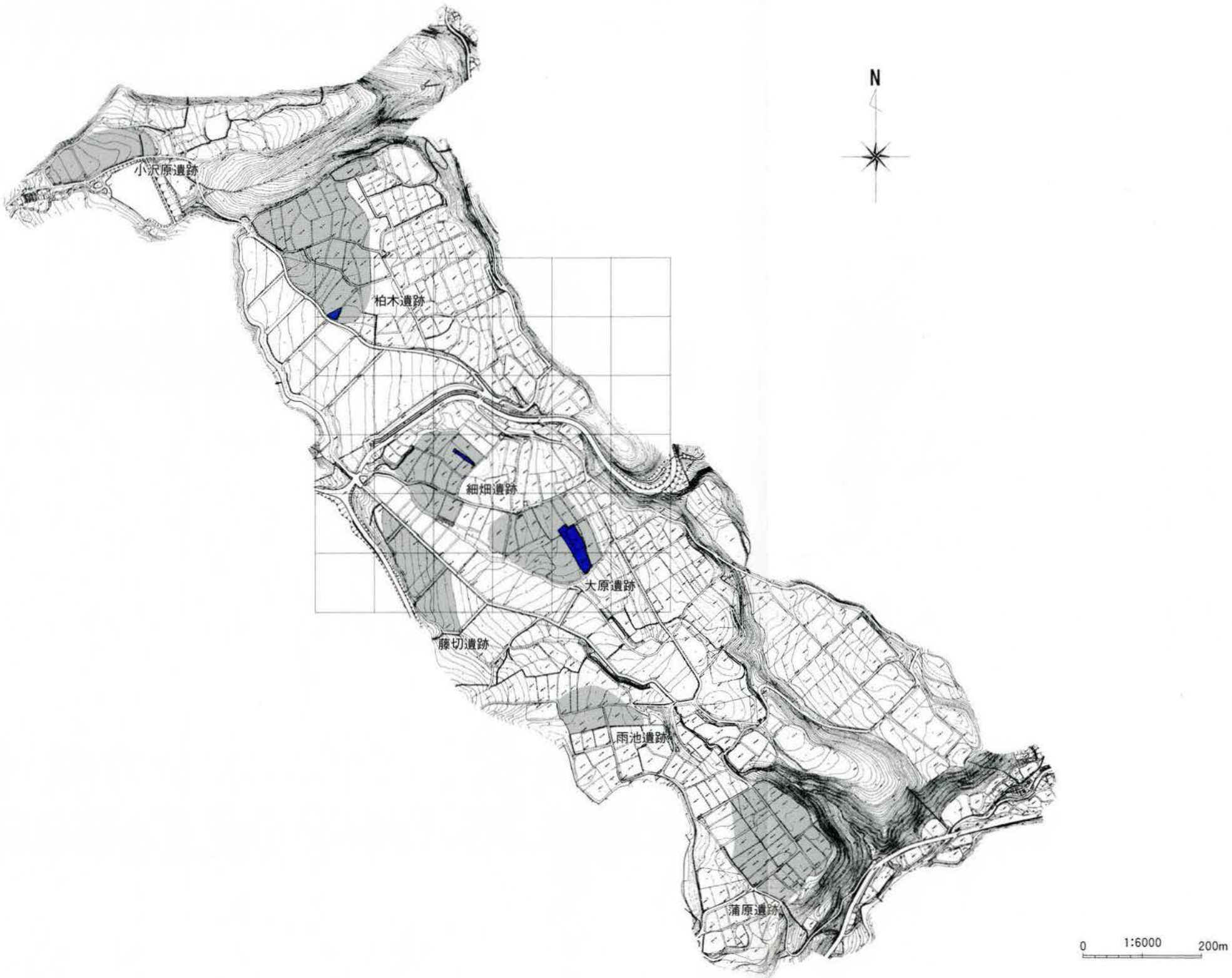
調査の開始にあたっては、木祖村教育委員会、木曽地方事務所、長野県教育委員会の３者を交えた保護協議において面的な調査の必要性が確認された範囲、すなわち試掘の結果、遺構と遺物の分布が認められ、なおかつ工事を進める上で遺跡の保存が困難であると判断された柏木、細畑、大原の３つの区域を調査区と定めた。

発掘調査に際しては、それぞれの調査区全域を網羅するように８ｍ方眼のグリッドを設定し、遺構確認作業を行った。グリッドの南北軸は真北を基準に設定した。グリッドの設定に際しては、国土座標の第Ⅷ系原点の第３象限内のＸ，すなわち南北軸－11,920ｍ、Ｙ、すなわち東西軸－74,128ｍの地点を柏木遺跡、南北軸－11,920ｍ、東西軸－74,128ｍの地点を細畑遺跡、南北軸－11,920ｍ、東西軸－74,128ｍの地点を大原遺跡の座標原点とそれぞれ定め、本原点を基準に西から東へＡ～Ｊ、北から南へ１～６という記号を８ｍ方眼毎に付し、各グリッドにＡ－１区～Ｙ－６区という呼称を与えた。

調査区はほぼ全域にわたって畑地で占められていた。このため、耕作土および耕作基盤土については機械力で掘削し、その下部より遺構確認面までを人力で掘り下げた。調査区の面積は柏木遺跡220㎡、細畑遺跡224㎡、大原遺跡1,920㎡、総面積2,364㎡である。

遺構の調査は平面プランを確認したのち半截し、必要に応じ土層断面等の図化を行い完掘した。平面実測には主に水糸方眼測量を用い、平板測量も併用している。遺構の名称・番号は検出順に割り振ったが、整理段階で名称変更となったものもある。出土遺物に関しては原則として全点記録を行っているが、グリッド・層位単位で取り上げたものもある。写真は調査工程・実測記録に則して撮影した。

なお、大原遺跡については縄文時代の調査の進行に合わせて２ｍ四方の試掘坑３ヶ所を設け、旧石器時代の調査を行ったが、当該期の遺構・遺物の分布は未確認に終わった。



第１図　遺跡の位置と調査地区

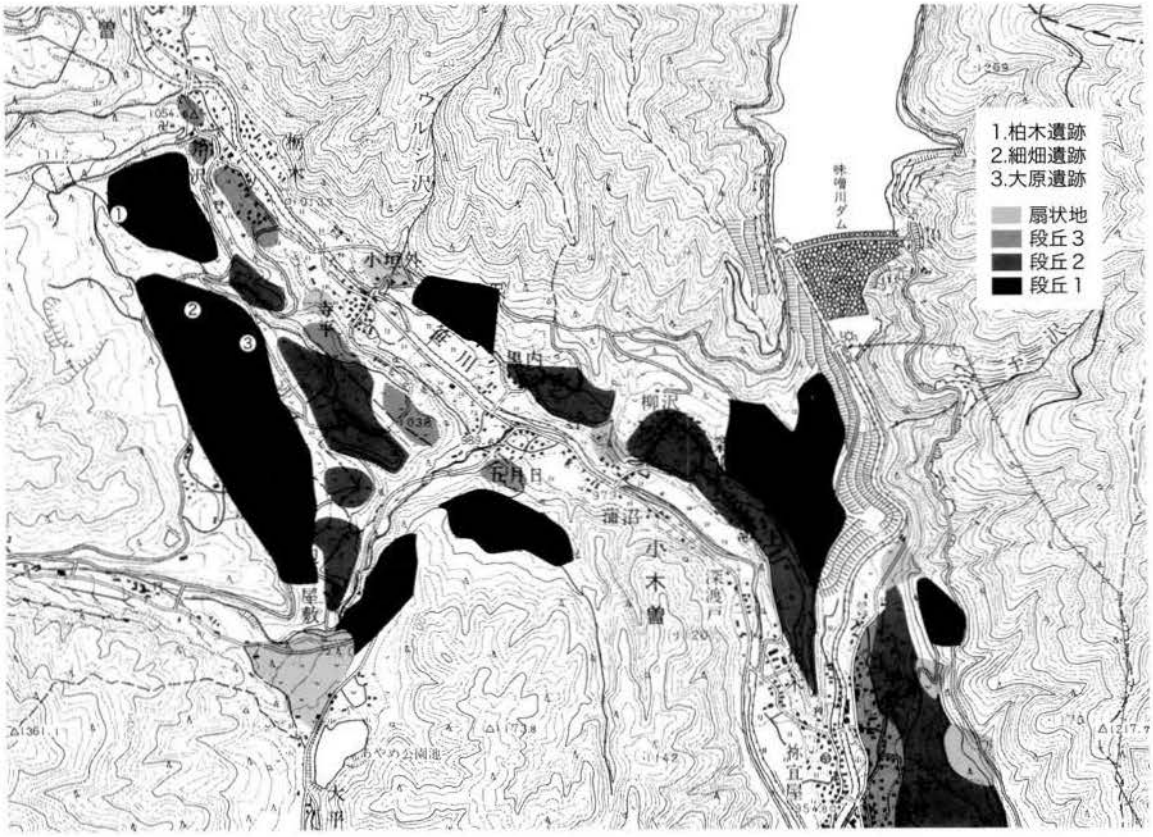
第Ⅱ章　遺跡の概観と立地

第１節　遺跡の立地と環境

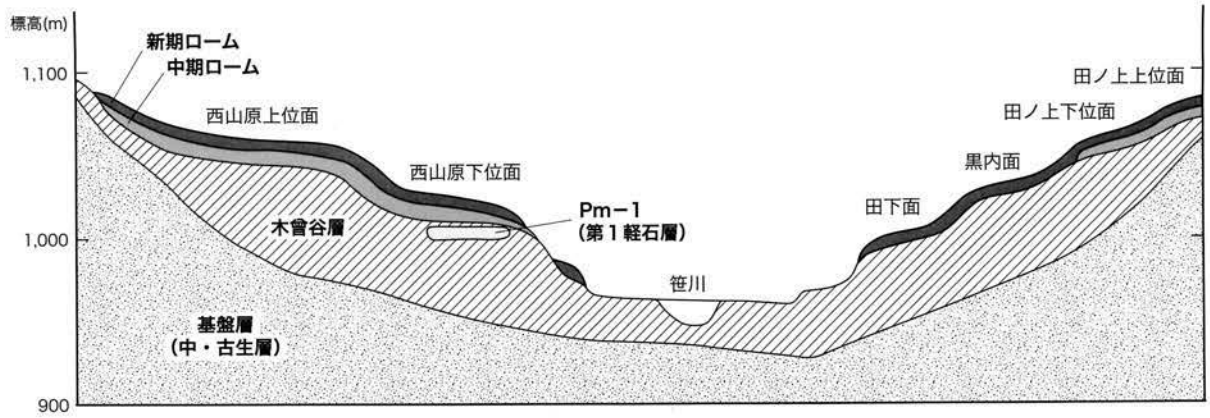
2,000メートル級の山々に囲まれた木祖村は長野県の西南端、木曽郡の最北端に位置する渓谷型の山村であり、木祖村と北東側の楢川村を画する鳥居峠は太平洋に注ぐ木曽川と日本海に注ぐ信濃川との分水嶺の役割を果たしている。とりわけ木祖村の中央部を南北に貫流する木曽川には大小の河川が合流し、これらの河川に沿った標高900～1,100mの傾斜地には集落と耕地が散在し、中央アルプスや木曽御岳の峰々とも相俟って複雑な景観をみせている。

この木祖村の北西部の山間部に位置するのが「御岳はくさい」の最大の生産地として知られる西山地区である。西山地区を南東に流れる笹川の流域には白菜を主体とする高原野菜の広大な畑地が広がっており、北側を流れる大笹沢と南側を流れる奥峰沢がさらに笹川に合流する。

今回、発掘調査の対象地となった柏木・細畑・大原遺跡と、試掘・分布調査が実施された蒲原・雨池・藤切・小沢原の各遺跡は笹川右岸の段丘上に立地しており、笹川との比高差は60～70mほどを測る。遺跡周辺の段丘は笹川氾濫原に向かって３段の段丘面を形成しており、このうち標高1,050～1,100m付近に形成された西山原上位面と称される高位段丘面に柏木・細畑・大原の各遺跡を載せている（第２・３図）。山塊の崖線に最も近い柏木遺跡で1,096m、細畑遺跡で1,087m、端部付近の大原遺跡で1,080mを測り、巨視的には東西方向に緩い傾斜地形を呈するが、段丘の北端部を画する大笹沢や南端の奥峰沢をはじめとして、段丘上には笹川へ注ぎ込むいくつかの支谷が樹枝状に発達していることが知られる。しかし、現在はほぼ全域が耕作地として利用され、これに伴い数次に渡る土地改変が行われた結果、段丘上の小支谷や独立丘などが消失している箇所も多く、旧地形を復元するには困難な状況にある。



第２図　遺跡周辺の地形（『木祖村誌』より抜粋、一部改変）



第3図　遺跡付近の段丘断面（『木祖村誌』より抜粋、一部改変）

第2節　周辺の遺跡

木曽郡内では、御岳山麓を除いたほとんどの地域において、木曽川の氾濫や浸食によって形成された比較的広い段丘上に遺跡が点在している。しかし、峻険な山々に囲まれた狭隘な地形によって形成された木曽谷における遺跡の分布は全般的に疎であり、長野県内において遺跡数が急激に増加する縄文時代中期段階にあっても大規模集落の検出例はまだ少ない。こうした傾向は木祖村でも例外ではなく、これまでに発見された遺跡のうち主体となる縄文時代の遺跡の多くも、小規模な集落遺跡、あるいはキャンプサイト的な遺跡によって占められる。

木祖村では縄文時代以前、旧石器時代に遡る遺跡は現在までのところ確認されていない。また、縄文時代に後続する弥生時代・古墳時代についても空白の時代で、当該期の人々の生活を復元する資料は未検出の状態である。奈良時代には、『続日本記』に記述のある「岐蘇山道」・「吉蘇路」から木祖村を経由する交通路の存在は知られるものの、定着的な生活の痕跡はなお不明瞭である。須恵器・灰釉陶器などから散布地として遺跡が確認されるのは平安時代以降のことになる。なお、木曽郡内でも2例の検出例しかない八稜鏡が田ノ上遺跡（11）・向吉田遺跡（44）より4面出土していることは、発見例の多い松本平などとの関係や流通ルートの点からも興味深い。

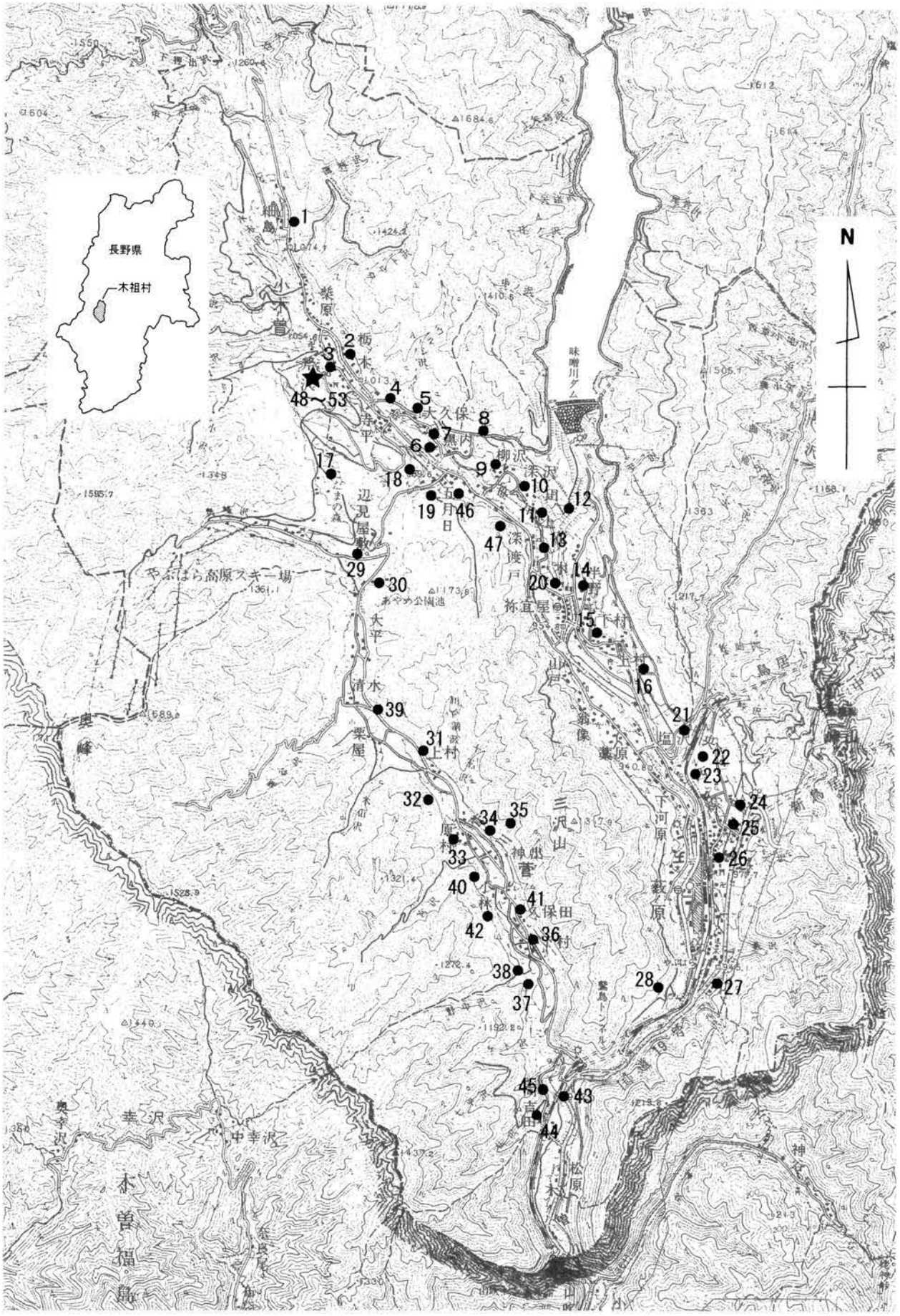
今回の遺跡群が位置する笹川流域では、村内初の縄文時代住居が検出された深沢遺跡（10）と近接して柳沢遺跡（9）があり、両遺跡合わせて中期中葉～後葉の住居8軒が検出されている。地点調査のため全容は把握されないが遺構の密集度が高く、連続する段丘先端部の花ノ木遺跡（13）からも該期の遺物が多量に出土していることから、深沢・柳沢遺跡を包括する範囲に拠点的集落が存在していた可能性が高い。木曽川流域については縄文時代の遺跡数は相対的に少なく、左岸段丘上に早期～後期の遺物散布地が点在する。こうした中で、右岸の大洞遺跡（28）では中期中葉の住居2軒が調査された。山麓先端部という立地条件にも拘らず集落が営まれており、左岸とは対照的な景観を見せる右岸にも未発見の遺跡の存在が示唆されよう。

参考文献

木祖村誌編纂委員会　1997『木祖村誌　源流の村の自然』
木祖村誌編纂委員会　2001『木祖村誌　源流の村の歴史（上）』

表1　村内遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	地区・立地	時代と主な出土遺物（発掘者・所持者）
1	細島（ホソジマ）遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 石鏃
2	栃（トチ）ノ木（キ）遺跡	小木曽　扇状地	[縄文] 石剣


長野県
木祖村
N
味噌川ダム
48～53
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

第４図　村内の遺跡

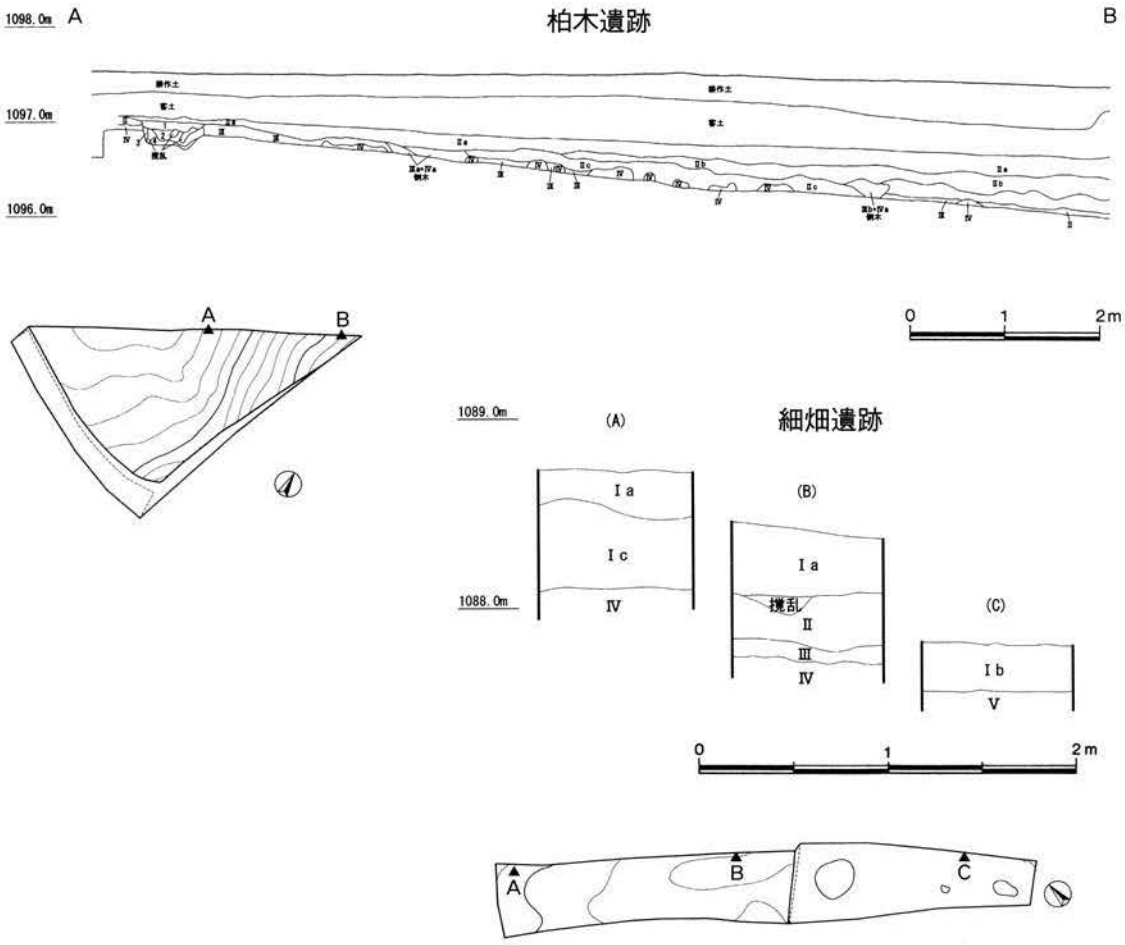
遺跡番号	遺跡名	地区・立地	時代と主な出土遺物（発掘者・所持者）
3	斧沢遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 山形押型文土器　前期土器　磨製石斧（信大医学部）
4	小垣外遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 中期土器
5	大久保遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 勝坂式　加曾利E式石鏃　打製石斧　磨製石斧
6	東遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 中期土器　石鏃
7	黒内遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 勝坂式　石鏃
8	鳥屋窪遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 石鏃　打製石斧　敲石
9	柳沢遺跡	小木曽　段丘	[縄文]山形文・楕円文押型文土器　諸磯C式　勝坂式　加曾利E式　堀ノ内式　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石錐　石匙　敲石　石皿　凹石　独鈷石　有孔垂飾品（木曽教育会　1967年）
10	深澤遺跡	小木曽　段丘	[縄文]竪穴住居　勝坂式　加曾利E式　後期土器　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石錘　凹石石錐　石皿　土偶［平安］須恵器（信大医学部1947・1967・1997年）
11	田ノ上遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 勝坂式　加曾利E式　堀ノ内式　石鏃　磨製石斧　石剣（小林秀之助）［平安］八稜鏡　須恵器
12	大原遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 磨製石斧　≪煙滅≫
13	花ノ木遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 打製石斧　磨製石斧
14	半野遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 磨製石斧　石棒
15	上村遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 加曾利E式　石鏃　磨製石斧　石錐
16	飯米原遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 中・後期土器　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石匙　凹石（木祖中学校）
17	西山（雨池）遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 後期土器　石鏃　打製石斧　磨製石斧［平安］土師器
18	がんま平遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 土器　石鏃
19	五月日遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 石鏃
20	十王遺跡	小木曽　山麓	[縄文] 中期土器　石鏃　石匙
21	塩沢原遺跡	藪原　山麓	[縄文] 中期土器　石鏃　石錐
22	十石原遺跡	藪原　山麓	[縄文] 加曾利E式　石鏃　打製石斧　磨製石斧
23	青木原遺跡	藪原　山麓	[縄文]加曾利E式　堀ノ内式　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石錐　石錘　石皿(木祖中学校)
24	夏山遺跡	藪原　山麓	[縄文] 石鏃　磨製石斧
25	原町遺跡（十石・青木・大久保）	藪原　段丘	[縄文] 中・後期土器　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石棒（木祖中学校）
26	細小路遺跡	藪原　段丘	[縄文] 石鏃
27	木坂遺跡	藪原　山麓	[縄文] 加曾利E式　後期土器［平安］須恵器
28	大洞遺跡	藪原　山麓	[縄文] 勝坂式　石鏃　石匙　土偶（木祖村教育委員会1979年）
29	辺見屋敷遺跡	菅　山麓	[縄文] 中期土器　石鏃
30	大平遺跡	菅　山麓	[縄文] 磨製石斧　石剣
31	岩淵遺跡	菅　山麓	[縄文] 打製石斧
32	木山沢遺跡	菅　山麓	[縄文] 磨製石斧
33	原村遺跡	菅　山麓	[縄文] 磨製石斧　凹石
34	神出遺跡	菅　山麓	[縄文] 山形文・楕円文押型文土器　前期土器　勝坂式　後期土器　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石錐　凹石　石棒　石剣［平安］須恵器（木祖中学校）
35	追平遺跡	菅　山麓	[縄文] 前・中期土器　打製石斧
36	下村遺跡	菅　山麓	[縄文] 中期土器　磨製石斧　四脚石皿　石剣［平安］灰釉陶器
37	野中原遺跡	菅　山麓	[縄文] 勝坂式　加曾利E式　石鏃　打製石斧　磨製石斧　石匙
38	種馬場遺跡	菅　山麓	[縄文] 前・中期土器　打製石斧
39	栗屋遺跡	菅　山麓	[縄文] 加曾利E式　石鏃　磨製石斧　打製石斧
40	宮沢遺跡	菅　山麓	[縄文] 石器
41	久保田遺跡	菅　山麓	[縄文] 打製石斧　磨製石斧
42	小林遺跡	菅　山麓	[縄文] 石器
43	神居場遺跡	吉田　山麓	[縄文] 勝坂式　磨製石斧
44	向吉田遺跡	吉田　山麓	[縄文] 土器　石鏃　磨製石斧　凹石［平安］灰釉陶器　八稜鏡
45	神戸平遺跡	吉田　段丘	[縄文] 押型文土器　中期土器　打製石斧
46	大学院墳墓群	小木曽　山腹	人骨　ほら貝　古銭　キセル（木祖村教育委員会1995年一部発掘）
47	深渡戸墳墓群	小木曽　山麓	（1995年確認）
48	小沢原遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 剥片類　焼礫
49	柏木遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 石鏃　特殊磨石　剥片類　焼礫
50	細畑遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 尖頭器　石鏃　剥片類　特殊磨石
51	大原遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 尖頭器　石鏃　打製石斧　押型文土器
52	蒲原遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 押型文土器　特殊磨石　削器
53	藤切遺跡	小木曽　段丘	[縄文] 掻器　打製石斧

第３節　基本層序

柏木・細畑・大原各遺跡の基本層序は次の通りである（第５・６図）。上層はすべてロームブロックを主体とする客土と耕作土に被覆されている。Ⅱ層以下、良好に遺存している箇所を図示したが、削平がⅣ層以下にまで及んでいる部分も多い。縄文時代の遺物包含層としてⅡｂ・Ⅲ層を認めることができる。

柏木遺跡

Ⅰａ層　耕作土
Ⅰｂ層　客土（ロームブロック主体）
Ⅱａ層　10YR2/1　黒色土　微粒の灰白色スコリア・橙色スコリアが僅かに点在。粘性・締まりあり。
Ⅱｂ層　10YR2/1　黒色土　Ⅱａ層に比べ若干色調明るい。微～中粒の灰白色スコリア点在。微粒の橙色スコリア僅かに点在。粘性・締まりあり。
Ⅱｃ層　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒子・灰白色スコリア点在。谷斜面部に堆積。粘性・締まりあり。
Ⅲ層　10YR3/4　暗褐色土　ローム漸移層。微～中粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
Ⅳ層　10YR6/6　明黄褐色土　所謂ソフトローム層。微～中粒の灰白色スコリア点在。



第５図　柏木・細畑遺跡基本土層

細畑遺跡

Ⅰa層　耕作土

Ⅰb層　水田土

Ⅰc層　客土

Ⅱ層　10YR2/1　黒色土　微粒の灰白色スコリア点在。微粒の橙色スコリアが僅かに見られる。粘性･締まりあり。

Ⅲ層　10YR4/4　暗褐色土　ローム漸移層。微～中粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。

Ⅳ層　10YR6/8　明黄褐色土　所謂ソフトローム層。微～中粒の灰白色スコリア点在。

Ⅴ層　10YR6/8　明黄褐色土　所謂ハードローム層。水田の影響を受け金属成分の溶脱・集積化が著しい。

大原遺跡

Ⅰa層　耕作土

Ⅰb層　旧耕作土

Ⅰc層　客土（ロームブロック主体）

Ⅱa層　10YR2/1　黒色土　微粒の灰白色スコリア・橙色スコリア点在。粘性・締まりあり。

Ⅱb層　10YR3/2　黒褐色土　小～中粒の灰白色スコリア、微粒の橙色スコリア点在。粘性・締まりあり。

Ⅲ層　10YR4/4　褐色土　ローム漸移層。小～中粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。

Ⅳ層　10YR6/8　明褐色土　所謂ソフトローム層。微～中粒の灰白色スコリア点在。

Ⅴ層　10YR6/8　明褐色土　所謂ハードローム層。微～小粒の灰白色スコリア、中～大粒の黒色・赤褐色粒子点在。

Ⅵa層　10YR5/8　黄褐色土　硬質ローム層。中～大粒の黒色・赤褐色粒子を含み、微粒の灰白色スコリア点在。

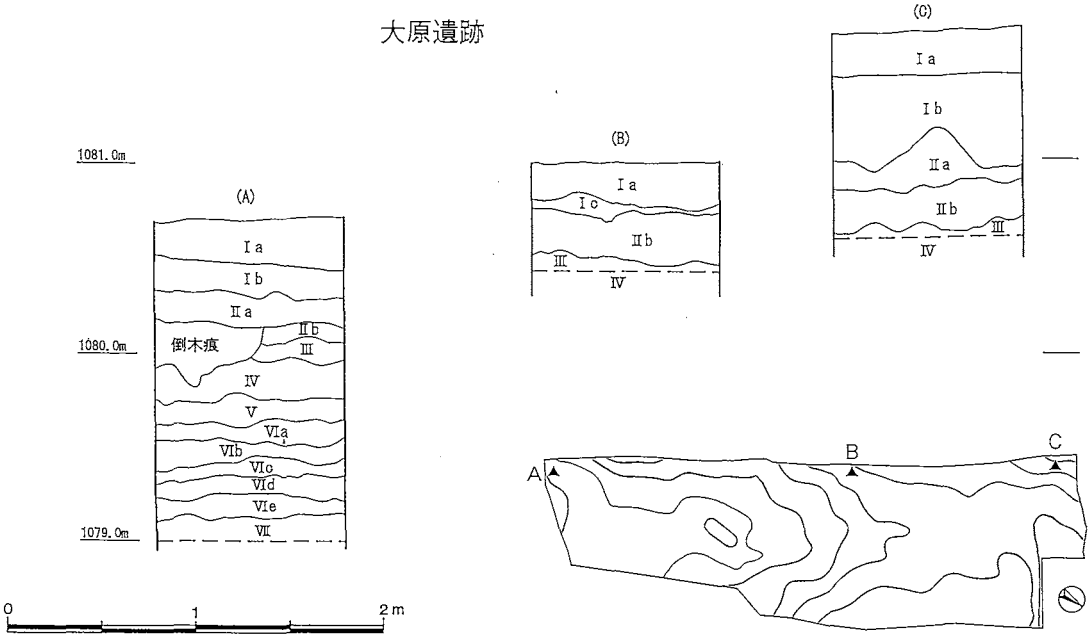
Ⅵb層　10YR5/8　黄褐色土　硬質ローム層。中～大粒の黒色・赤褐色粒子を多量含み、微粒の灰白色スコリアを少量含む。

Ⅵc層　10YR5/6　黄褐色土　硬質ローム層。黒色・赤褐色粒子を主体に灰白色スコリアを多量含む。非常に硬い。

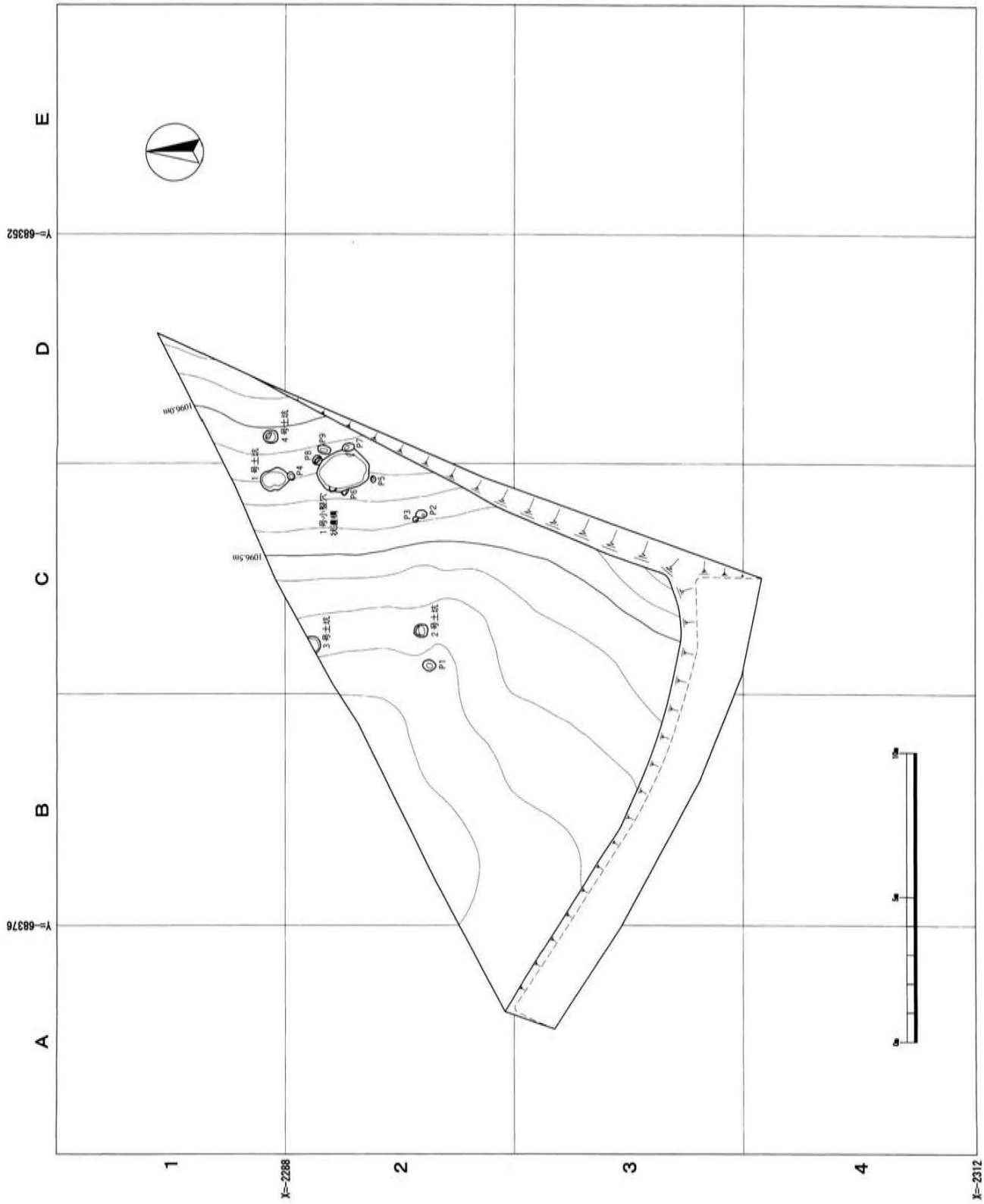
Ⅵd層　10YR6/4　鈍い黄橙色　硬質ローム層。Ⅵc層＋黄白色粒子（砂粒状）の混入著しい。非常に硬い。

Ⅵe層　10YR5/6　黄褐色土　硬質ローム層。黒色・赤褐色粒子主体。黄白色粒子（砂粒状）の混入多い。非常に硬い。

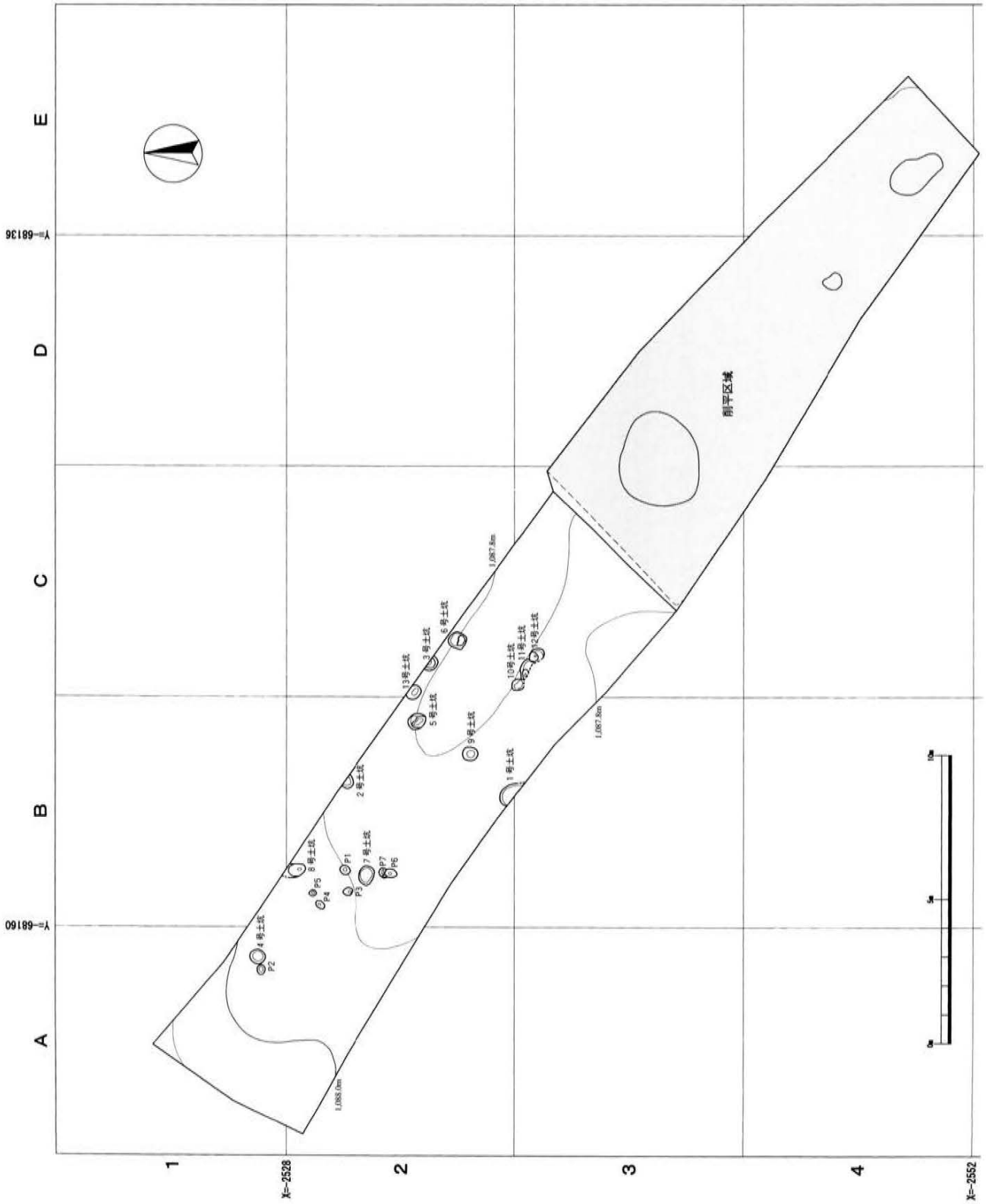
Ⅶ層　10YR5/8　黄褐色土　やや軟質ローム層。微粒の黒色・赤褐色粒子を良く含む。砂質の感触有り。



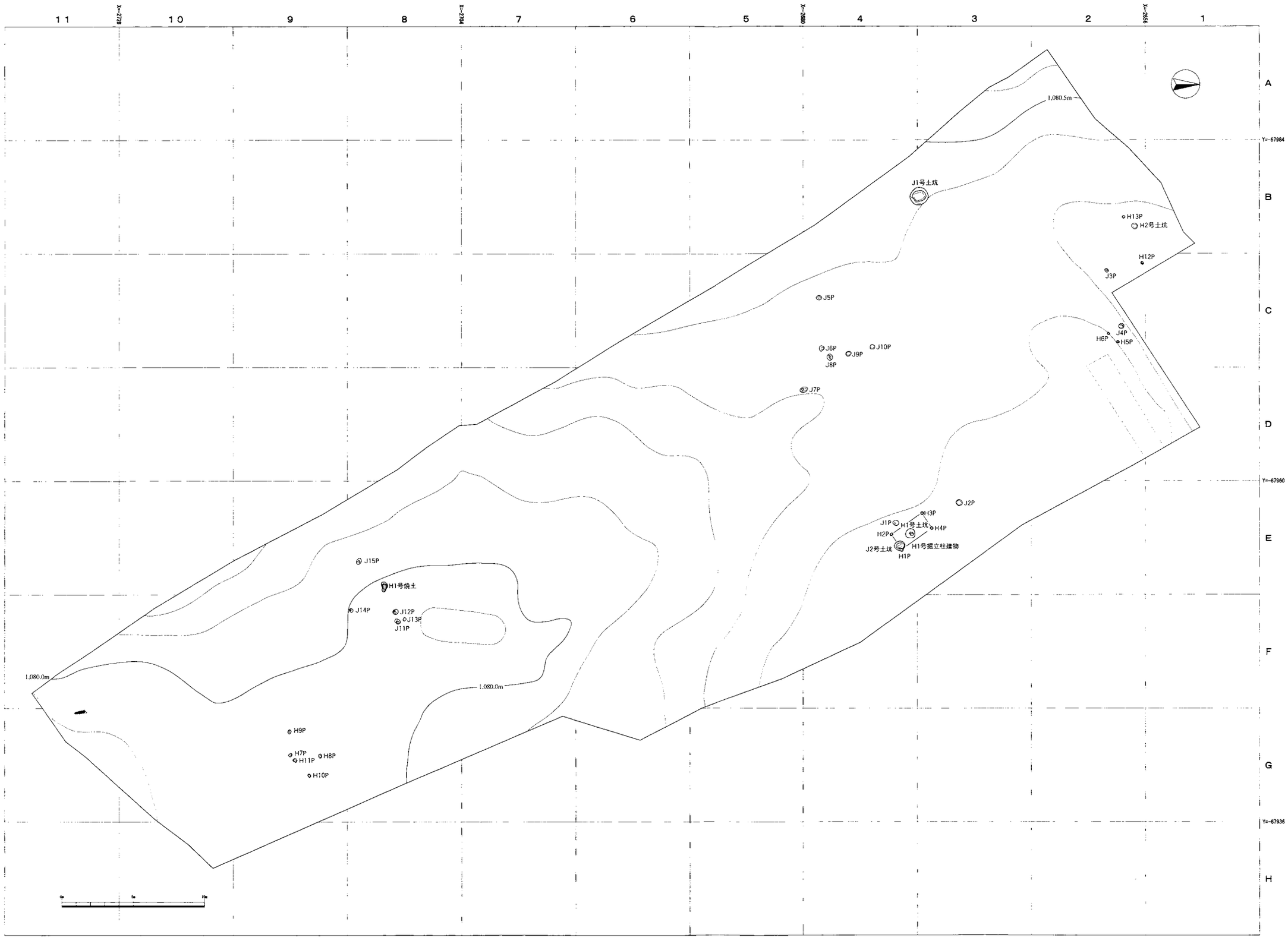
第6図　大原遺跡基本土層


A
B
C
D
E
1
2
3
4
Y=-68376
Y=-68362
X=-2288
X=-2312
1096.0m
1096.5m
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9

第７図　柏木遺跡全体図


A
B
C
D
E
1
2
3
4
Y=-68160
Y=-68136
X=-2528
X=-2552
1,088.0m
1,087.8m
1,087.8m
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
13号土坑
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
削平区域

第8図　細畑遺跡全体図



第９図　大原遺跡全体図（１：300）

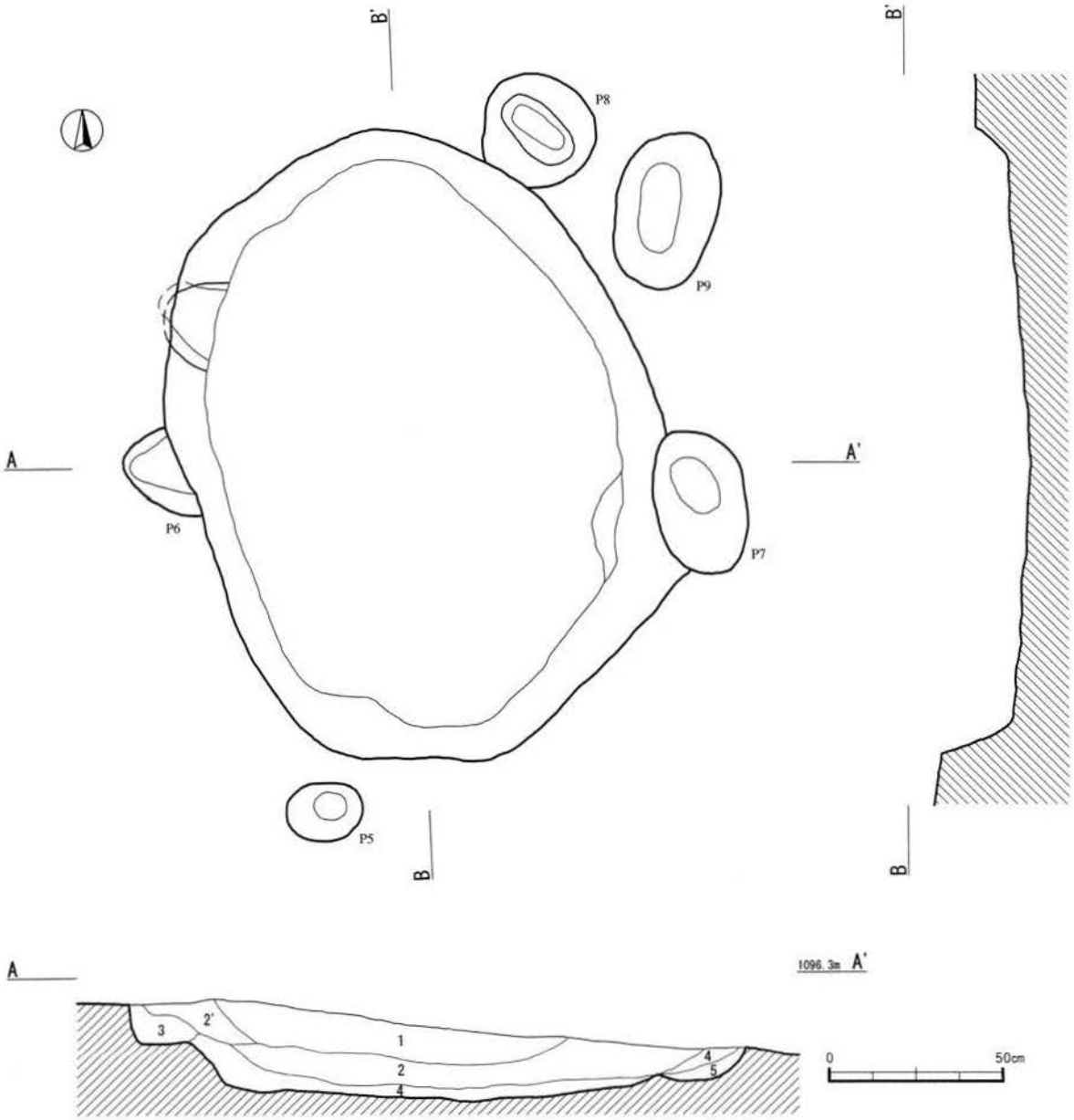
第Ⅲ章　柏木遺跡

第１節　縄文時代の遺構

1．小竪穴状遺構

１号小竪穴状遺構（第10図、図版２）

調査区の北東端に近いＣ・Ｄ－２区、段丘直下の斜面に位置する。西側で６号ピット、東側で７号ピットと重複し、北東側で８号ピットと接する。規模は180×135㎝、深さ29㎝を測る。長軸方位はＮ―20°―Ｗ



１号小竪穴状遺構

1　10YR2/2　黒褐色土　微粒のローム粒子を少量含み、小粒の灰白色スコリア・炭化粒子点在。粘性・締まりあり。
2　10YR2/3　黒褐色土　微粒のローム粒子を少量含み、小粒の灰白色スコリア点在。粘性あり、良く締まっている。
2'　10YR3/3　暗褐色土　２層＋ローム粒子を良く含む。
3　10YR4/4　褐色土　ローム粒子を団粒状に良く含み、ロームの混入が見られる。粘性・締まりあり。
4　10YR3/4　暗褐色土　小～中粒のローム粒子を団粒状に良く含み、灰白色スコリア点在。粘性・締まりともに強い。
5　10YR4/6　褐色土　ローム・ロームブロックを多量含む。粘性・締まりともに強い。

第10図　１号小竪穴状遺構

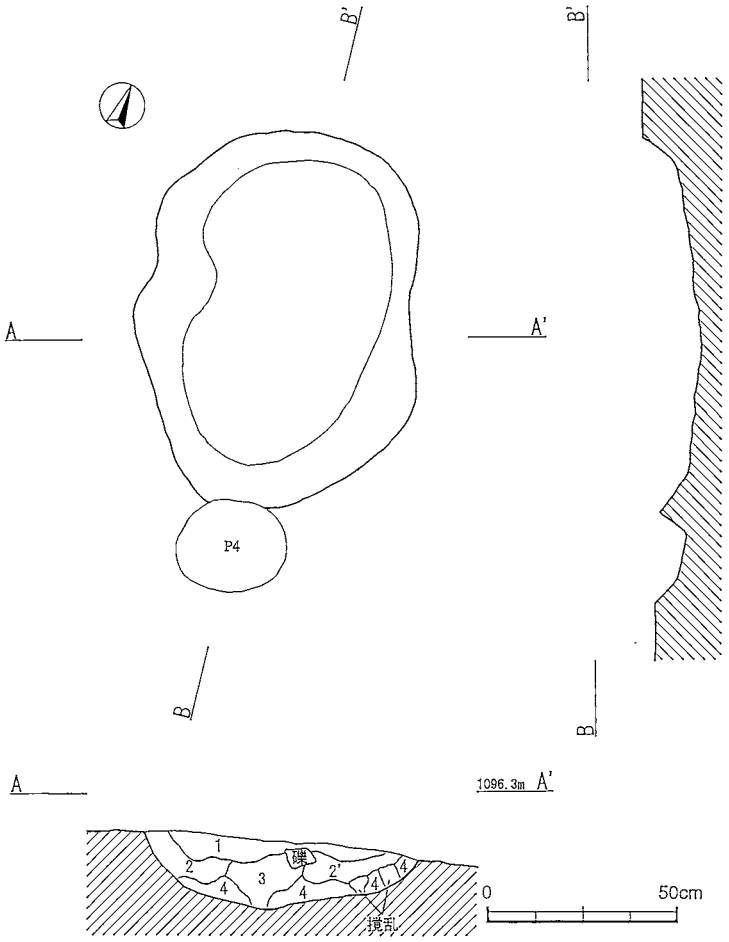
を示し、傾斜方向に直交している。平面形は不整な楕円形を呈する。壁は比較的急な角度で立ち上がる。底面は起伏に富み、中央部が窪む傾向にあるが、全体に堅く締まっており、部分的に硬化面の状況を呈している。壁際から周辺にかけて５基のピットが分布している他、北西壁側に幅25cm、奥行き20cmにわたって斜行気味の掘り込みが認められた。このうち、壁際に位置する６・７号ピットなどは竪穴の付帯施設であった可能性も考えられるが、周辺部ピットを含め本遺構との関係については判然としない。

覆土は上・中層が微粒のローム粒子を少量含み、灰白色スコリアが点在する黒褐色土で、上層には炭化粒子が点在する。下層はローム粒子を団粒状に良く含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

2. 土　坑

１号土坑（第11図、図版２）

調査区の北東端に近いＣ－１・２区、段丘直下の斜面に位置する。南端は４号ピットと接する。規模は99×73cm、深さ20cmを測る。長軸方位はＮ―20°―Ｗを示し、傾斜方向に直交している。平面形は開口部・底部とも不整な長楕円形を呈する。壁は開きながら立ち上がり、底面は緩い丸底状を呈する。覆土は上層が微粒のローム粒子・灰白色スコリアを少量含む黒褐色土で、下位に行くに従いローム・ローム粒子を良く含み、底部付近はローム主体の明褐色土である。遺物は上層より赤化破砕礫１点が出土した。



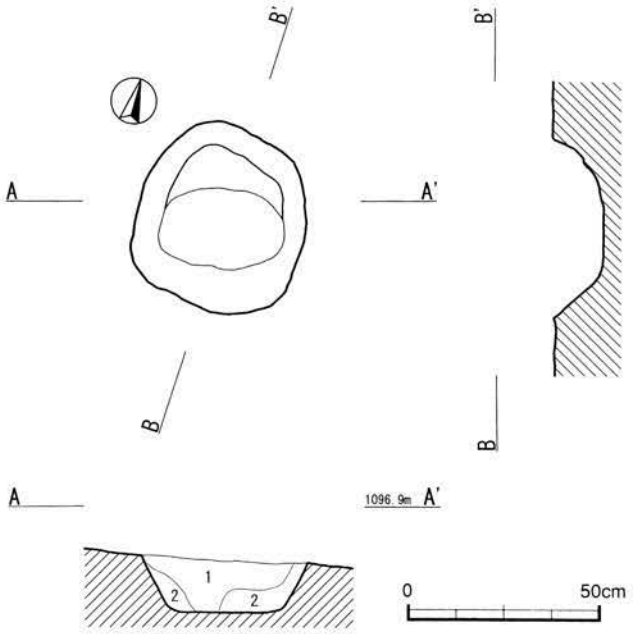
１号土坑

1	10YR3/2	黒褐色土	微粒のローム粒子・灰白色スコリアを少量含む。粘性・締まりあり。
2	10YR3/3	暗褐色土	微～小粒のローム粒子を含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2'	10YR3/3	暗褐色土	２層＋ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。
3	10YR4/4	褐色土	ローム粒子を団粒状に良く含み、大粒の灰白色スコリア僅かに点在。粘性・締まりあり。
4	10YR5/6	黄褐色土	ローム主体層。粘性・締まりやや強い。

第11図　１号土坑

２号土坑（第12図、図版２）

調査区中央部北寄りのＣ－２区、段丘縁辺の平坦面に位置する。規模は48×45cm、深さ15cmを測る。長軸方位はＮ―２°―Ｗを示す。平面形は開口部・底部とも不整な楕円形、もしくは隅丸方形に近い。壁は比較的急な角度で立ち上がり、北側に緩い段を有する。底面は比較的平坦である。覆土はローム粒子を含み、大粒の灰白色スコリアが点在する暗褐色土主体で、壁・底部付近はローム主体の明褐色土である。遺物は出土しなかった。

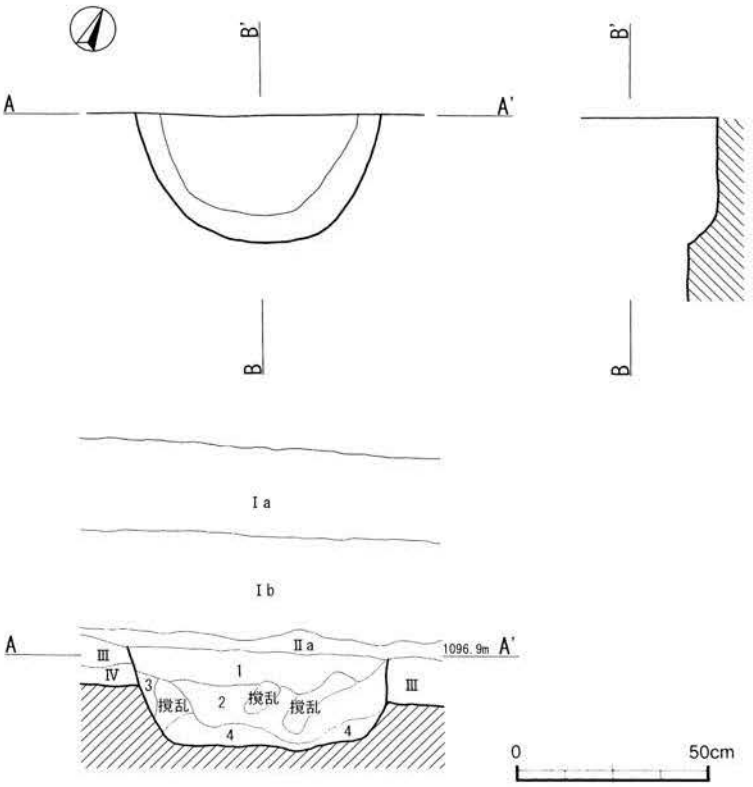


２号土坑
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、大粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR5/6　黄褐色土　ローム主体層。粘性・締まりあり。

第12図　２号土坑

３号土坑（第13図、図版２）

調査区北端のＣ－２区、段丘縁辺の平坦面に位置する。北側は調査区域外にかかる。検出部分での規模は（65）×（33）cm、深さ27cmを測る。長軸方位は不明である。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈するものと思われる。壁は急な角度で立ち上がり、底面は僅かな起伏を有するがほぼ平坦である。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒・暗褐色土主体で、底部付近はローム主体の褐色土である。遺物は出土しなかった。

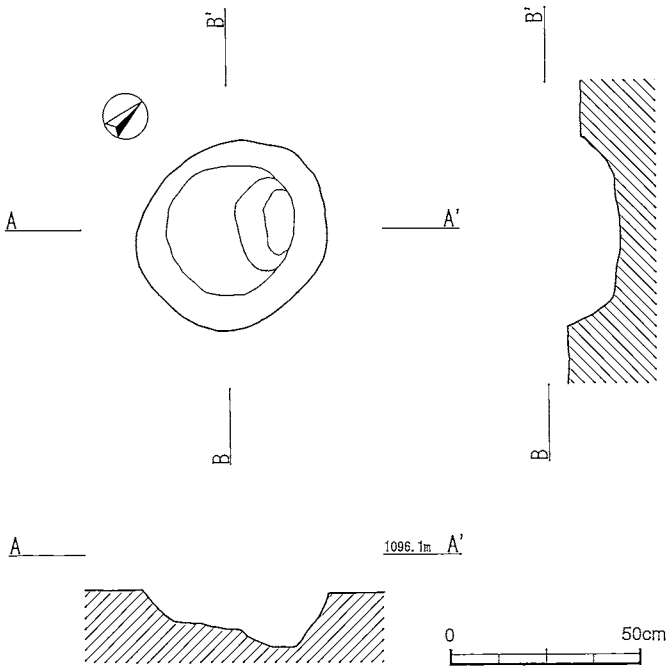


３号土坑
1　10YR3/2　黒褐色土　微粒のローム粒子点在。粘性・締まりあり。
2　10YR3/3　暗褐色土　微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性あり、良く締まっている。
3　10YR4/4　褐色土　ロームブロック（１～２cm）含む。粘性・締まりあり。
4　10YR4/4　褐色土　ロームブロック主体層。粘性・締まりあり。

第13図　３号土坑

4号土坑（第14図、図版2）

調査区の北東端に近いD－1区、段丘直下の斜面に位置する。規模は52×45cm、深さ15cmを測る。長軸方位はN― 43°―Eを示す。平面形は開口部・底部ともほぼ円形を呈する。壁は比較的急な角度で立ち上がり、底面はやや起伏をもち若干丸底状を呈しており、北東壁際に25×15cm、深さ5cm程度の掘り込みを有する。覆土はローム粒子を少量含み、灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。



第14図　4号土坑

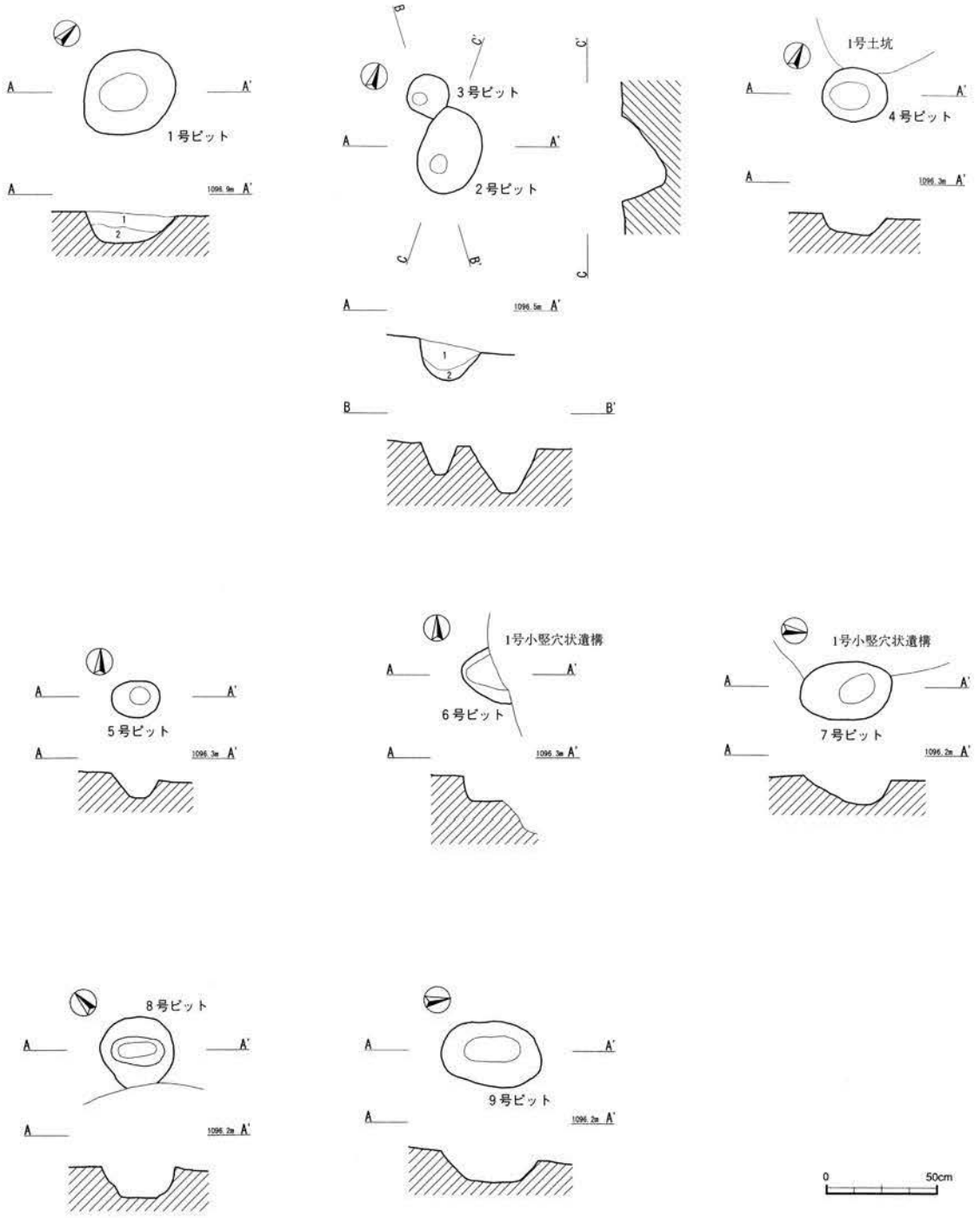
3. ピット（第15図、表2、図版2）

縄文時代の所産とされるピットは総数9基が検出された。数量的に少なく密集度も低いが、調査区の中央部北寄りから北東寄り、C・D－2区に偏在する傾向にある。地形的には段丘縁辺から直下斜面にあたり、土坑の分布域にも重なる。特に5～9号ピットなどは1号小竪穴状遺構の壁際から周辺にかけて重複あるいは近接して構築されている。小竪穴状遺構との関係については壁外柱穴等、何らかの付帯施設を想定させるものではあるが積極的な根拠に乏しく、前述したようにその性格については判然としない。

ピットの形状は楕円形ないし不整楕円形を呈するものと長楕円形を呈するものが各4基、略円形を呈するものが1基である。開口部の規模は20cm台が4基、30cm台が2基、40cmを超えるものも3基を数える。深さは10～20cmの深度に収まり概して浅い。覆土についてはローム粒子を少量含み、灰白色スコリアが点在する黒褐色土と暗褐色土を主体としており、P5では炭化粒子も点在している。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

表2　ピット一覧

番号	位置	開口部（cm）	深さ（cm）	形　状	覆　　土	備　考
1	C-2	41×38	14	略円形	第15図参照	
2	C-2	39×27	20	楕円形	第15図参照	
3	C-2	(20) ×19	15	円形		
4	C-2	29×24	10	楕円形	黒褐色土。ローム粒子少量、灰白色スコリア点在。	
5	C-2	22×17	11	楕円形	暗褐色土。ローム粒子含、灰白色スコリア・炭化粒子点在。	
6	C-2	27× (15)	12	―		
7	D-2	42×26	13	楕円形		
8	D-2	34× (31)	14	略円形	黒褐色土。ローム粒子少量、灰白色スコリア点在。	
9	D-2	46×29	15	楕円形		



1号ピット
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、大粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR5/6　黄褐色土　ローム主体層。粘性・締まりあり。

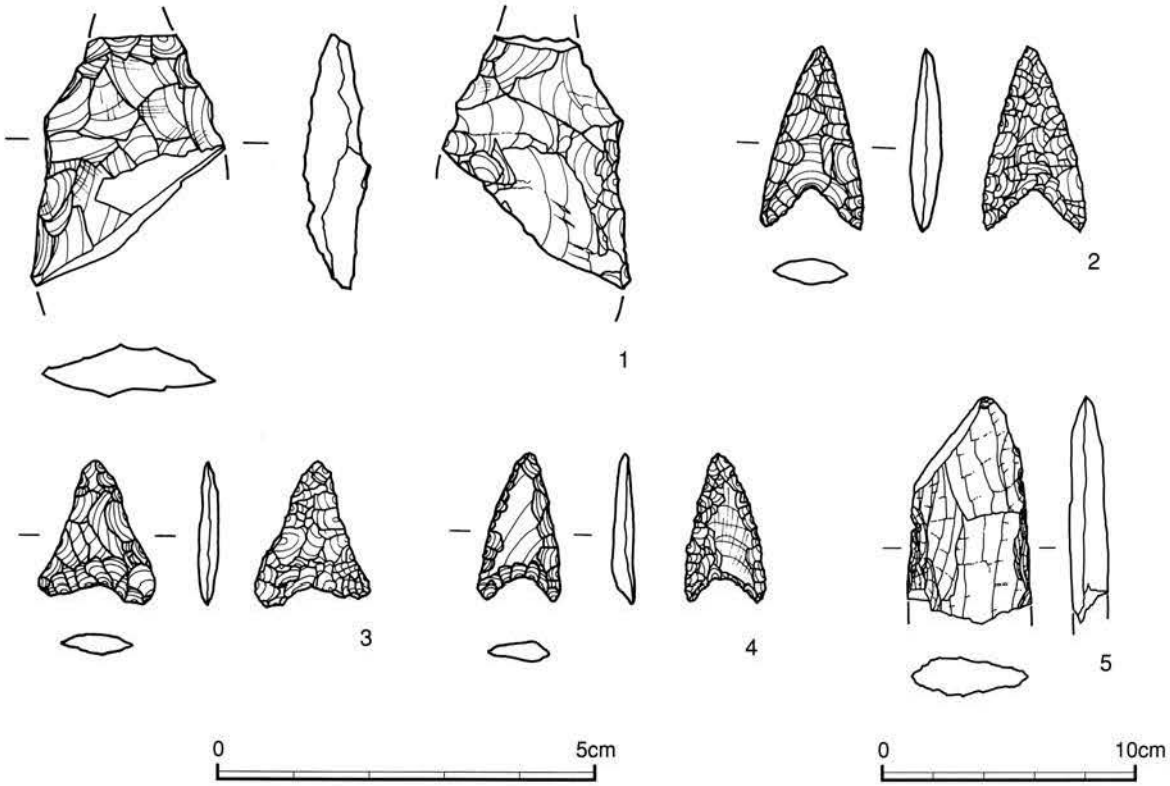
2号ピット
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、大粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR5/6　黄褐色土　ローム主体層。粘性・締まりあり。

第15図　ピット

第２節　縄文時代の遺物

１．石　器（第16図、表３、図版10）

１はチャート製で尖頭器の可能性がある。両面調整が施されている。２～４は凹基無茎の石鏃で２・３がチャート製、４は黒曜石製で周辺調整が施され、一次剥離面が見られる。５は凝灰岩製の打製石斧である。



第16図　石器

表３　石器一覧

番号	器　種	石　材	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重量（g）
1	尖頭器（？）	チャート	33	25	7	5.4
2	石鏃	チャート	24	14	3	0.9
3	石鏃	チャート	19	14	3	0.6
4	石鏃	黒耀石	20	11	3	0.6
5	打製石斧	軟質細粒凝灰岩	89	49	15	67.0

第Ⅳ章　細畑遺跡

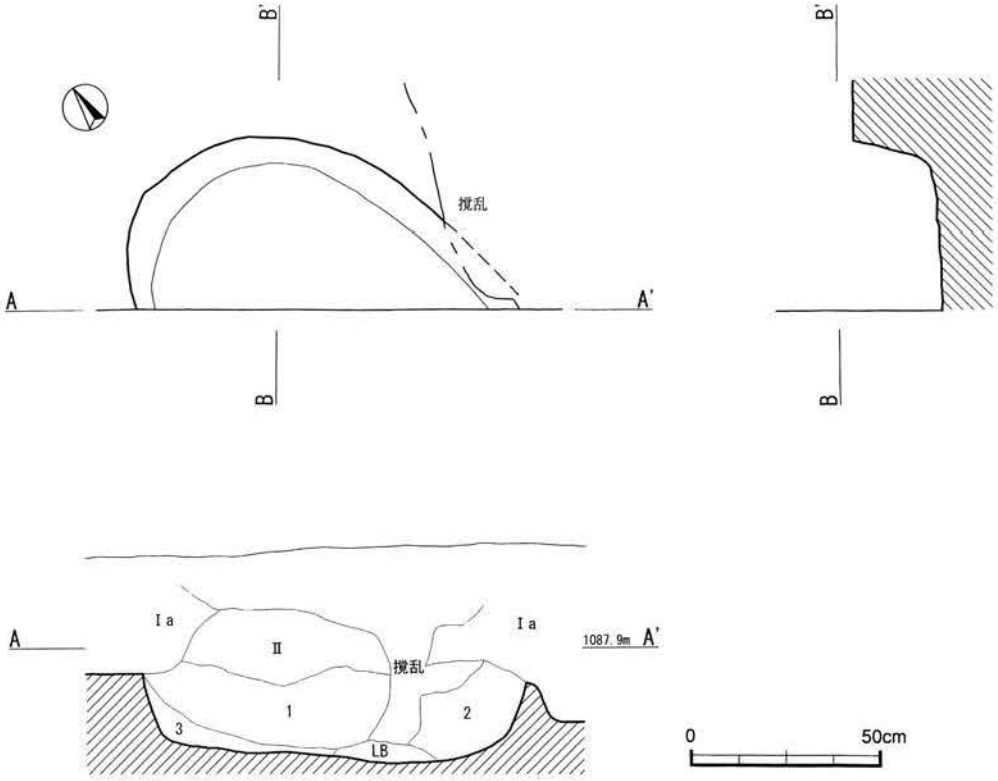
第１節　縄文時代の遺構

1. 土　坑

１号土坑（第17図）

調査区中央部の南壁際、Ｂ－２・３区に位置する。南側は調査区域外にかかり、東側立ち上がり付近は耕地造成によって削平されている。検出部分での規模は（85）×（70）㎝、深さ25㎝を測る。長軸方位は不明である。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、底面は僅かに丸底状を呈する。覆土はローム粒子を微量含み、灰白色スコリア・橙色スコリア・炭化粒子が点在する黒褐色土主体で、東側はローム粒子が団粒状に混入している。遺物は出土しなかった。

１号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　微粒のローム粒子を僅かに含み、灰白色スコリア・橙色スコリア・炭化粒子点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/6　褐色土　ローム粒子を団粒状に含む。粘性・締まりあり。
3　10YR3/4　暗褐色土　ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。

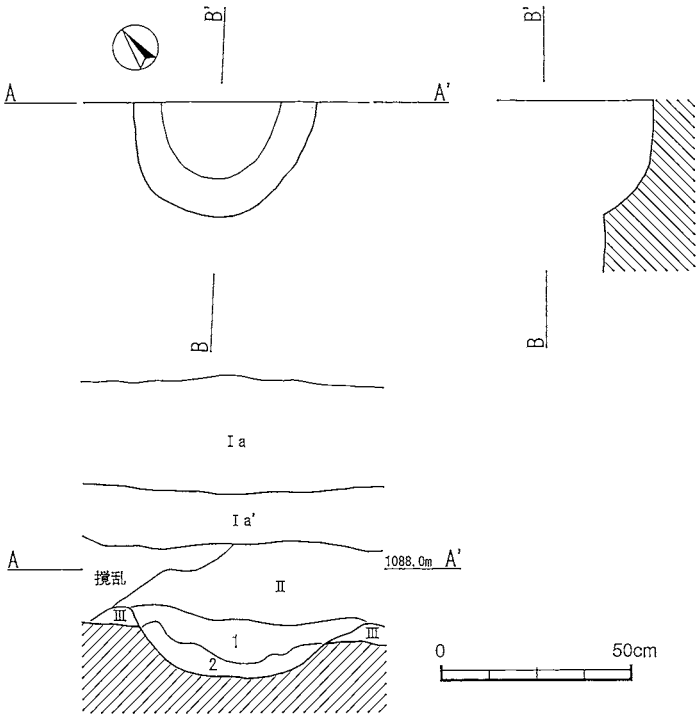


第17図　１号土坑

2号土坑（第18図、図版3）

調査区中央部の北壁際、B－2区に位置する。北東側は調査区域外にかかる。検出部での規模は（30）×（49）cm、壁面観察からⅢ層を掘り込んで構築されており深さ18cmを測る。長軸方位は不明である。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈するものと思われる。壁は開きながら立ち上がり、底面は緩い丸底状を呈する。覆土は上・中層が微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土、下層はロームが斑紋状に混入する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

2号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　極微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。

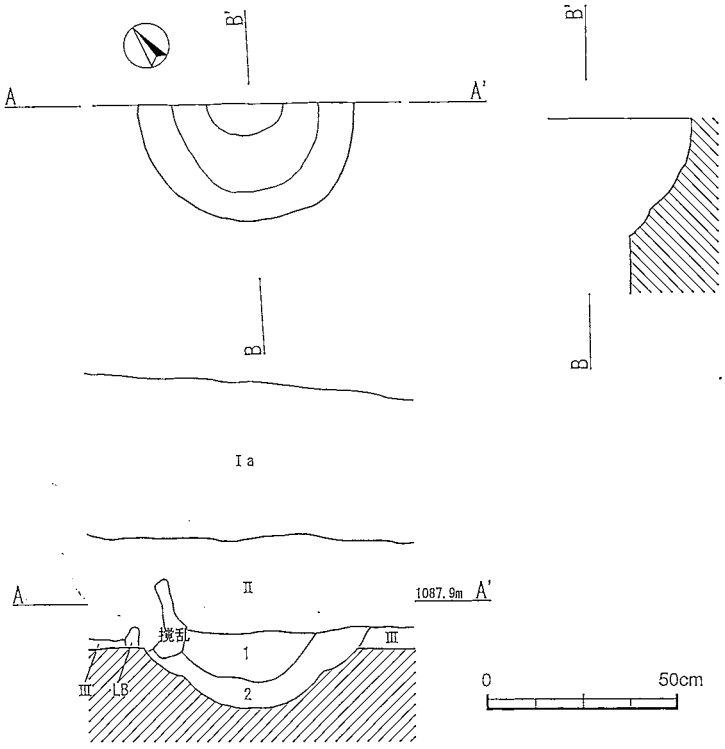


第18図　2号土坑

3号土坑（第19図、図版3）

調査区中央部の北壁際、B－2区に位置する。北側は調査区域外にかかる。検出部での規模は（58）×（30）cm、壁面観察からⅢ層を掘り込んで構築されており深さ20cmを測る。長軸方位は不明である。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈するものと思われる。壁は中位に段を有し開きながら立ち上がり、底面は丸底状を呈する。覆土は上層が極微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土で、壁際から底部にかけてはロームが斑紋状に混入する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

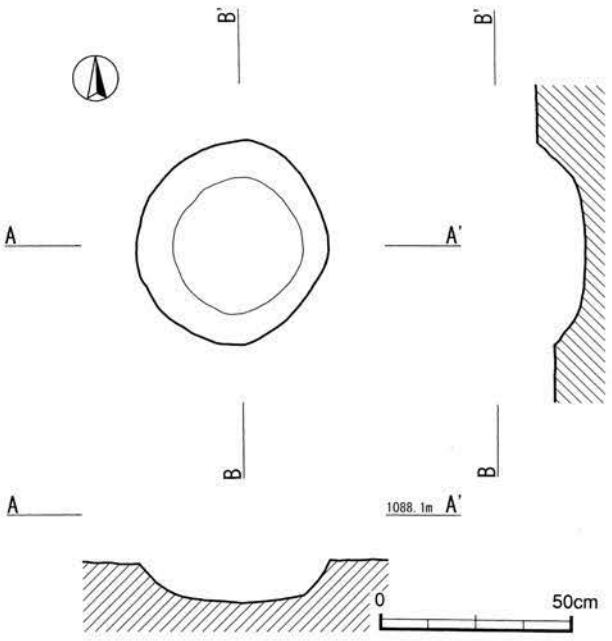
3号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　極微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。



第19図　3号土坑

４号土坑（第20図）

調査区北西部、Ａ－１区に位置する。規模は51×49cm、深さ12cmを測る。平面形は開口部・底部とも略円形を呈する。壁は開きながら立ち上がり、底面は緩い丸底状を呈する。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。

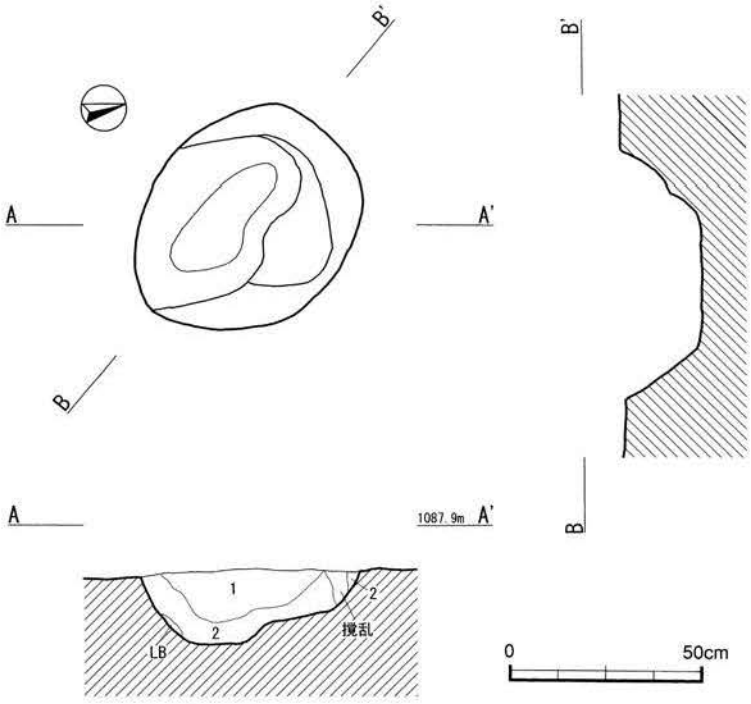


第20図　４号土坑

５号土坑（第21図、図版３）

調査区中央部、Ｂ－２区に位置する。規模は66×53cm、深さ21cmを測る。長軸方位はN— 38°—Wを示す。平面形は開口部が楕円形、底部は長楕円形を呈する。壁は開きながら立ち上がり、中位にテラス状の緩い傾斜面を有する。北東側に小テラスをもち、底部はほぼ平坦である。覆土は上層が極微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土で、壁際から底部にかけてはロームが斑紋状に混入する暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

５号土坑
1　10YR2/2　黒褐色土　極微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。



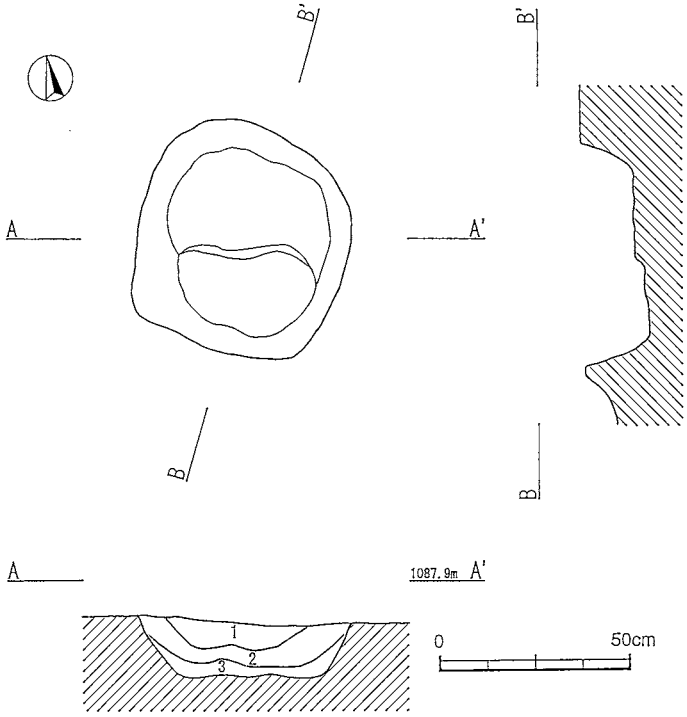
第21図　５号土坑

6号土坑（第22図、図版3）

調査区東部寄りのC－2区に位置する。規模は59×56cm、深さ18cmを測る。長軸方位はN— 27°—Eを示す。平面形は開口部が隅丸方形、底部は不整な隅丸方形を呈する。壁は急な角度で立ち上がる。底部には段差があり、北側に比べ南側が3～4cm程度低い。底面には小規模な起伏が見られるが概ね平坦である。覆土は上層が極微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土、中層がローム粒子が斑紋状に混入する暗褐色土、底部から壁際はロームの混入が多い褐色土である。遺物は出土しなかった。

6号土坑

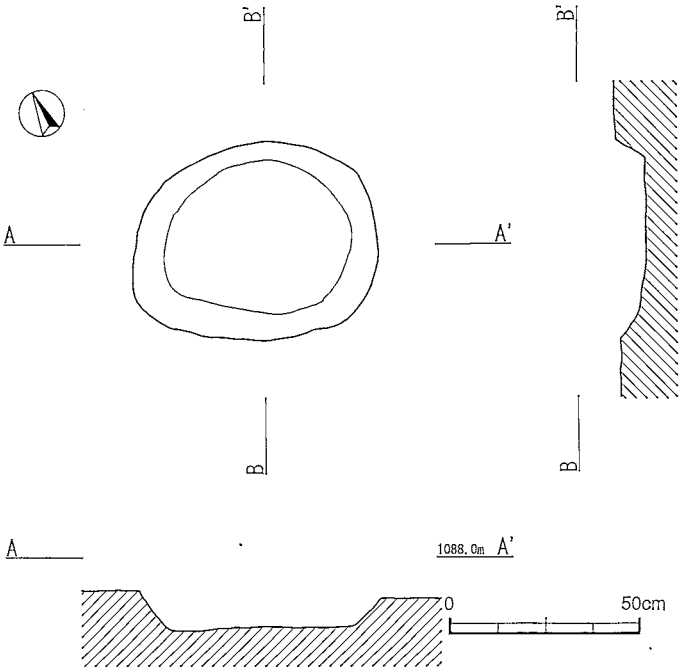
1	10YR2/2	黒褐色土	極微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2	10YR3/4	暗褐色土	ロームが斑紋状に混入。粘性・締まりあり。
3	10YR4/4	褐色土	全体にロームの混入多い。粘性・締まりあり。



第22図　6号土坑

7号土坑（第23図、図版3）

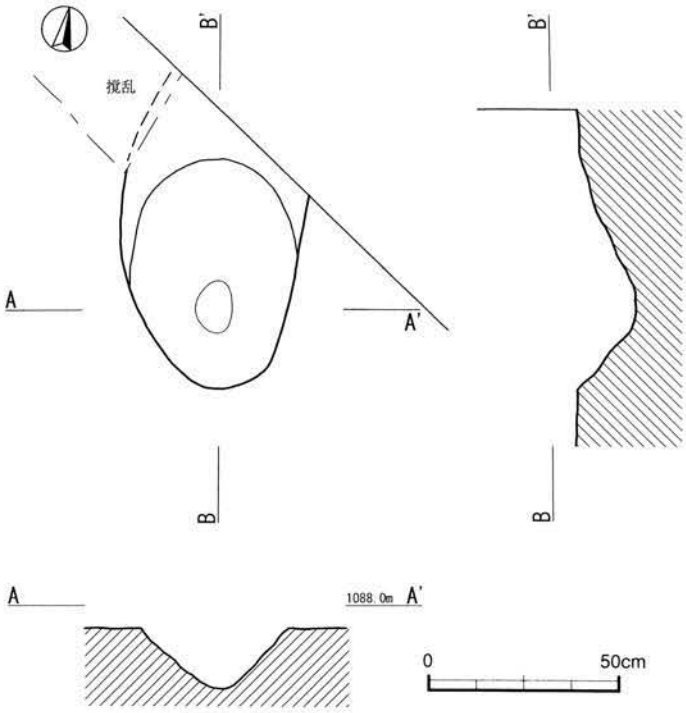
調査区中央の北西寄り、B－2区に位置する。規模は65×52cm、深さ10cmを測る。長軸方位はN— 65°—Wを示す。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈する。壁はやや開きながら立ち上がり、底面は僅かに起伏が見られるが概ね平坦である。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。



第23図　7号土坑

８号土坑（第24図）

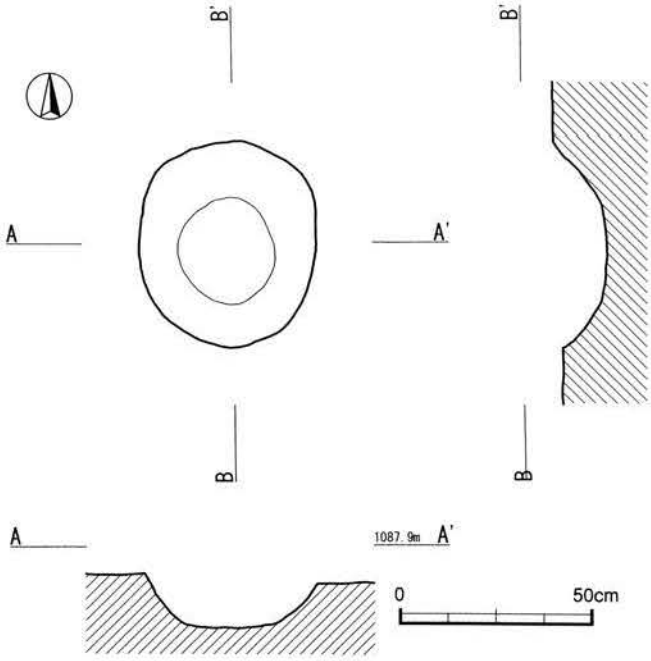
調査区の北西部の北壁際、Ｂ－１・２区に位置する。北側は調査区外にかかる。検出部での規模は（82）×（48）㎝、深さ16㎝を測る。長軸方位はN―11°―Wを示す。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈する。壁は開きながら立ち上がり、北側は緩いスロープ状となっている。短軸上での断面形は擂鉢状を呈する。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。



第24図　８号土坑

９号土坑（第25図）

調査区中央部、Ｂ－２区に位置する。規模は54×46㎝、深さ15㎝を測る。平面形は開口部・底部とも略円形を呈する。壁は開きながら立ち上がり、底面は緩い丸底状を呈する。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。



第25図　９号土坑

10号土坑（第26図）

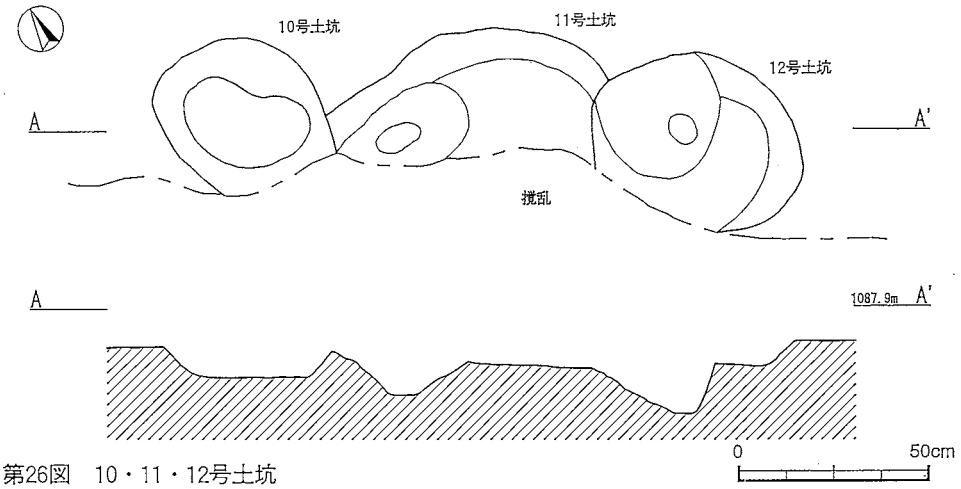
調査区南東部、Ｃ－２・３区に位置する。南側は耕地造成によって一部破壊され、南東部立ち上がり付近は11号土坑と重複する。検出部での規模は（50）×39㎝、深さ９㎝を測る。長軸方位はN―52°―Wを示す。平面形は底部が楕円形、開口部も同様の形状と思われる。壁は比較的急角度で立ち上がる。底面は平坦である。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。

11号土坑（第26図）

調査区南東部、Ｃ－３区に位置する。南側は耕地造成によって破壊され、北西側は10号土坑と、南東側は12号土坑と重複する。検出部での規模は（71）×（31）cm、底部は北西側に35×20cm規模の楕円形状の掘り込みを有し、深さ14cmを測る。長軸方位はN―89°―Wを示す。平面形は開口部･底部とも楕円形を呈する。壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。

12号土坑（第26図）

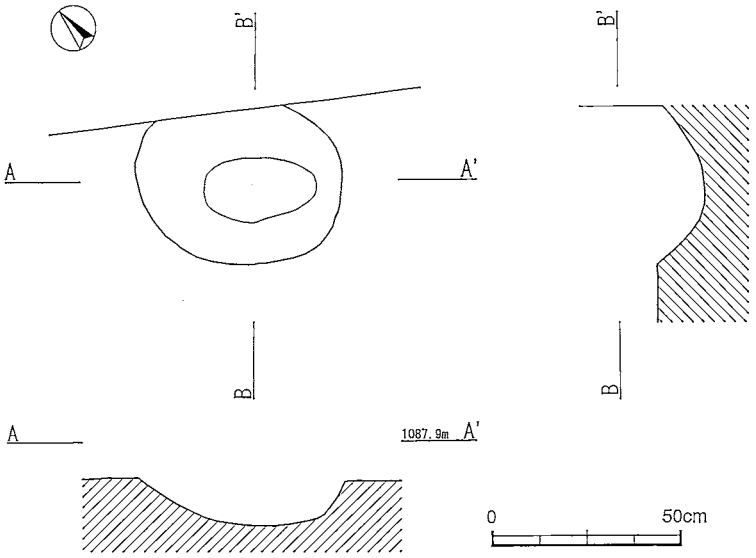
調査区南東部、Ｃ－３区に位置する。南側は耕地造成によって破壊され、北西側は11号土坑と重複する。検出部での規模は（58）×（43）cm、底部北側に32×31cmの円形の掘り込みを伴い深さ19cmを測る。長軸方位はN―31°―Wを示す。平面形は開口部･底部とも楕円形を呈するものと思われる。壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は10・11号土坑と同様、微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。



第26図　10・11・12号土坑

13号土坑（第27図）

調査区中央部の北壁際、Ｂ・Ｃ－２区に位置する。北側の一部が調査区域外にかかる。検出部での規模は55×（46）cm、深さ13cmを測る。長軸方位はN― 48°―Wを示す。平面形は底部が楕円形、開口部も楕円形を呈するものと思われる。壁は開きながら立ち上がり、底面は丸底状を呈する。覆土は微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体となっている。遺物は出土しなかった。

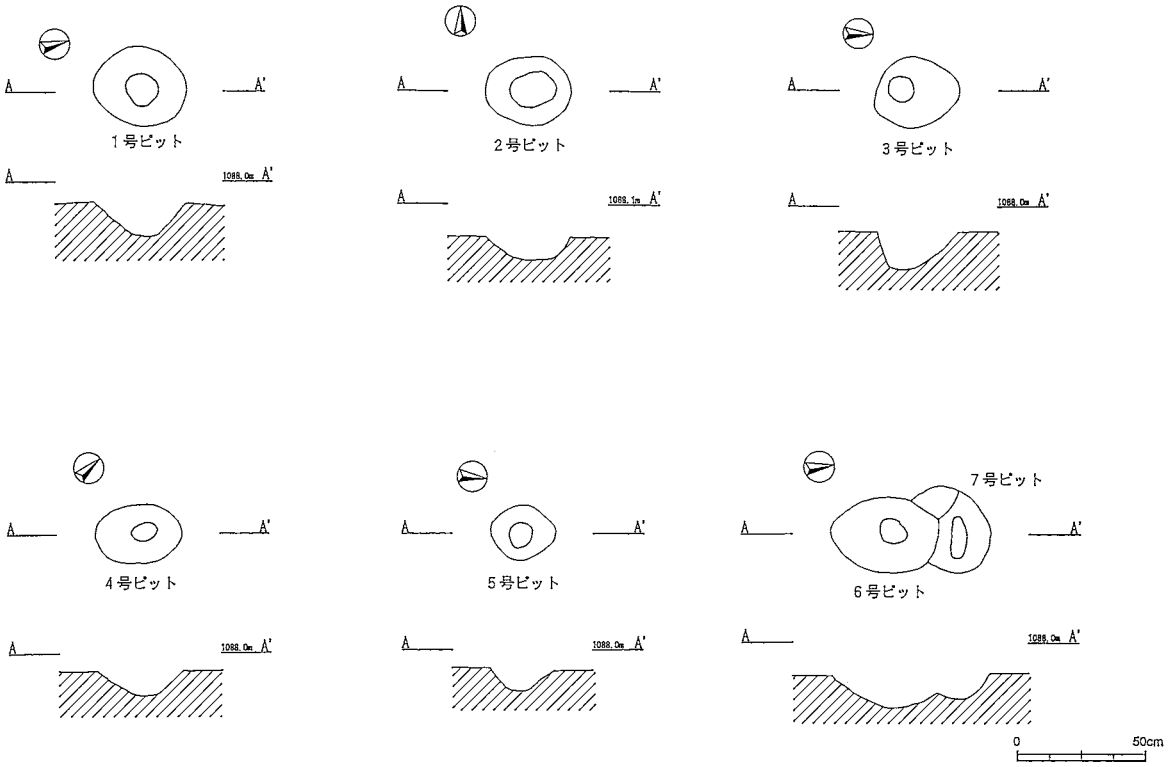


第27図　13号土坑

2. ピット（第28図、表４、図版３）

ピットは総数７基が検出された。数量的に少なく密集度も低いが、調査区の北西寄り、Ａ－１区からＢ－２区に偏在する傾向にある。土坑の分布域の外縁にあたり、帯状の分布を見せているが、調査区が狭小なため現状でのピットの配置からピット列や建物等の存在を想定するのは困難である。

ピットの形状は楕円形ないし不整楕円形を呈するものが５基、長楕円形を呈するものが２基である。開口部の規模は長軸長33～37cmが５基と大半を占め、20cm台と40cm台のものが各１基を数える。深さは８～15cmの深度に収まり概して浅い。断面形は壁が開きながら立ち上がり丸底状を呈するものが殆どである。覆土はローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土が主体としているものが多い。何れのピットからも遺物は出土しなかった。



第28図　ピット

表４　ピット一覧

番号	位置	開口部（cm）	深さ（cm）	形状	覆土	備考
1	B-2	36×31	13	楕円形	黒褐色土。ローム粒子・灰白色スコリア点在。	
2	A-1	34×27	9	楕円形		
3	B-2	33×28	15	不整楕円形	黒褐色土。ローム粒子少量、灰白色スコリア点在。	
4	B-2	35×23	10	長楕円形		
5	B-2	26×22	8	不整楕円形	暗褐色土。ローム粒子、灰白色スコリア点在。	
6	B-2	43×30	12	長楕円形	暗褐色土。ローム粒子含、灰白色スコリア点在。	
7	B-2	37×30	9	楕円形	暗褐色土。ローム粒子含、灰白色スコリア点在。	

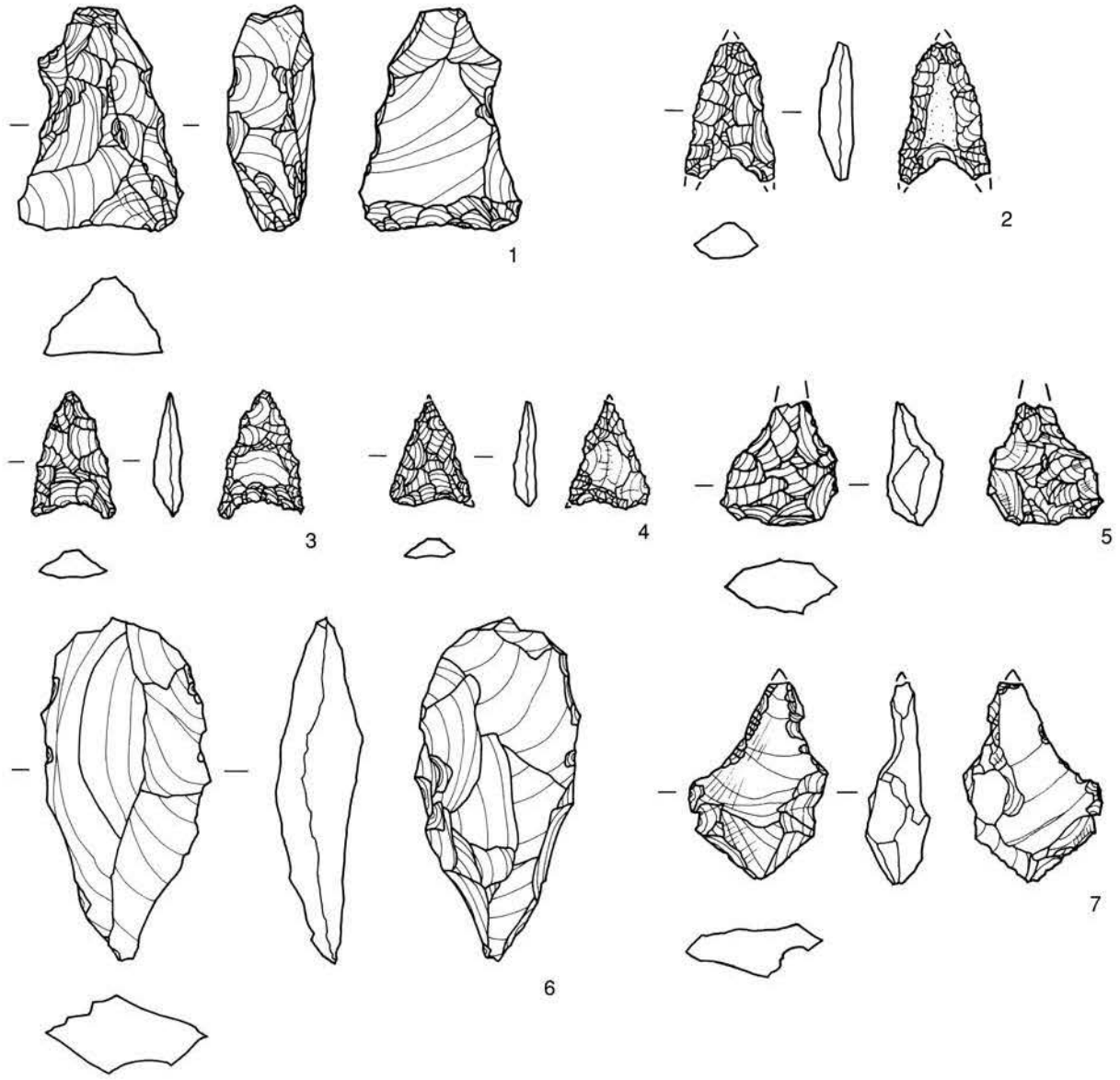
第２節　縄文時代の遺物

1. 石　器（第29図、表５、図版10）

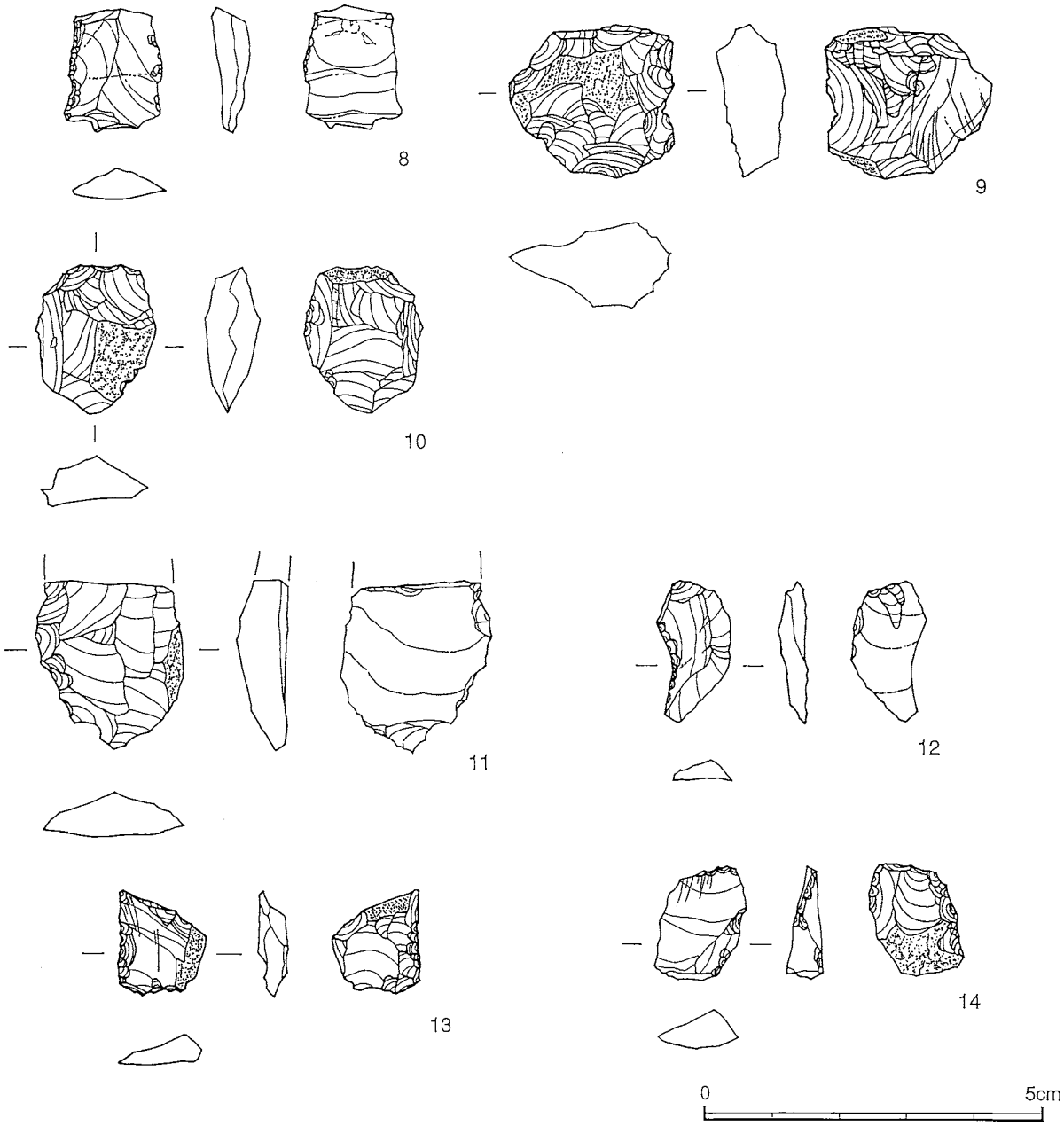
１は厚い黒曜石製の剥片を素材とし、急峻な周辺調整が施されている。石鏃の未成品の可能性がある。２～４は凹基無茎の石鏃で、黒曜石製である。５・７は黒曜石製の石錐で、５は刃部が欠損し、基部には粗い調整が施される。７は刃部に側縁調整が看取される。

６・８はスクレイパーである。６がチャート製、側縁部に粗い刃部が作出されている。８は硅質頁岩製で、側縁部に細かい刃部が看取される。９・10は黒曜石製の楔形石器である。何れも上下からの剥離痕が観察される。

11～14は二次加工のある剥片で、11・12が黒曜石製、13・14がチャート製である。側縁部に微細な調整痕が看取される。



第29図　石器(1)



第30図　石器(2)

表５　石器一覧

番号	器　種	石　材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	番号	器　種	石　材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
1	石鏃未製品（？）	黒耀石	32	24	11	7. 5	8	スクレイパー	珪質頁岩	18	15	5	1.2
2	石鏃	黒耀石	20	13	5	1. 0	9	楔形石器	黒耀石	23	25	13	6.8
3	石鏃	黒耀石	18	12	4	0. 6	10	楔形石器	黒耀石	22	18	8	3.2
4	石鏃	黒耀石	15	12	3	0. 4	11	二次加工のある剥片	チャート	26	22	7	4.0
5	石錐	黒耀石	18	17	8	1. 9	12	二次加工のある剥片	チャート	21	11	5	0.6
6	スクレイパー	チャート	50	24	12	10. 6	13	二次加工のある剥片	黒耀石	16	13	5	0.8
7	スクレイパー	黒耀石	28	20	8	3. 2	14	二次加工のある剥片	黒耀石	17	14	6	1.0

第Ⅴ章　大原遺跡

第１節　縄文時代の遺構

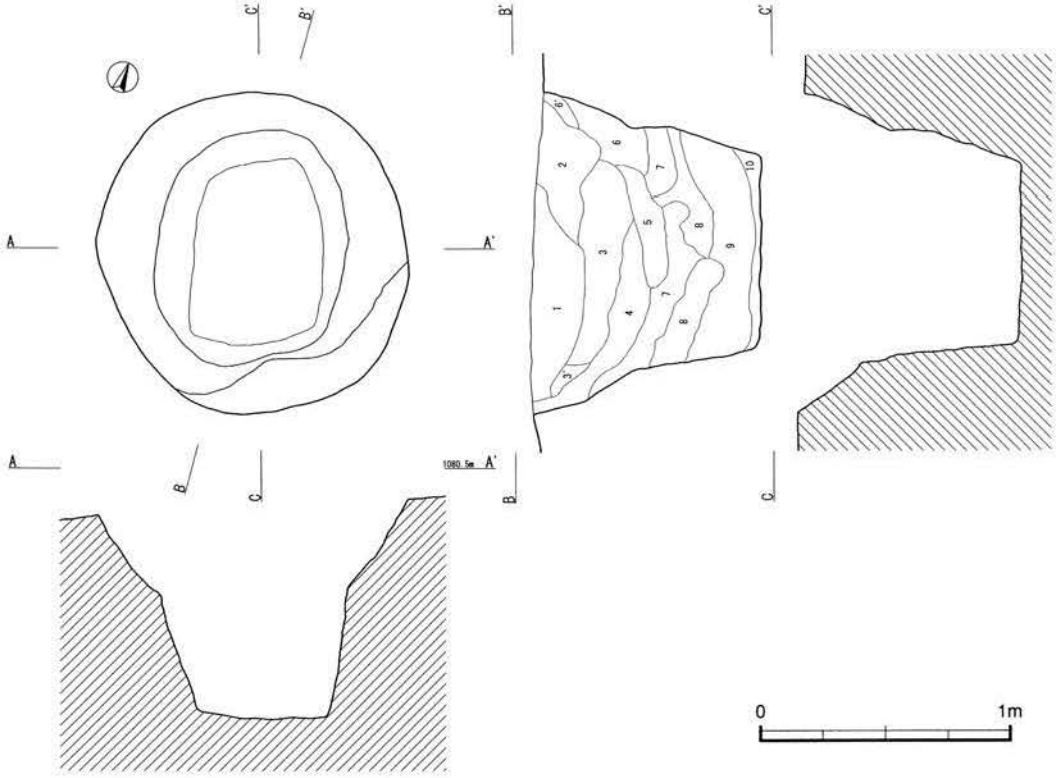
1. 土　坑

Ｊ１号土坑（第31図、図版５）

調査区北西部、Ｂ－３・４区に位置する。規模は開口部が125×122cm、底部は70×50cm、深さ92cmを測る。底部の長軸方位はN— 21°—Wを示す。平面形は開口部が略円形、底部は隅丸長方形を呈する。壁は低部からほぼ垂直に立ち上がり、中位より上位は崩落のため大きく開きながら開口部に至る。底面は小規模な起伏はあるものの概ね平坦である。坑底施設は検出されなかった。

覆土は大きく４層に分かれ、上層がローム粒子を含み、灰白色スコリア・炭化粒子が点在する黒褐色土、中層が粗粒のローム粒子を多量含む暗褐色土で、間層はロームブロックと褐色土ブロックの混合層となる。下層は崩落ロームブロック主体層。底部は粗粒のローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土である。

なお、中位の５層より炭化材が纏まって出土した。放射性炭素年代測定による年代は約5,600ＢＰ、樹種同定についてはコナラ属コナラ節との結果が得られている（付篇）。遺物は炭化材以外出土しなかった。



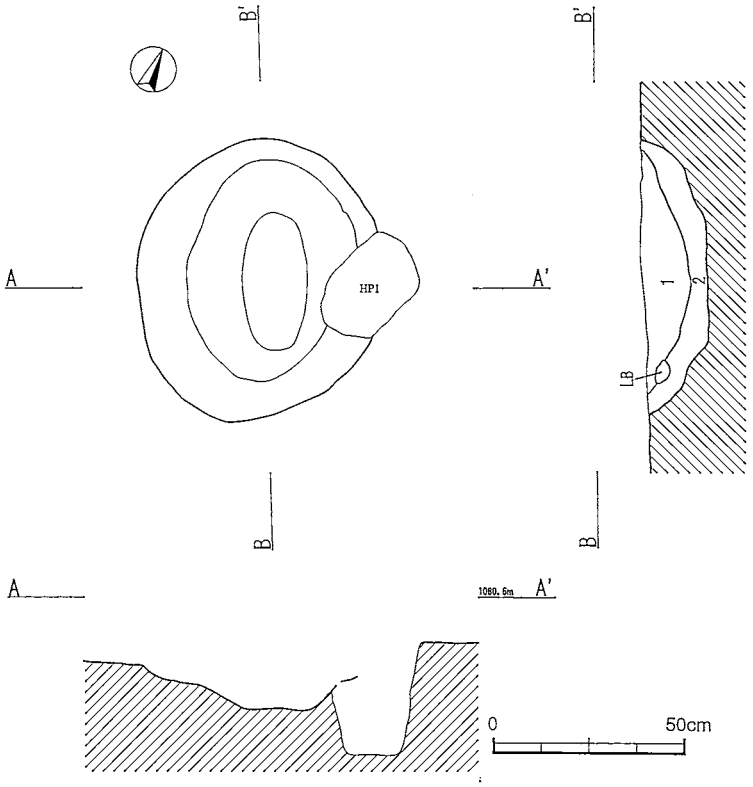
第31図　Ｊ１号土坑

Ｊ1号土坑

1	10YR2/1	黒色土	微～小粒のローム粒子を少量含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2	10YR2/2	黒褐色土	微～小粒のローム粒子を含み、微粒の灰白色粒子・大粒の炭化粒子点在。粘性・締まりあり。
3	10YR2/2	黒褐色土	微～小粒のローム粒子を良く含み、灰白色スコリア・大粒の炭化粒子点在。粘性・締まりあり。
3'	10YR2/2	黒褐色土	３層＋ローム粒子を多量含む。
4	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒子を団粒状に良く含み、大粒の炭化粒子・炭化材が混在する。微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
5	10YR3/4	暗褐色土	粗粒のローム粒子を多量含み、炭化材混在。粘性・締まりあり。
6	10YR3/4	暗褐色土	粗粒のローム粒子を多量含み、褐色土混入。粘性・締まりあり。
7	10YR5/6	黄褐色土	粗粒のローム粒子・ロームブロック（２～５cm）・褐色土ブロックの混合層。粘性・締まりあり。
8	10YR3/4	暗褐色土	粗粒のローム粒子を主体に、黒褐色土・褐色土ブロック混在。粘性・締まりあり。
9	10YR5/8	黄褐色土	ロームブロック主体層。粘性・締まり共に強い。
10	10YR2/3	黒褐色土	粗粒のローム粒子・ロームブロック（１～３cm）を含む。粘性・締まり共に強い。

Ｊ２号土坑（第32図、図版５）

調査区中央北寄り、Ｅ－３区に位置する。東側をＨ１号ピットに切られる。規模は72×62cm、深さ18cmを測る。長軸方位はN—24°—Wを示す。平面形は開口部・底部とも楕円形を呈する。壁は中位に段を有し開きながら立ち上がる。底面にはやや起伏が見られる。覆土は上層が微粒のローム粒子・灰白色スコリアが点在する黒褐色土で、下層はローム粒子を多量含む褐色土である。遺物は出土しなかった。



Ｊ２号土坑
1　10YR3/2　黒褐色土　微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/4　褐色土　ローム粒子を少量含み、ロームブロック（１～３cm）若干混入。粘性・締まりともに強い。

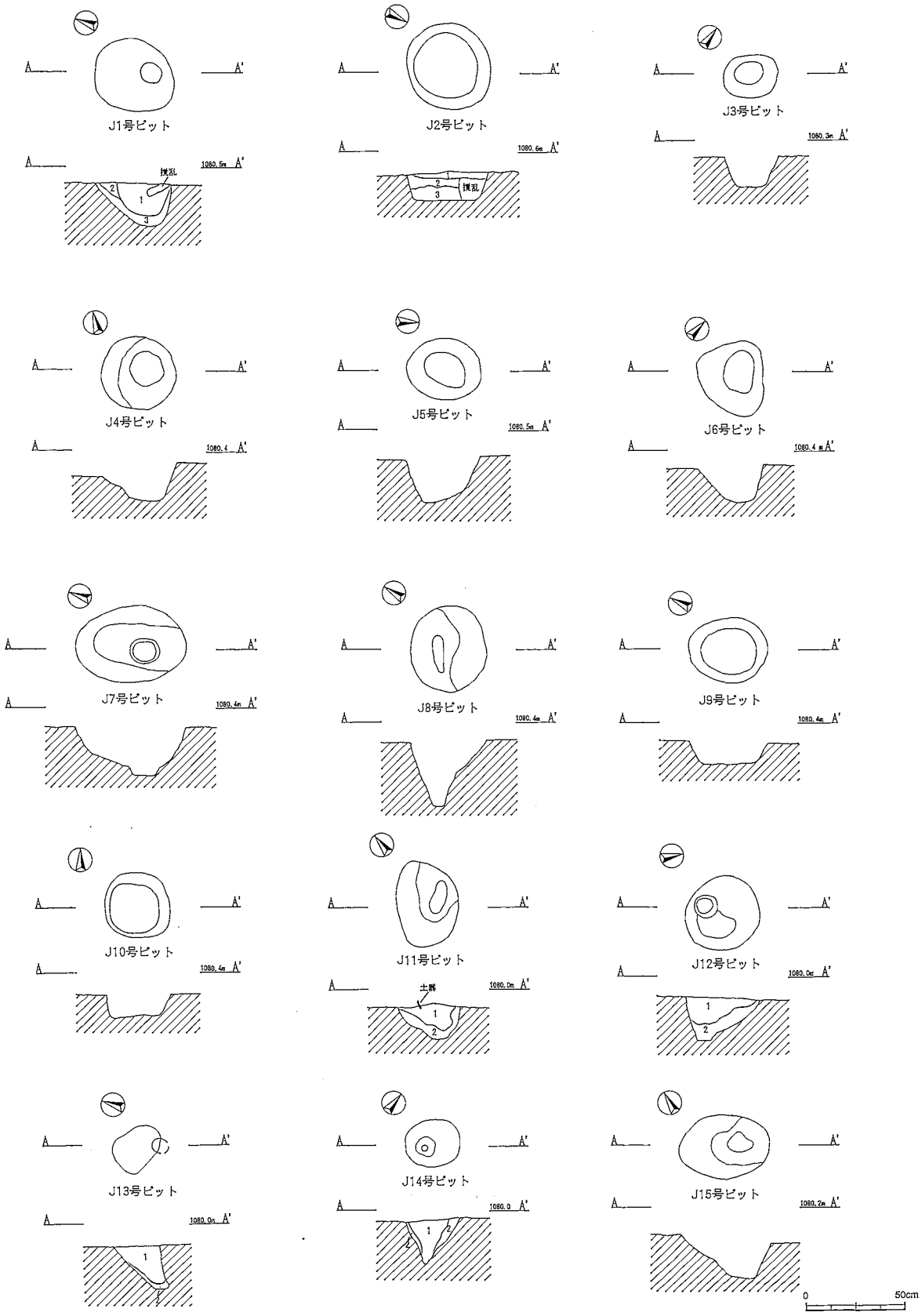
第32図　Ｊ２号土坑

2. ピット（第33図、表６、図版５）

ピットは総数15基が検出された。広範な面積に比して全体に散漫な状況ではあるが、調査区の北部と南部、Ｃ・Ｄ－４区とＥ・Ｆ－８区に偏在する傾向を見せている。特に北側のＪ５～10号ピットと南側のＪ11～15号ピットは比較的狭い範囲に纏まっているが、その配列等に規則性は認められない。

ピットの形状は楕円形ないし不整楕円形を呈するものが10基、長楕円形を呈するものが１基、円形ないし略円形を呈するものが４基である。開口部の規模は長軸長が40cmを超えるものが７基と最も多く、33～38cmを測るものが５基、26・27cmが３基である。深さは20～24cmのものが８基と約半数を占め、30cmを超えるものが１基、10cm台の浅いものが６基である。底部や断面形状に関しては、平坦な鍋底状を呈するＪ２・９・10号ピット、先細り状となるＪ８・13・14号ピット、底部に柱痕状の円形の掘り込みが認められるＪ７・12などがある。

覆土はローム粒子を少量含み、灰白色スコリアが点在する黒褐色・暗褐色土が主体となっている。遺物はＪ11号ピットの上層から押型文系土器１点（第34図２）が出土した。



第33図　縄文時代のピット

J１号ピット
1　10YR2/3　黒褐色土　微粒のローム粒子を一部団粒状に含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　ロームの混入が見られる。粘性・締まりあり。
3　10YR4/4　褐色土　ローム粒子を多量含み、ロームブロック（１～２cm）含む。粘性・締まりともに強い。

J２号ピット
1　10YR5/3　にぶい黄褐色土　水田の影響を受け、金属成分の集積著しい。
2　10YR2/3　黒褐色土　微粒のローム粒子を一部団粒状に含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
3　10YR4/4　褐色土　ローム粒子を含み、ロームブロック（１cm）の混入あり。粘性・締まりあり。

J11号ピット
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、ロームの混入が見られる。微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/6　褐色土　ローム主体層。暗褐色土が斑紋状に混入。粘性・締まりあり。

J12号ピット
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、ロームの混入が見られる。微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/6　褐色土　ローム主体層。暗褐色土が斑紋状に混入。粘性・締まりあり。

J13号ピット
1　10YR2/2　黒褐色土　微粒のローム粒子・灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/4　褐色土　ローム粒子を含み、ロームブロック（１cm）の混入あり。粘性・締まりあり。

J14号ピット
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を含み、ロームの混入が見られる。微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
2　10YR4/6　褐色土　ローム主体層。暗褐色土が斑紋状に混入。粘性・締まりあり。

表６　縄文時代のピット一覧

番号	位置	開口部（cm）	深さ（cm）	形　状	覆　　土	備　考
Ｊ１	Ｅ-４	41×36	21	楕円形	第33図参照	
Ｊ２	Ｅ-３	45×43	14	略円形	第33図参照	
Ｊ３	Ｃ-２	27×21	14	楕円形	黒褐色土。ローム粒子微量、灰白色スコリア点在。	
Ｊ４	Ｃ-２	37×37	20	円形	黒褐色土。ローム粒子少量、ロームブロック混、灰白色スコリア点在。	
Ｊ５	Ｃ-４	37×31	21	楕円形		
Ｊ６	Ｃ-４・５	38×32	17	不整楕円形		
Ｊ７	Ｄ-４	55×38	24	長楕円形		
Ｊ８	Ｃ-４	43×39	31	楕円形		
Ｊ９	Ｃ-４	40×33	11	楕円形		
Ｊ10	Ｃ-４	33×33	12	円形		
Ｊ11	Ｆ-８	42×31	16	不整楕円形	第33図参照	押型文系土器
Ｊ12	Ｆ-８	37×36	22	略円形	第33図参照	
Ｊ13	Ｆ-８	26×21	22	不整楕円形	第33図参照	
Ｊ14	Ｆ-８	27×24	22	楕円形	第33図参照	
Ｊ15	Ｅ-８	45×32	20	楕円形	暗褐色土。ローム粒子含、灰白色スコリア点在。	

第２節　縄文時代の遺物

１．土　器（第34図、図版９）

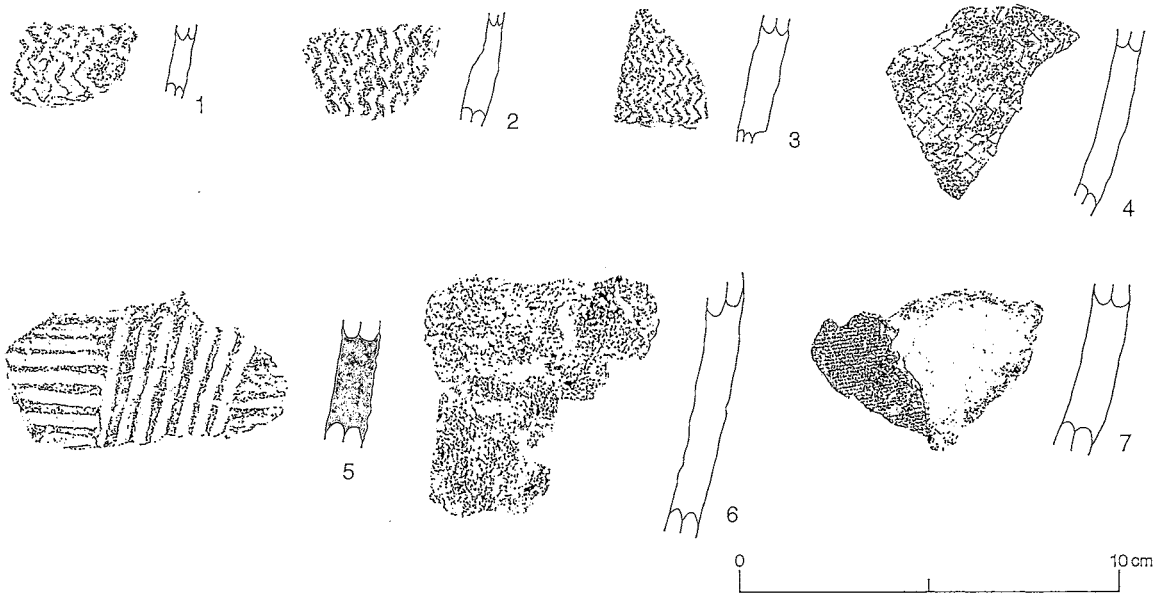
１～４は早期中葉の押型文土器である。いずれも振幅の弱い波状の山形文が縦位密接施文される。すべて小破片に限れており、原体の詳細を観察することは困難であるが、山形文が多少大振りの２から細身の４まで若干のバラエティーをもつ。器厚は５～６㎜と比較的薄手の作りであり、胎土には石英など鉱物質に富む細砂粒を特徴的に含む。外削げ状の輪積み痕を明瞭にとどめた３はやや軟質であるが、他の１・２・４は焼成が堅緻である。色調は３がややくすんだ褐色を呈する以外は暗褐色を呈する。器面は撫で調整によって整えられており、とりわけ４の裏面は丁寧に撫で潰されている。図示したもののほか、縦位の山形文が施文された微小破片が９点出土している。図示した１～４は木曽郡木曽福島町溝口遺跡出土の第Ⅰ群第１類Ａ種土器のうち胎土－ａに分類された個体群（註１）に対応する特徴を示しており、樋沢式の新しい段階から細久保式にかけての時期に位置づけられるものと考える。

５は中太の沈線文が斜位に複列に施文された個体。右傾および左傾の沈線文により文様構成がなされるが、両者は交叉することなく施文されており、詳細は不明ながらも幾何学状のモチーフを形成している可

能性が高い。胎土に白色砂粒と粗い繊維を含み、色調は暗茶褐色を呈する。器面には丁寧に撫で潰し調整が加えられており、焼成は良好。器厚は10㎜と厚手の作りである。文様などの特徴から早期中葉、貝殻沈線文系田戸上層式もしくはそれに並行する土器に比定されるものと考えられる。

6は無文の胴部破片である。外面に撫で調整に伴う横および斜方向の弱い擦痕が認められるほか、内面には横方向の調整痕が顕著に残る。調整は粗く、焼成も不良である。胎土に中粒砂および長石・雲母などを多く含み、色調は暗褐色を呈する。中期末葉～後期前半にかけての粗製土器である可能性がもっとも高いが、詳細な時期の特定は困難である。7も深鉢ないしは鉢形土器の胴部片で、外面は大半が剥離しているが磨きに近い丁寧な調整が施され表面は黒色を呈する。胎土は細砂粒を良く含み、灰色を呈する。図示したもののほか、6・7と同様、中期末葉～後期前半にかけての時期に位置づけられる底部破片1点がある。胎土に川砂様の粗粒砂を多く含み、深鉢形土器の一部と考えられる。

（註1）石英等ガラス質の結晶性鉱物の微細粒を特徴的に含むもの。



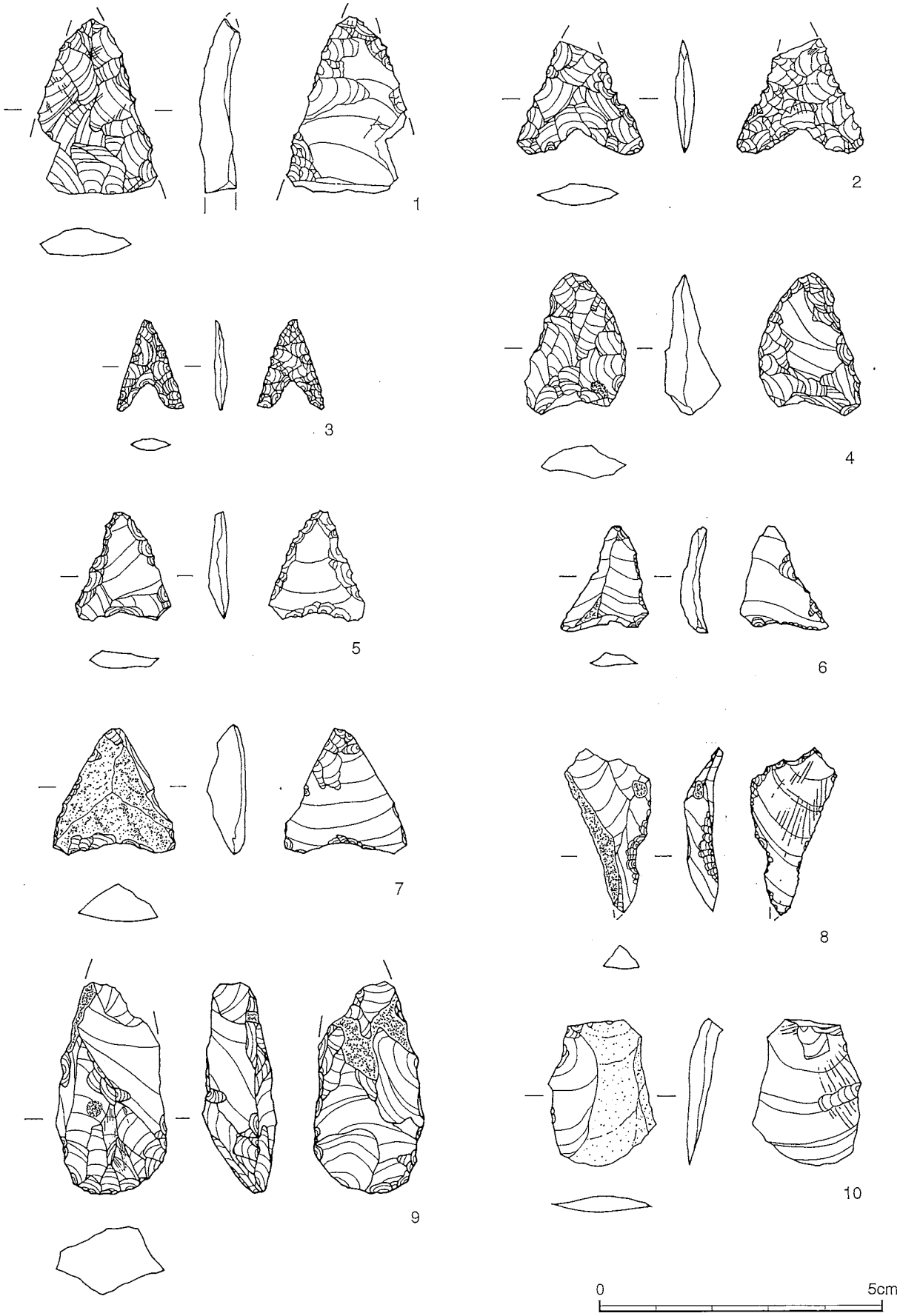
第34図　土器

2. 石　器（第35・36図、表7、図版10）

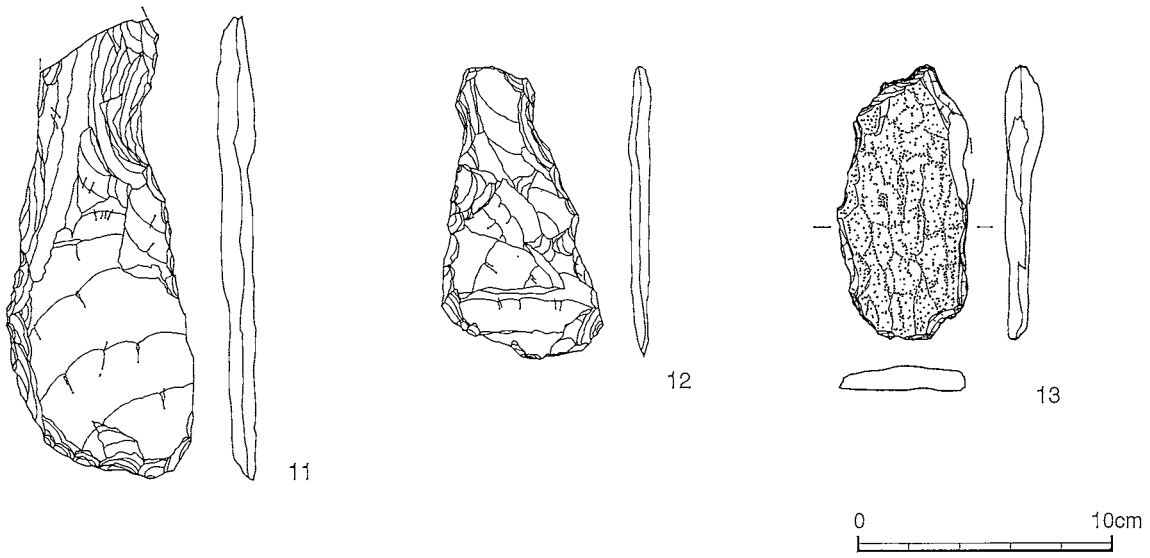
1は石鏃の未製品と考えられる。基部に切断面を有し、下方からの基部調整が加えられている。チャート製である。2～7は凹基無茎の石鏃であるが、4～7は未製品と考えられる。2が頁岩製、3がチャート製、4・6・7が黒曜石製、5は安山岩製である。

8は黒耀石製のスクレイパーで、側縁部に急峻な刃部が見られる。9は楔形石器で黒曜石製である。主に上下からの対向する剥離痕が観察され、下端にツブレが見られる。10は黒曜石製の縦長剥片で、側縁部の一部に使用痕と思われる細かい剥離痕がある。

11～13は打製石斧で、いずれもホルンフェルス製である。11・12は頭部近くに抉りを有する。13は楕円形を呈する資料である。



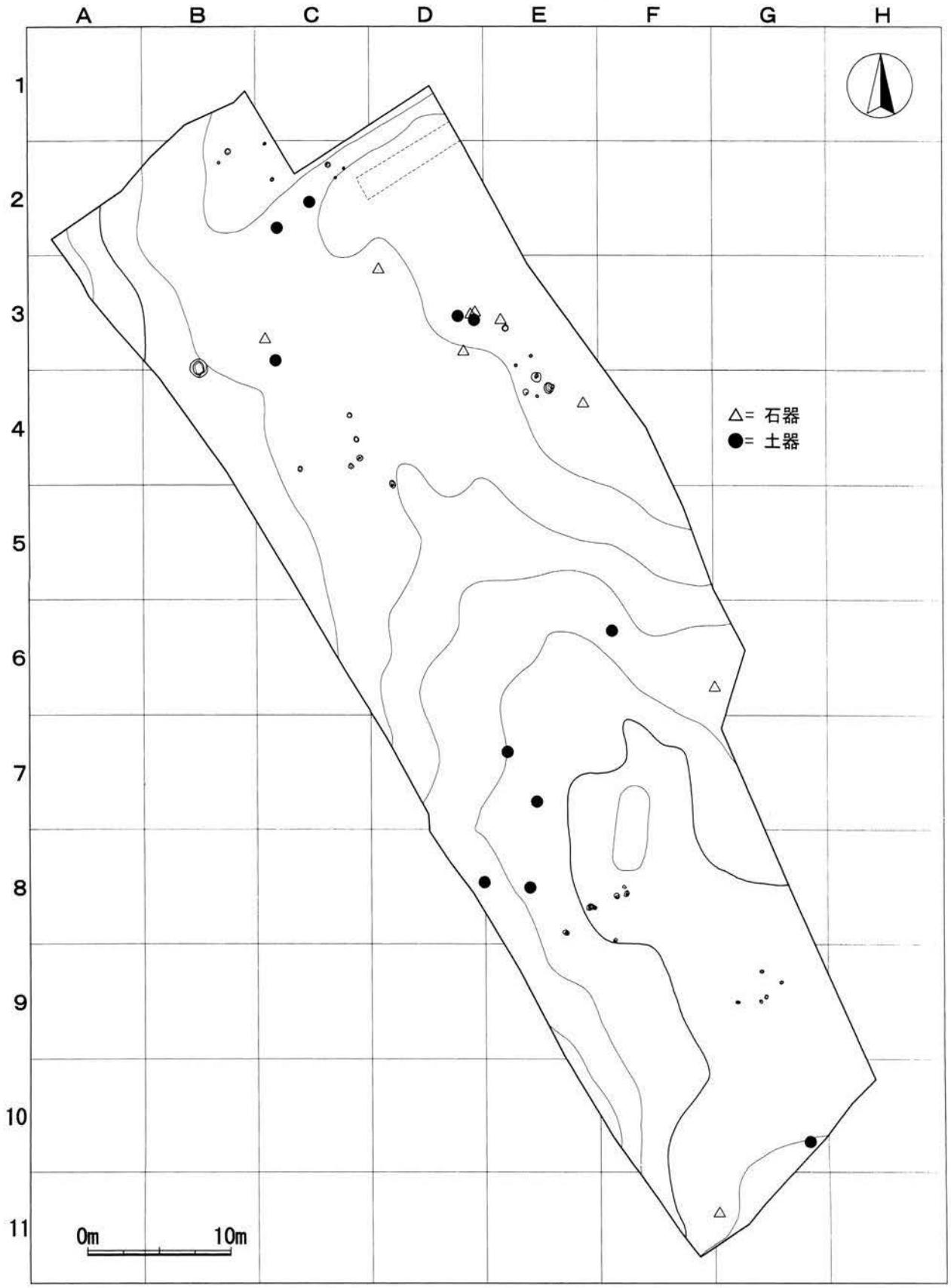
第35図　石器(1)



第36図　石器(2)

表７　石器一覧

番号	器　種	石　材	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重量（g）
1	石鏃未製品	チャート	31	22	5	3.6
2	石鏃	頁岩	21	23	4	1.2
3	石鏃	チャート	16	12	2	0.3
4	石鏃未製品	黒耀石	25	18	6	2.5
5	石鏃未製品	安山岩	19	17	3	0.9
6	石鏃未製品	黒耀石	19	15	3	0.7
7	石鏃未製品	黒耀石	23	22	7	2.5
8	スクレイパー	黒耀石	30	15	4	1.5
9	楔形石器	黒耀石	38	20	12	7.9
10	縦長剥片	黒耀石	183	75	15	206.6
11	打製石斧	ホルンフェルス	116	63	9	78.7
12	打製石斧	ホルンフェルス	110	52	15	89.2
13	打製石斧	ホルンフェルス	27	20	3	1.5



第37図　縄文時代遺物分布図

第３節　歴史時代の遺構

1. 掘立柱建物

Ｈ１号掘立柱建物（第38図、図版５）

調査区の中央部北側、Ｅ－３・４区に位置する。規模は梁行１間（1.25m）×桁行１間（2.60m）を測り、梁行方位はN―55°―Eを示す。建物を構成する柱穴の規模は長軸長21～30cm、深さ20～33cmを測る。平面形は円形ないしは隅丸方形・長方形を呈する。覆土は全て同質のもので、上層がローム粒子を良く含む黒褐色土で、締まりに乏しい。下層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。

建物の中央部に大形礫を伴い、柱穴とほぼ同質の覆土をもつ円形の土坑が検出されている。建物に付帯する施設の可能性が高いと思うが、その関連性・性格については明らかにできない。

H1・2・3・4号ピット

1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒子を良く含む。粘性あり、締まりにやや乏しい。
1'　10YR3/3　暗褐色土　１層＋ローム粒子を団粒状に含む。粘性あり、締まりにやや乏しい。
2　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。粘性・締まり共に強い。

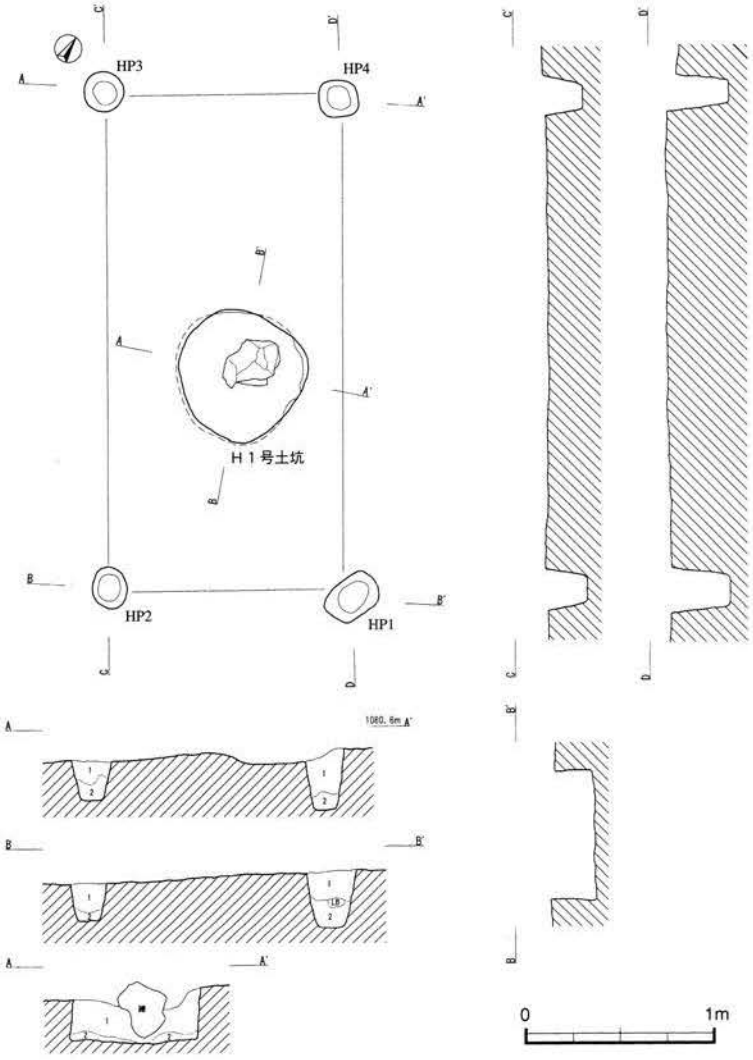
2. 土　坑

Ｈ１号土坑（第38図、図版４・５）

調査区の中央部北側、Ｅ－４区に位置する。前述したようにＨ１号掘立柱建物のほぼ中央部に構築されており、建物に伴う施設であった可能性も考えられる。規模は65×65cm、深さ28cmを測る。平面形は開口部・底部とも円形を呈し、張出し状の底部から壁は内傾気味に立ち上がる。断面形は広義のフラスコ形に近い。底面には小規模な起伏が見られるが、概ね平坦である。土坑の中央に33×25cm、厚さ36cmを測る大形の亜角礫が底面よりやや浮いた状態で出土した。覆土はローム粒子を良く含み、締まりにやや乏しい黒褐色土主体で、底部付近はロームの混入が著しい褐色土である。大形礫以外の遺物は出土しなかった。

H1号土坑

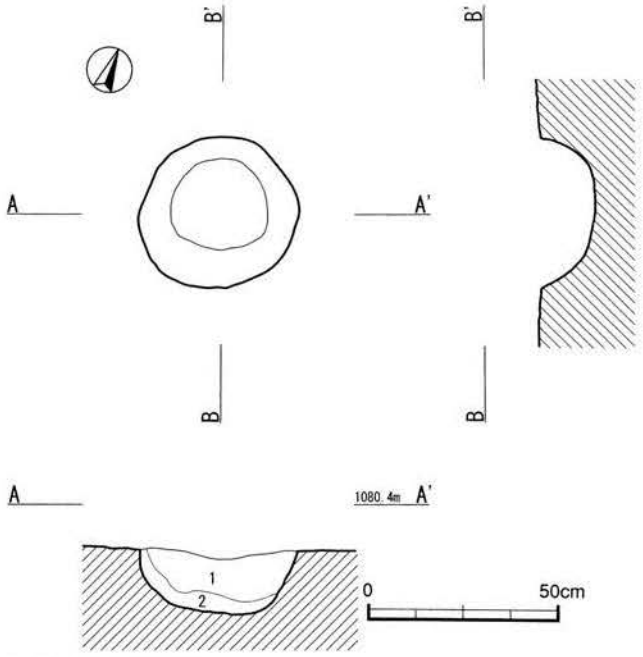
1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒子を均等に良く含む。粘性あり、締まりにやや乏しい。
2　10YR4/6　褐色土　ローム粒子を多量含み、ロームの混入著しい。粘性・締まりあり。



第38図　Ｈ１号掘立柱建物・Ｈ１号土坑

Ｈ２号土坑（第39図、図版５）

調査区の北端、Ｂ－２区に位置する。規模は42×39cm、深さ17cmを測る。平面形は開口部・底部とも円形を呈する。壁はやや開きながら立ち上がり、底面は丸底状を呈する。覆土はローム粒子を良く含み、灰白白色スコリア・炭化粒子が点在する黒褐色土を主体とし、炭化材も混在する。底部付近はローム粒子を多量含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。



第39図　Ｈ２号土坑

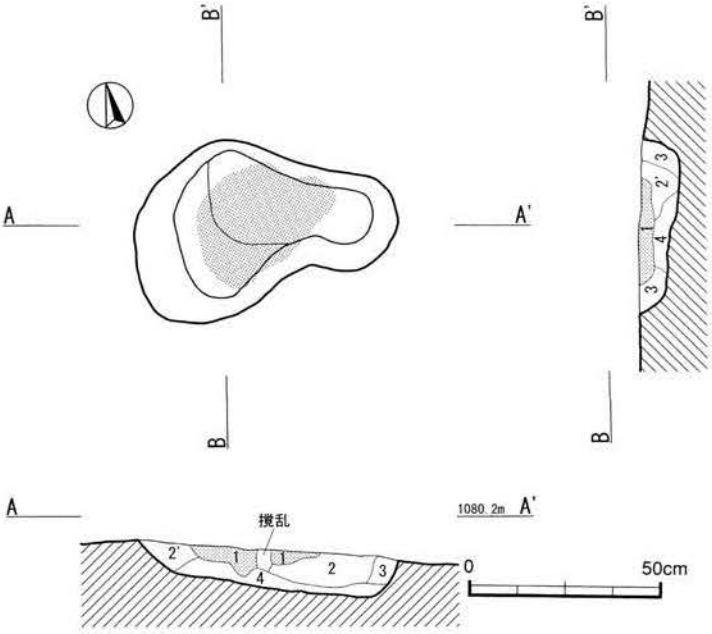
Ｈ２号土坑

1	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒子を良く含み、灰白色粒子・炭化粒子点在。炭化材（１～２cm）若干混在。粘性・締まりあり。
2	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒子を多量含み、ロームブロック（１cm）混在。粘性・締まりあり。

3. 焼　土

Ｈ１号焼土（第40図）

調査区の南部、Ｅ－８区に位置する。焼土の北東側を中心に炭化材が散在している。Ⅱｂ層からⅢ層にかけて構築されており、上面に38×25cmの範囲に層厚３～７cmの焼土が検出されたものである。不整な洋梨形を呈する堀込みをもち、規模は70×43cm、深さ12cmを測る。長軸方位はN―77°―Wを示す。壁は西側を除いて比較的急な角度で立ち上がり、底面は小規模な起伏をもちながら東側へ傾斜している。焼土以



Ｈ１号焼土

1	5YR5/8	明赤褐色土	焼土層。粗粒の黒褐色土混入。粘性・締まり共に弱い。
2	10YR3/1	黒褐色土	中～大粒の焼土粒子を含み、ローム粒子・炭化粒子点在。粗粒状。粘性あり・締まりに欠ける。
2'	10YR3/1	黒褐色土	２層に比べし基調やや明るく、微～小粒の焼土粒子を良く含む。ローム粒子・炭化粒子点在。粗粒状。粘性あり、締まりに欠ける。
3	10YR3/1	黒褐色土	微～小粒の焼土粒子点在。粗粒状。粘性あり、締まりに欠ける。
4	10YR3/4	暗褐色土	Ⅲ層相当層。焼土粒子点在。粘性・締まりあり。

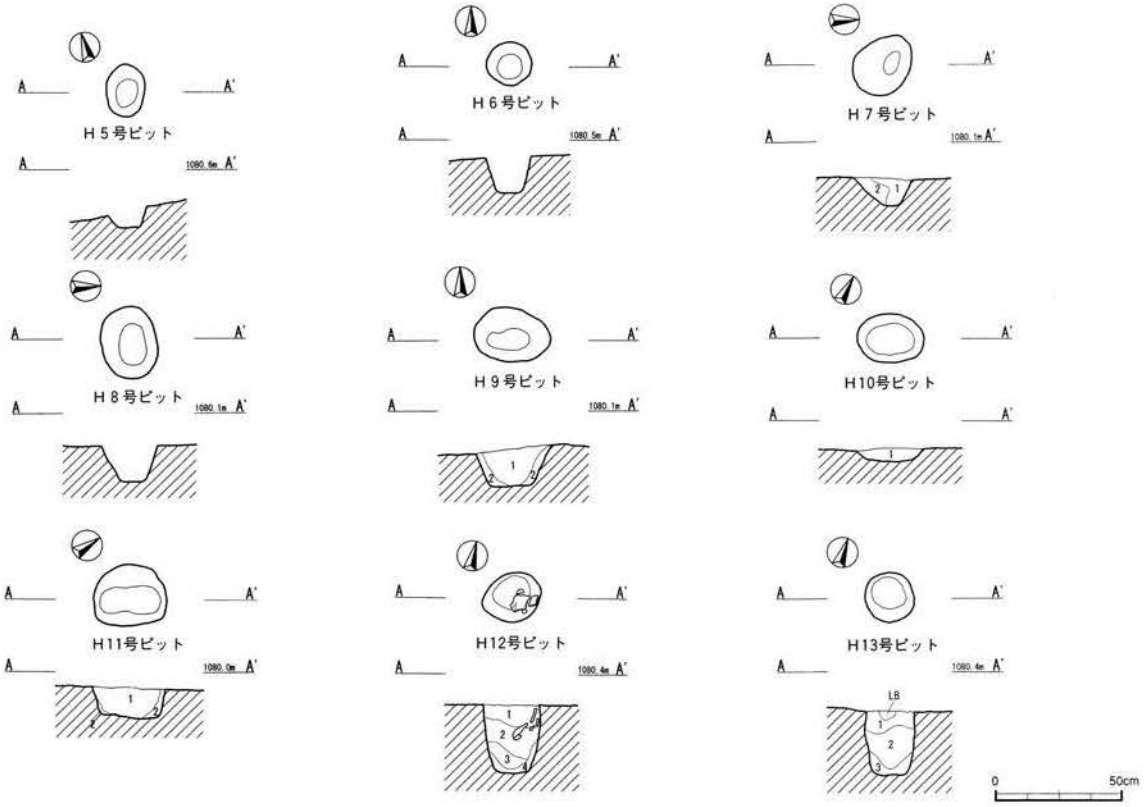
第40図　Ｈ１号焼土

下の覆土は焼土粒子を含み、ローム粒子・炭化粒子が点在する黒褐色土で、下位に行くに従い焼土粒子は減少する。壁・底面ともに被熱痕は認められない。遺物は出土しなかった。

本遺構は周辺に縄文時代のピットが纏まって検出され、また包含層中より押型文系土器の出土が見られたことから、当初は縄文時代の所産と捉えていたが、焼土検出面と同レベルより検出された遺構周辺の炭化材について放射性炭素年代測定を行った結果、約1,300ＢＰの値が得られた（付篇）。遺構内の資料ではないが炭化材の年代に依拠し本節で取り上げることとした。樹種は針葉樹である。

4. ピット（第41図、表８、図版５）

ピットは総数13基が検出された。Ｈ１号掘立柱建物を構成するＨ１～４号ピットを除いた９基については全体に散漫な状況を示しているが、調査区の北端部と南端部のＢ・Ｃ―２区とＧ－９区に偏在する傾向にある。北端部の12・13号ピットは明瞭な掘り込みを持つもので、その形状・規模からＨ１号建物の柱穴



H７号ピット

1	10YR3/3	暗褐色土	粗粒のローム粒子・ロームブロック（１～２cm）の混合層。粘性・締まりあり。
2	10YR3/2	黒褐色土	ローム粒子を含む。粘性・締まりあり。

H10号ピット

1	10YR2/2	黒褐色土	粗粒のローム粒子を含む。粘性あり、締まりに乏しい。

H12号ピット

1	10YR3/1	黒褐色土	微粒のローム粒子を僅かに含み、灰白色スコリア・大粒の炭化粒子点在。粘性・締まりあり。
2	10YR2/3	黒褐色土	微粒のローム粒子を少量含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性・締まりあり。
3	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒子を団粒状に良く含む。粘性あり、締まりにやや乏しい。
4	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒子を良く含み、ロームの混入若干見られる。粘性・締まりあり。

H９号ピット

1	10YR2/2	黒褐色土	粗粒のローム粒子を含む。粘性あり、締まりに乏しい。
2			ロームブロック主体層。

H11号ピット

1	10YR2/2	黒褐色土	粗粒のローム粒子を含む。粘性あり、締まりに乏しい。
2			ローム主体層。

H13号ピット

1	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒子を良く含む。粘性・締まりあり。
2	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒子を団粒状に良く含む。粘性・締まりあり。
3	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒子を少量含み、微粒の灰白色スコリア点在。粘性あり、締まり強い。

第41図　歴史時代のピット

に酷似している。さらに、円形のＨ２号土坑に近接している状況等からＨ１号建物に類似する建物の存在を窺わせている。南端部のＨ７～11号ピットは比較的狭い範囲に纏まって検出されたもので、上部が耕地造成によって削平され浅いものも見られる。配列に規則性は認められないが、小規模な建物の可能性も否定できない。

Ｈ５～13号ピットの形状は円形・楕円形を中心とし、長軸長は18～31cmを測る。深さはH12・13号ピットの25・26cmを除くと５～15cmと概して浅いものが多い。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を主体としており、締まりに乏しいものが大半である。遺物はH12号ピット上層から流れ込みと思われる縄文土器片（第34図６）が出土している。

表８　歴史時代のピット一覧

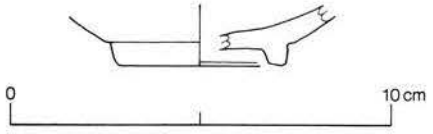
番号	位置	開口部（cm）	深さ（cm）	形状	覆土	備考
Ｈ１	Ｅ-４	30×21	32	不整楕円形	第38図参照	Ｈ１号掘立柱建物
Ｈ２	Ｅ-４	22×18	20	楕円形	第38図参照	Ｈ１号掘立柱建物
Ｈ３	Ｅ-３	21×21	21	円形	第38図参照	Ｈ１号掘立柱建物
Ｈ４	Ｅ-３	23×21	33	隅丸方形	第38図参照	Ｈ１号掘立柱建物
Ｈ５	Ｃ-２	21×15	7	楕円形		
Ｈ６	Ｃ-２	18×17	14	円形		
Ｈ７	Ｇ-９	26×21	11	不整楕円形	第41図参照	
Ｈ８	Ｇ-９	28×22	14	楕円形		
Ｈ９	Ｇ-９	31×21	15	長楕円形	第41図参照	
H10	Ｇ-９	26×19	5	楕円形	第41図参照	
H11	Ｇ-９	29×24	12	不整楕円形	第41図参照	
H12	Ｃ-２	24×19	26	楕円形	第41図参照	縄文土器・礫
H13	Ｂ-２	20×19	25	円形	第41図参照	

第４節　歴史時代の遺物

１．陶　器（第42図、図版９）

１は瀬戸・美濃系の施釉陶器。碗類の底部で、削り出しによる高台を持つ。高台部が露胎となるほかは、全面に淡緑黄色を呈する灰釉が総掛けされる。胎土はやや黄色味を帯びた灰白色の精良な陶土を用いている。近世の所産と考えられるが、底部のみの残存であり詳細を明らかにできない。表採品である。

図示した個体以外に、内・外面に錆釉が施釉された擂鉢の小片１点がある。１と同様、近世の瀬戸・美濃系陶器に比定される。



第42図　歴史時代の遺物

第Ⅵ章　蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡

本章は平成13・14年度に実施した蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡の分布調査・試掘調査で得られた遺物資料の概要である。全て耕作土中もしくは試掘トレンチ内より出土したものである。

第１節　縄文時代の遺物

1. 土　器（第43図、図版９）

１～６は早期中葉、押型文系高山寺式土器に比定される一群である。いずれも器厚12～17㎜と厚手で粗雑な作りの土器であり、胎土には多くの粗い白色砂粒と３～８㎜大の小石、繊維などを特徴的に含む。色調はおおむね暗褐色ないし暗灰褐色を呈する個体によって占められる。１は格子目状を呈する粗大で偏平な押型文が縦位に密接施文され、内面には粗く太い沈線（凹線）が斜走する。深鉢形土器の口縁下～胴上半部にかけての破片であろう。２～４・６は格子目状の粗い撚糸文がまばらに施文された個体。５は深鉢形土器の胴下半部の破片と推定され、粒の長径が1.2～1.7㎜を測る粗大な楕円押型文が横位密接施文される。

７～13は早期末葉の土器と考えられる一群である。７・９・11～13は器厚８～11㎜と厚手の作りであり、胎土に白色砂粒や繊維を含む。色調はおおむねくすんだ褐色を呈する。７は内外面に貝殻によると推定される斜行する条痕文が施される。無文の９は細片のため不明確な点を残すものの、内外面に調整時の擦痕をとどめる。11は外面に多方向からの撚糸文が雑然と施されるほか、部分的に撚糸文原体が引きずられたように施文されて撚糸条痕状を呈する。また、内面には浅い擦痕を残す。外面の撚糸文は13にも認められ、細密な撚糸文が斜走する。12は半割竹管状の工具により格子目状のモチーフが施された個体であるが、小破片のため詳細は明らかにしえない。

８・10は外面に斜走する細かい擦痕をとどめた胴部破片の一群。ともに黒味をおびた暗褐色を呈し、器厚５～６㎜と薄手・堅致な作りをみせる。８は内面に斜行する条痕が施文され、10の内面には調整時の浅い凹凸が顕著に残る。胎土にはともに微量の繊維を含む。上記の特徴などから、両者は東海系もしくはその影響を受けた土器である可能性が高いと考えられるが、口縁部形状や全体の器形などが不明であり、詳細な時期や土器型式とともに断定には至らない。

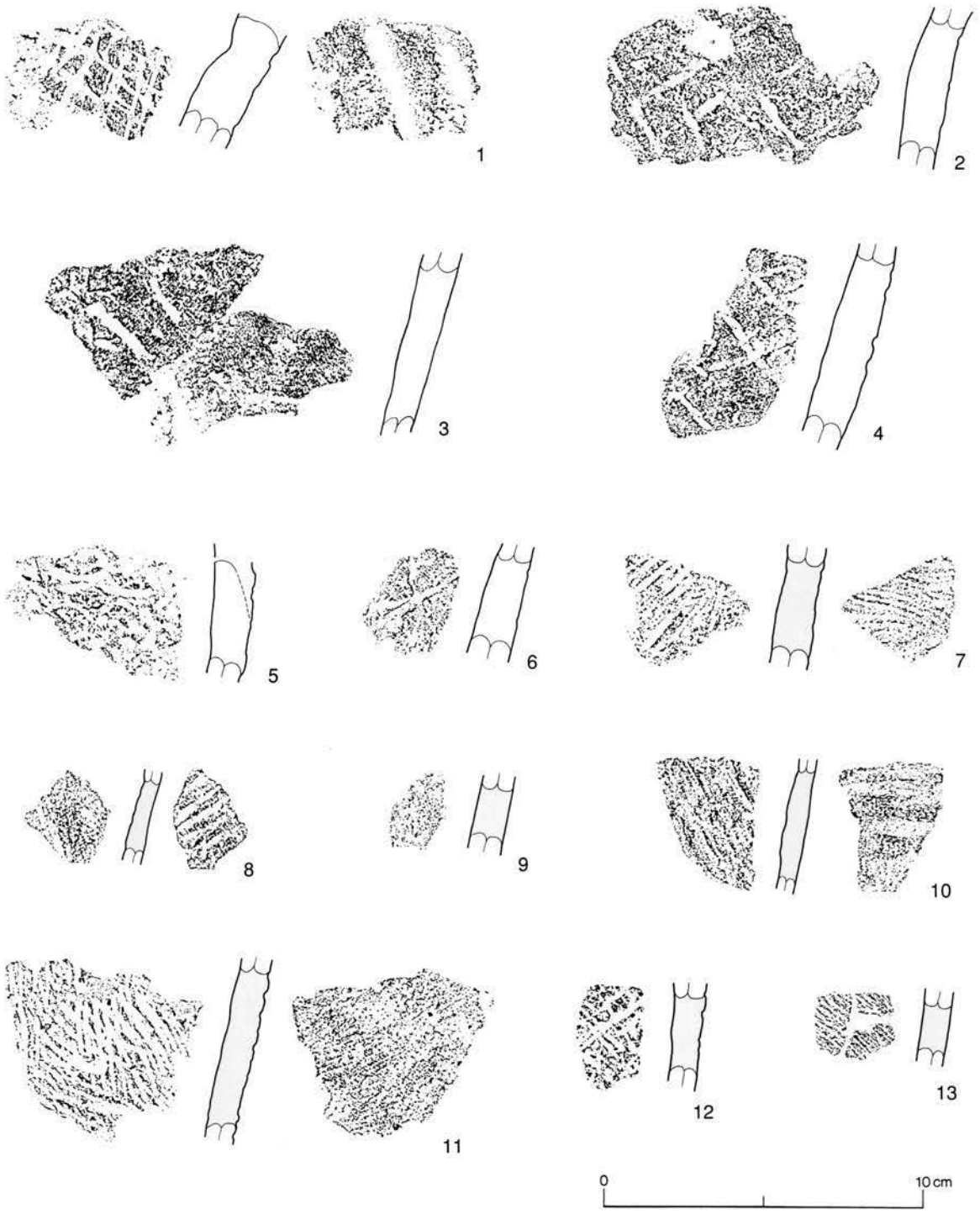
2. 石　器（第44～46図、表９、図版11）

１はチャート製で、石鏃の未製品と考えられる資料である。両極技法の痕跡が残されており、対極する縁辺部にはツブレが観察される。２もチャート製で、凹基無茎の石鏃である。

３～５はスクレイパーである。３は安山岩、４は頁岩製で、５は珪質頁岩製である。３・４は基部及び側縁部に刃部が看取される。５は摘み部を作出し、基部及び側縁部に調整痕が観察される。６は黒曜石製の楔形石器である。表裏に対向する加工痕が残されている。

７～10は二次加工のある剥片で、７が頁岩製、８～10はチャート製、11はホルンフェルス製である。何れも基部ないしは側縁部に細かい剥離痕が観察される。

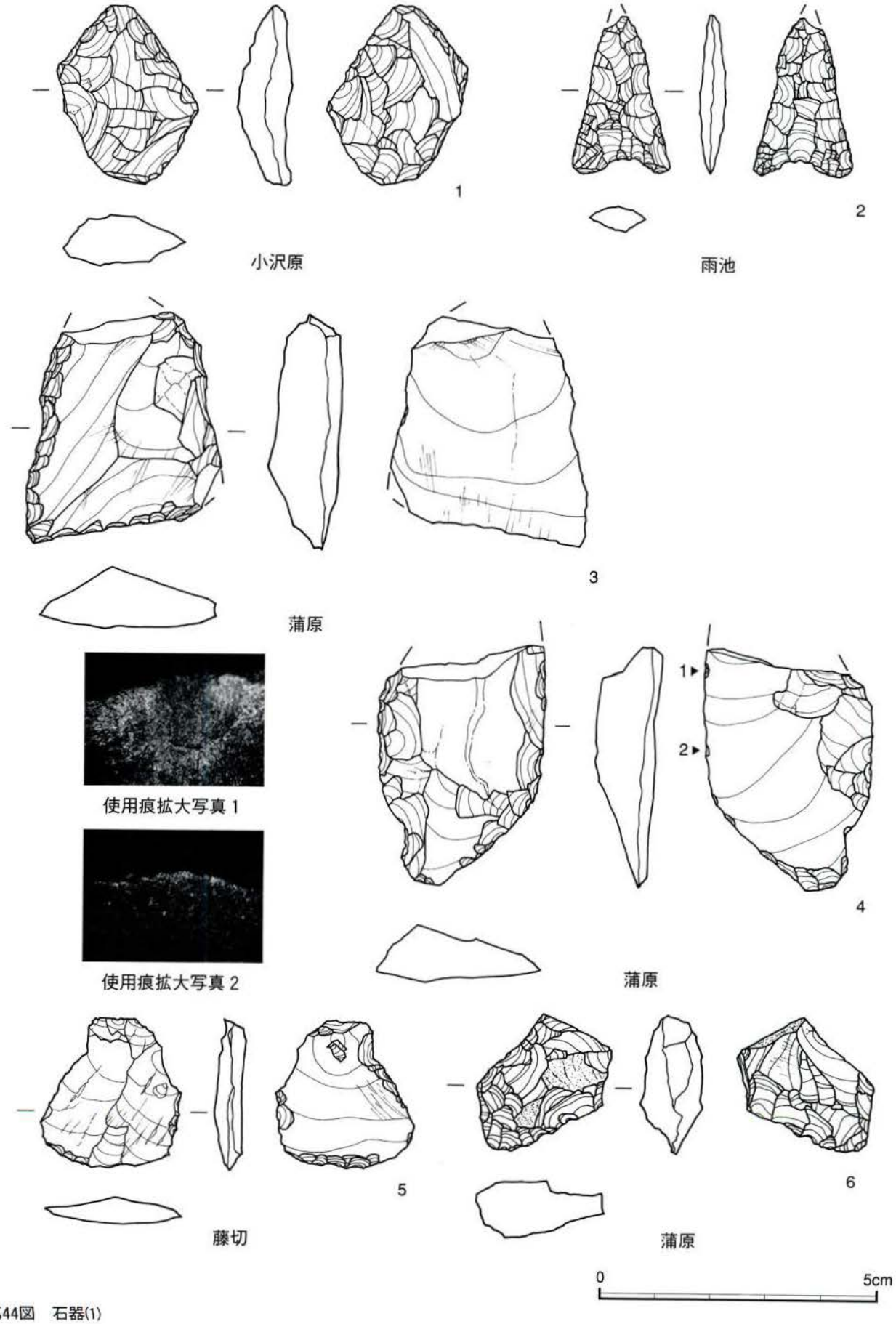
12～14はホルンフェルス製の打製石斧である。12は刃部のみ、13・14は着柄部に抉りを持たない資料で、13は自然面を残す長楕円形の石斧である。15は安山岩製の石錘である。



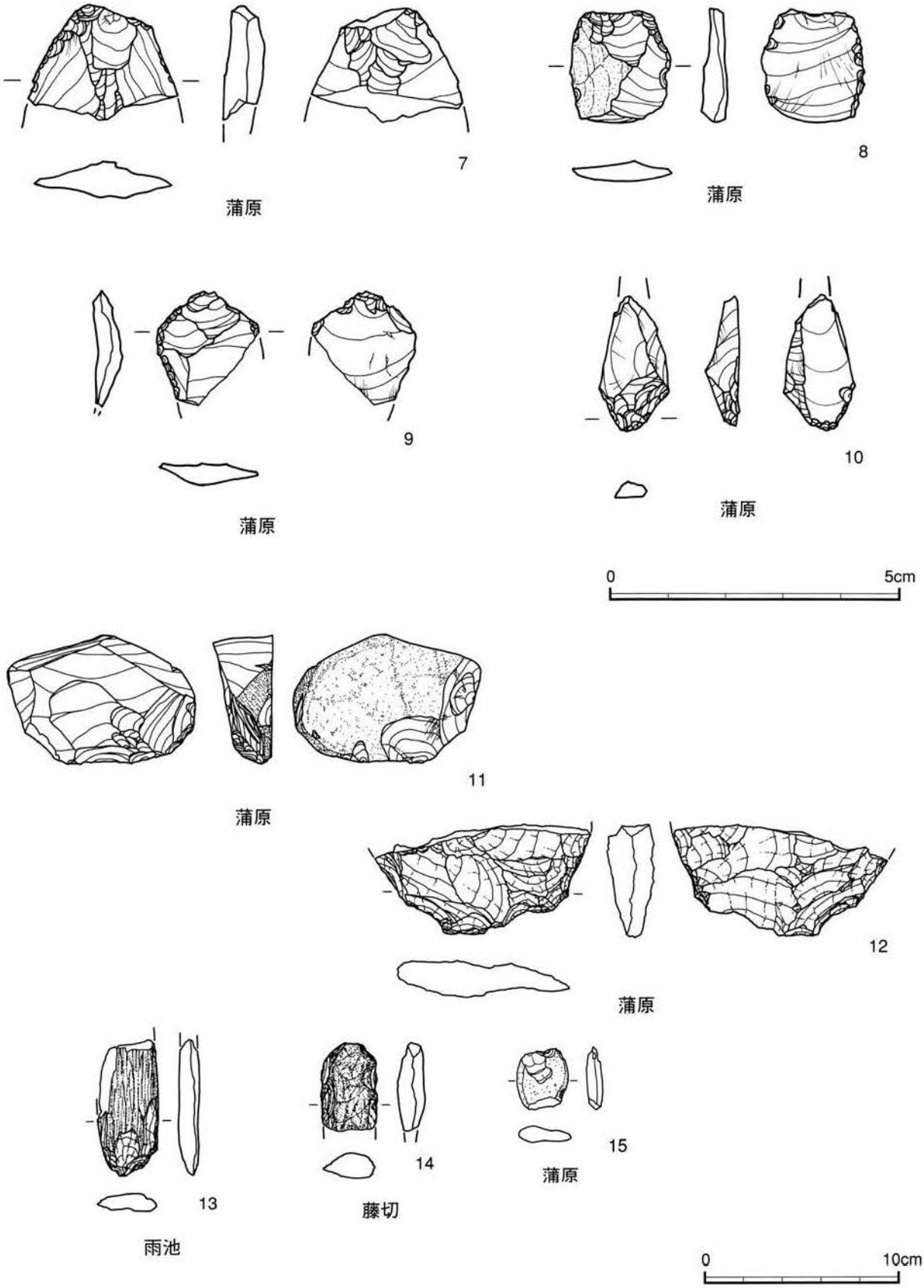
第43図　土器

16～22は磨石類である。すべて砂岩製である。16・20・21は通常「磨石」と言われる資料で、円礫を用いて主に側縁部にツブレが観察される。20・21の表面には窪みが見られ、20には赤色顔料が付着している。17～19・22は「特殊磨石」と呼ばれる資料で、器体に面取り様の平坦面が見られる。これらの面取り様平坦面の形状は一様ではなく、滑らかに研磨されたような面や、敲打痕を有する面等があり、一つの器体に複数の機能を併せ持っている。

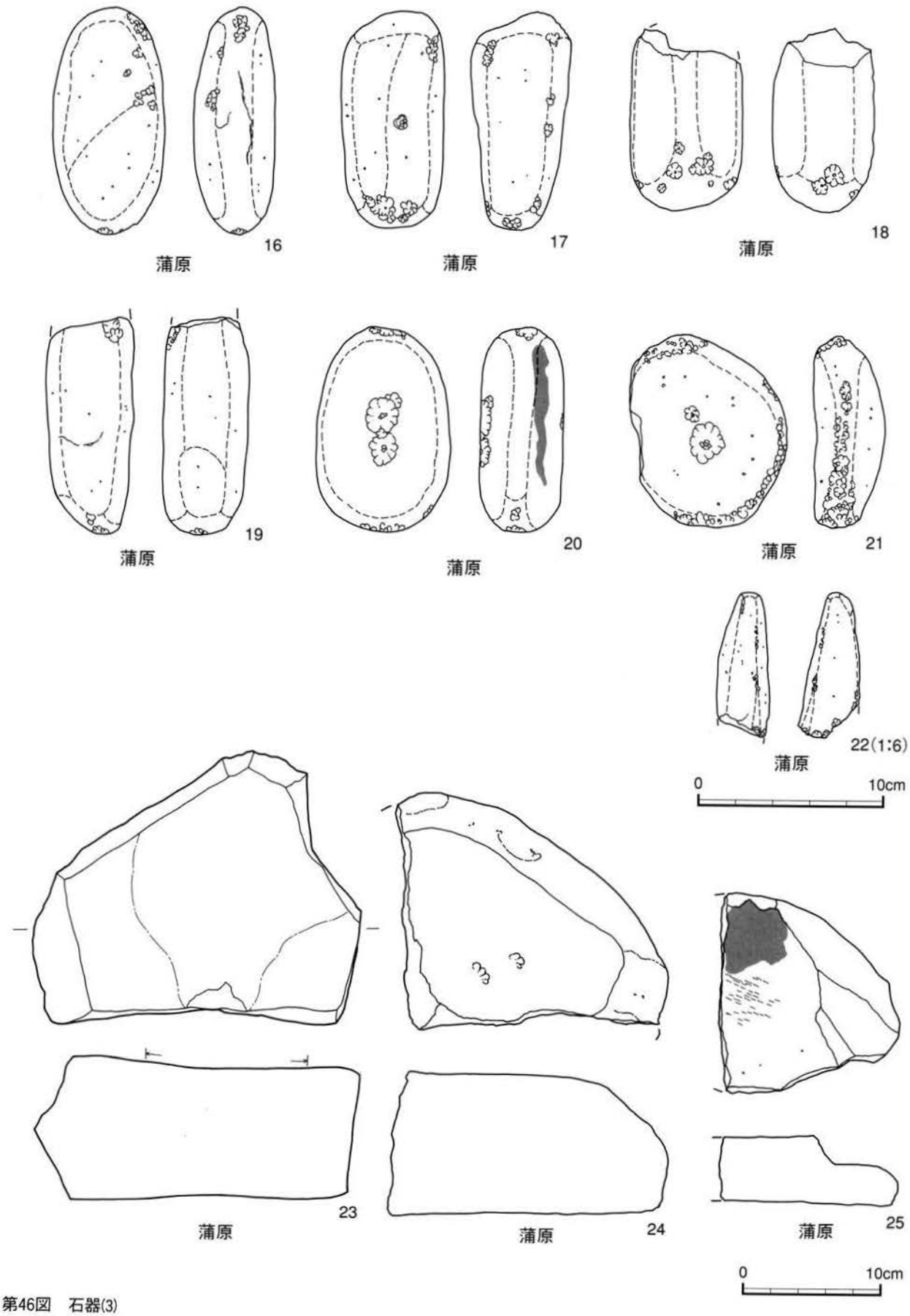
23～25は台石で、23・24が硬質砂岩、25は砂岩製である。24・25は表面に微かな敲打痕が残されており、石器製作に関係したものと考えられる。25は20と同様、赤色顔料の付着が認められる。



第44図　石器(1)



第45図　石器(2)


16
蒲原
17
蒲原
18
蒲原
19
蒲原
20
蒲原
21
蒲原
22(1:6)
蒲原
0
10cm
23
蒲原
24
蒲原
25
蒲原
0
10cm

第46図　石器(3)

表９　石器一覧

番号	器　種	石　材	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重量（g）
1	石鏃未製品	チャート	32	26	10	7.0
2	石鏃	チャート	29	18	5	1.6
3	スクレイパー	安山岩	42	36	13	18.8
4	スクレイパー	頁岩	43	31	11	13.6
5	スクレイパー	珪質頁岩	28	25	5	3.4
6	楔形石器	黒耀石	26	25	11	5.1
7	二次加工のある剥片	頁岩	20	26	7	2.9
8	二次加工のある剥片	チャート	20	18	4	1.6
9	二次加工のある剥片	チャート	20	18	4	1.0
10	二次加工のある剥片	チャート	23	12	3	1.4
11	二次加工のある剥片	ホルンフェルス	67	99	32	240.1
12	打製石斧	ホルンフェルス	58	113	25	129.6
13	打製石斧	ホルンフェルス	71	32	10	31.2
14	打製石斧	ホルンフェルス	46	30	14	23.2
15	石錘	安山岩	32	27	8	9.5
16	磨石	砂岩	124	61	44	489.0
17	磨石	砂岩	118	57	55	491.4
18	磨石	砂岩	98	62	56	511.0
19	磨石	砂岩	118	48	46	420.2
20	磨石	砂岩	111	74	47	505.8
21	磨石	砂岩	103	86	40	438.7
22	磨石	砂岩	158	67	58	737.0
23	台石	硬質砂岩	198	238	104	5640.0
24	台石	硬質砂岩	171	202	105	5390.0
25	台石	砂岩	143	132	51	1290.0

第２節　その他の遺物

縄文時代の土器のほか、図示には至らなかったが、蒲原遺跡からは平安時代の遺物として虎渓山１号窯～丸石２号窯式と推定される灰釉陶器の底部破片１点が出土している。

第Ⅶ章　総　　括

木祖村及び木曽郡内での調査は、記録に残るものとして鳥居龍蔵が報告した「木曾の有史以前」(1925『有史以前の跡を尋ねて』)があり、村内各地域より採集された遺物を紹介している。藤森栄一は菅地籍にある神出遺跡付近を調査(1930)しており、縄文早期・前期末～中期初頭の土器や竪穴住居を「信濃西筑摩郡井出の頭の土器」(1934『史前学雑誌』)に発表した。また、大場磐雄は藤森らと村内17箇所の遺跡を取り上げるとともに、「木曾渓谷石器時代概観」(1937『先史考古学』)で木曽川上流域における縄文文化の伝播に言及した。このような報告からは、往時の研究者が木曽谷最深部に位置する当地域をいかに注目していたのかが理解できる。

戦後になり復活した考古学的調査は、藤沢宗平が高校生らと実施した小木曽地籍の深沢遺跡(1947)と柳沢遺跡(1967)の調査が注目される。深沢遺跡は近年になって村誌編纂室による再調査(1997)が行われ、花ノ木遺跡の確認調査(1999)とともに、笹川左岸の段丘上に縄文時代中期の集落が広く展開している様相が明らかになりつつある(第Ⅱ章第2節参照)。

今回の調査は、これまで開発の少なかった村内では大洞遺跡(1979)に次いで2例目の緊急発掘調査となる。前述した深沢・柳沢遺跡とは笹川を挟みほぼ対岸に位置しており、北東から南西方向に約1,850m、幅約400mの広範な段丘上に7遺跡が確認されている。各遺跡は樹枝状に発達した小谷によって区画され、独立丘あるいは支尾根状地形を占地し、全体に東・南東方向への緩い勾配を持つ。現在は全域が耕地として利用されており、小沢原遺跡と藤切遺跡は天地返しや耕土の入れ替えなどの営農行為によってほぼ完全に破壊されているために、少量の遺物が採集されるほか遺跡の詳細は明らかにできなかった。他の遺跡でもこうした長年の開墾や整地作業による影響を大きく受けてはいるが、本調査を実施した3箇所の地区及び試掘・分布調査の資料を通してその成果を中心に述べてみたい。

柏木遺跡の調査区は段丘を開析する支谷の上位部にあたり、傾斜部は黒色土の厚い堆積によって埋没谷の状況を呈している。遺構は平坦面縁辺から直下斜面にかけて構築されており、縄文時代の小竪穴状遺構1基、土坑3基、ピット9基が検出された。小竪穴状遺構は180×135cmの不整な楕円形を呈するもので、明瞭な掘り込みをもち底面には硬化する部分も見受けられた。壁際から周縁部にかけて5基のピットが検出されており、或いは伏屋式の上屋を有していた可能性も考えられる。共伴遺物がないために構築時期は不明である。県内の山間部では、特に縄文早期の押型文期にあっては住居内に炉と柱穴をもたない小型の竪穴住居の検出例が散見されている。2～4軒程度で構成されるものが多く、塩尻市向陽台遺跡では周辺に土坑や集石炉を伴っている。本遺構の場合、近接して数基の土坑・ピットが検出され斜面のコンターに沿って分布域が延びるものと思われるが、狭小な調査区の先端部に位置しているために遺構の広がりや性格については明確にし得ない。しかし、形状や立地条件から縄文時代早期の定型化する以前の居住施設に近い要素を内包しているものと考える。

本遺跡より出土した遺物は僅少で、時期の判別できるものとして図示には至らなかったが縄文早期末葉の土器細片がある。石器では尖頭器の可能性のあるもの1点のほか、石鏃、打製石斧、特殊磨石、剥片類があり、殆んどが表面(分布)調査及び試掘時に耕作土中より出土したものである。

細畑遺跡での調査区は段丘の平坦部に位置し、南東部は大きく削平され遺構は確認できなかった。北西部も遺構検出面まで削平の影響を被っていたが、縄文時代の土坑13基、ピット7基が検出された。土坑・ピットともに調査区の北東寄りにやや纏まる傾向にあり、ピットは土坑分布域の外縁に帯状に分布しているようだが、調査区内での配置からは規則性は看取されなかった。

土器は縄文早期末葉の土器細片が僅かに確認されたのみである。石器は石鏃、スクレイパー、楔形石器、二次加工のある剥片など小型石器が大半を占め、これに破損品だが特殊磨石が若干加わる。未製品を含む石鏃と二次加工のある剥片類の出土量がやや目立つと言える。

大原遺跡では1,920㎡が調査の対象となった。調査区は南東方向に大きく張り出す独立丘の先端部に近い。検出された遺構は縄文時代のものに土坑２基、ピット13基があり、このうち、Ｊ１号土坑はその形態から「陥穴」状土坑である。村内では深沢遺跡に唯一の検出例があり、縄文中期中・後葉の住居を切って構築されている。今回の「陥穴」状土坑は調査区の北東壁際に１基のみが検出されているが、調査区外に複数基が群を構成しているものと思われる。ピットは調査区の北部と南部の比較的狭い範囲に二分されており、局所的な土地利用の痕跡を残している。遺物は包含層が良好に遺存していた範囲も広かったが数量的には少ない。早期中葉の押型文系土器（樋沢式～細久保式）を主体に、沈線文系土器（田戸上層式）のほか中期末葉～後期前葉と思われる資料も出土している。石器は石鏃、スクレイパー、楔形石器、縦長剥片、打製石斧が出土しており、柏木・細畑遺跡と同様、小型石器の組成率が極めて高く、とりわけ石鏃未製品が多いのも特徴的である。

詳細な時期は不明だが歴史時代以降の所産とされるものに掘立柱建物１棟、土坑２基、焼土１基、ピット13基がある。遺物は近世の瀬戸・美濃系陶器２点が確認されている。１間（1.25m）×１間（2.60m）のＨ１号掘立柱建物を始め、Ｈ２号土坑を伴うと思われるピットや、南端部のピット群など例えば出作り小屋等の小規模な建物が想定され、農耕地として利用されていたものと思われる。これについては、他の調査区では見られなかったⅡ層以下からの撹乱（ロームが大きく天地返しを受けた倒木痕や、抜根によるものと思われる小穴状の落ち込み）が調査区全域に広がっていたことも、かつて人為的な土地開発がなされた傍証となるだろう。

試掘・分布調査を実施した遺跡では、段丘南部の蒲原・雨池両遺跡から平面形状でのプランだが土坑（陥穴状？）やピットが確認されている。蒲原遺跡においては狭い範囲から特殊磨石が多く混在した状態で焼礫が纏まって採集されていることから、集石が存在している可能性が高い。また、同遺跡では赤色顔料の付着した磨石と台石が出土しており、押型文系（高山寺式）土器と早期末葉土器の資料も見られる。他の遺跡に比べ比較的活発な活動域であったことを窺わせる資料である。

試掘・分布調査地区を概観した場合、相対的に遺物量は少なく石鏃等の小型石器に簡便な礫石器が伴う状況で、蒲原遺跡に代表されるように土器の出土域が限定的であることが挙げられる。柏木・大原遺跡の調査結果からも当地域が狩猟・採集を目的としたキャンプサイト的な地点が点在する様相が推定される。

その他の時代の遺物として灰釉陶器がある。１点のみで詳細は不明と言わざるを得ないが、蒲原遺跡で確認された平安時代の人為の痕跡は興味深い。木曽谷では平安時代後期に相当する10世後半以降、山間奥地への展開が活発化する傾向にあり、これと軌を一にした生業活動の一端を物語る資料と言えるかもしれない。

引用・参考文献

友野良一　1978『カゴ田』飯島町教育委員会
戸沢充則ほか　1987『樋沢押型文土器遺跡調査研究報告書』岡谷市教育委員会
神村　透　1996『小野遺跡』木曽福島町教育委員会
会田　進　2000『樋沢遺跡』岡谷市教育委員会
百瀬忠幸　2001「万場遺跡」他『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』大桑村教育委員会
広田和穂　2001「吉野遺跡群」『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』上松町教育委員会
三原良文　2004『溝口遺跡』木曽福島町教育委員会
澁谷昌彦・鵜飼幸雄　2001「長野県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
木祖村誌編纂委員会　2001『木祖村誌　源流の村の歴史（上）』
岡谷市役所　1984『岡谷市史　上巻』
長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編』

付篇　自然科学分析

大原遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県木曽郡木祖村に所在する大原遺跡では発掘調査の結果、土坑や焼土遺構と考えられる赤褐色土の集中する遺構等が検出されている。これらの遺構は、いずれも土器等の遺物が共伴しないため帰属する時期・年代は不明である。このうち土坑からは、覆土中部より炭化材片が出土しており、焼土遺構については付近の遺構検出面と同一面より炭化材片が複数点出土している。

本報告では、遺構の年代観について検討するため、上述の炭化材を対象として放射性炭素年代測定を実施する。また、試料とする炭化材について樹種同定を行い、試料の由来を検証する。

1. 試料

試料は、Ｊ１号土坑の覆土中部に相当する５層から出土した炭化材１点（Ｊ１号土坑炭化材）と、Ｈ１号焼土より約1.5m離れた当遺構の検出面と同一面上から出土した炭化材１点（Ｈ１号焼土周辺炭化材）の計２点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（OneSigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用いている。

(2) 樹種同定

炭化材を抽出した後、自然乾燥させる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果及び考察

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表１・２に示す。Ｊ１号土坑炭化材の測定年代（補正年代）は約5600BP、Ｈ１号焼土周辺炭化材は約1300BPの値を示した。また、各試料の暦年較正年代は、Ｊ１号土坑炭化材は約4400calBCを示し、この値は谷口（2001）によれば関東・中部地方の縄文時代前期に相当する。一方、Ｈ１号焼土周辺炭化材は、約８世紀頃の年代となるが、後述するように当試料とした炭化材は、年輪幅が狭くかつ大径木となるヒノキ科の可能性もあり、年輪による誤差も考慮する必要がある。

(2) 樹種同定

結果を表１に示す。Ｊ１号土坑炭化材は広葉樹のコナラ属コナラ節、Ｈ１号焼土周辺炭化材は、針葉樹に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

表1. 放射性炭素年代測定結果および樹種同定結果

試料名	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code. No.
大原遺跡Ｊ１号土坑炭化材	炭化材	コナラ属コナラ節	5560±40	-26.15	5580±40	IAAA-40238
大原遺跡Ｈ１号焼土周辺炭化材	炭化材	針葉樹	1270±30	-26.77	1300±30	IAAA-40239

1）年代値の算出には、Ｌｉｂｂｙの半減期5568年を使用。
2）ＢＰ年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	較正暦年代 (cal)			相対比
大原遺跡Ｊ１号土坑炭化材	5557±38	cal BC 4,448 - cal BC 4,420		cal BP 6,398 - 6,370	0.415
		cal BC 4,400	cal BC 4,377	cal BP 6,350 - 6,327	0.314
		cal BC 4,373	cal BC 4,353	cal BP 6,323 - 6,303	0.272
大原遺跡Ｈ１号焼土周辺炭化材	1272±32	cal AD 691 - cal AD 704		cal BP 1,259 - 1,246	0.163
		cal AD 707 - cal AD 774		cal BP 1,243 - 1,176	0.837

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4. 4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している。
付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

・針葉樹

軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲では樹脂細胞・樹脂道とも認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、仮道管、樹脂道などは認められない。柔細胞壁は滑らかで、数珠状の肥厚は認められない。分野壁孔はスギ型またはヒノキ型で、１分野に２-３個。放射組織は単列、１-20細胞高。

樹脂細胞が認められないことを除くと、観察された特徴はヒノキ科の木材に非常に類似する。ヒノキ科の木材では、樹脂細胞があまり顕著に認められないこともあり、今回の試料もヒノキ科の可能性がある。また、当試料は小片であったが、年輪幅が約0.1-0.3㎜で、約２㎝の破片中に８本の年輪が確認された。

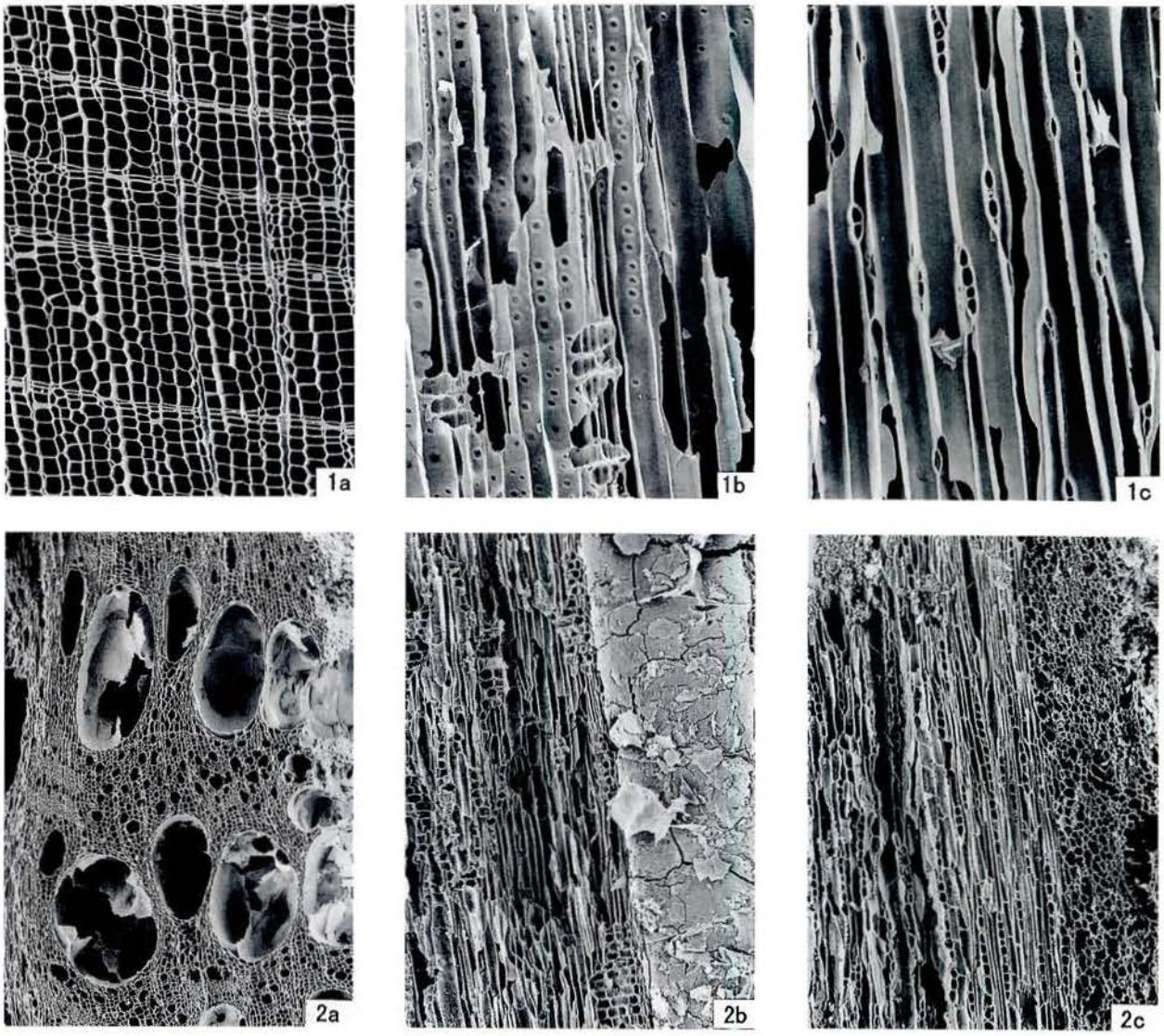
・コナラ属コナラ節（*Quercus sect. Prinus*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は１-３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

引用文献

谷口康浩，2001，縄文時代の年代．季刊考古学，77,17-21.

図版１　炭化材



１．針葉樹（Ｈ１号焼土周辺）
２．コナラ属コナラ亜属コナラ節（Ｊ１号土坑）
　　ａ：木口，ｂ：柾目，ｃ：板目

200μm：2a
200μm：1a・2b,c
100μm：1b,c

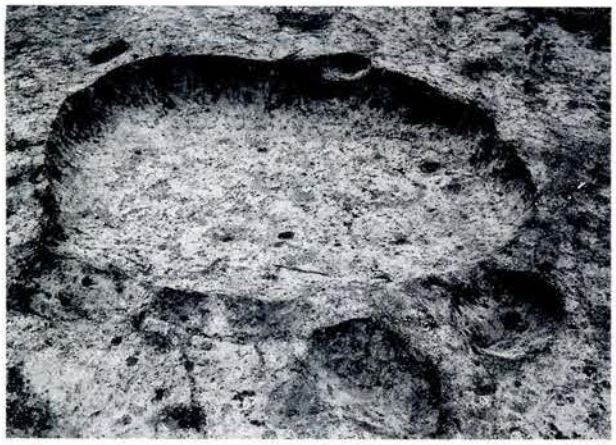
図　　版

西山地区遠景（東より）

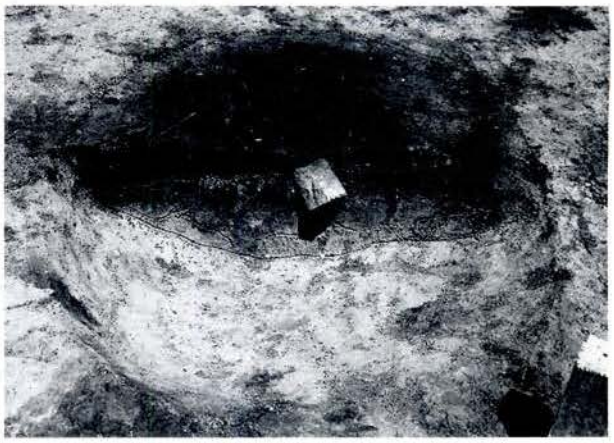
柏木遺跡近景（調査前西より）

柏木遺跡全景

図版 2



柏木遺跡 1 号小竪穴状遺構



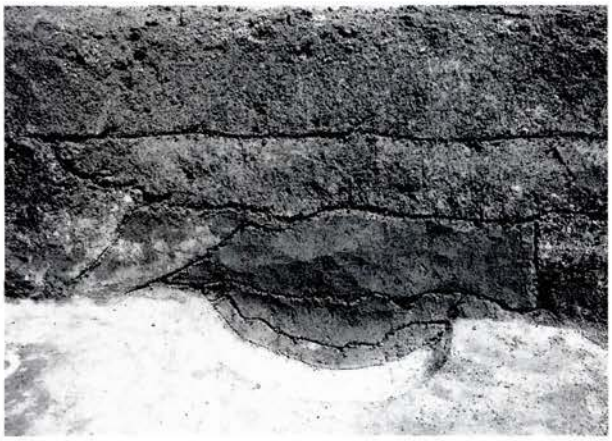
柏木遺跡 1 号土坑

柏木遺跡 2 号土坑・1 号ピット

柏木遺跡 4 号土坑

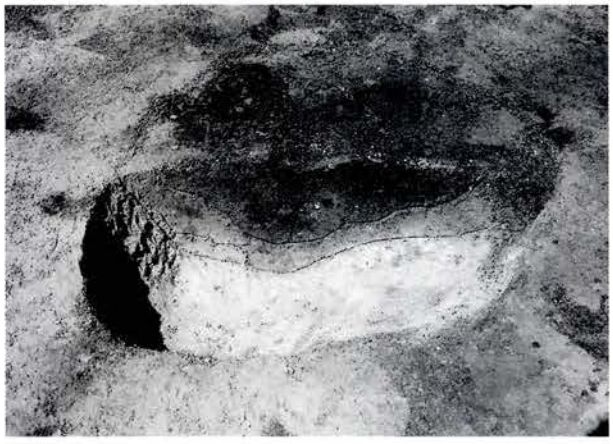
細畑遺跡全景

細畑遺跡遠景

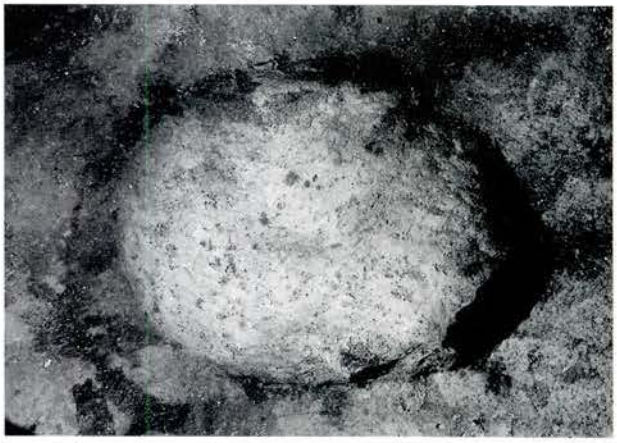


細畑遺跡 2 号土坑

細畑遺跡 3 号土坑



細畑遺跡 5 号土坑



細畑遺跡 6 号土坑

細畑遺跡 7 号土坑、1・3・6・7 号ピット

細畑遺跡発掘作業風景

図版 4

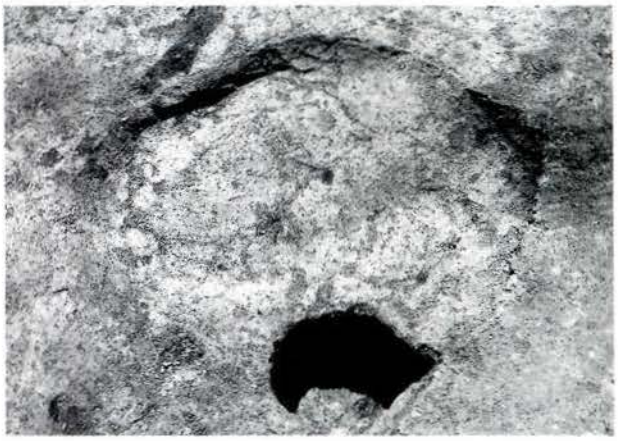
大原遺跡近景

大原遺跡全景

大原遺跡１号テストピット

大原遺跡Ｊ１号土坑

大原遺跡Ｊ１号土坑



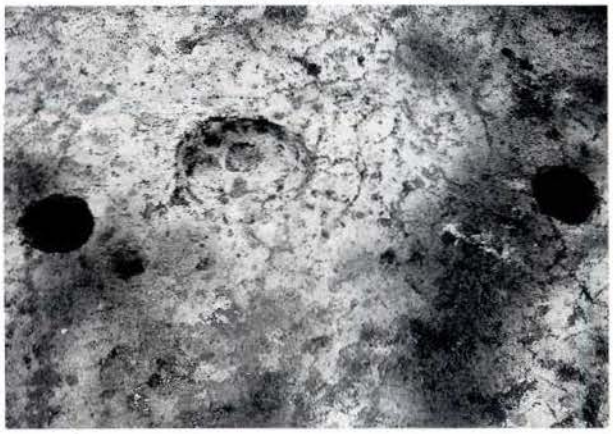
大原遺跡Ｊ２号土坑

大原遺跡Ｊ５～10号ピット

大原遺跡Ｊ15～17号ピット

大原遺跡Ｊ２号土坑、Ｊ１号ピット、
Ｈ１号掘立柱建物、Ｈ１号土坑

大原遺跡Ｈ２号土坑



大原遺跡Ｈ２号土坑、H12・13号ピット

大原遺跡H12号ピット

図版 6

大原遺跡工事施工後状況（南西より）

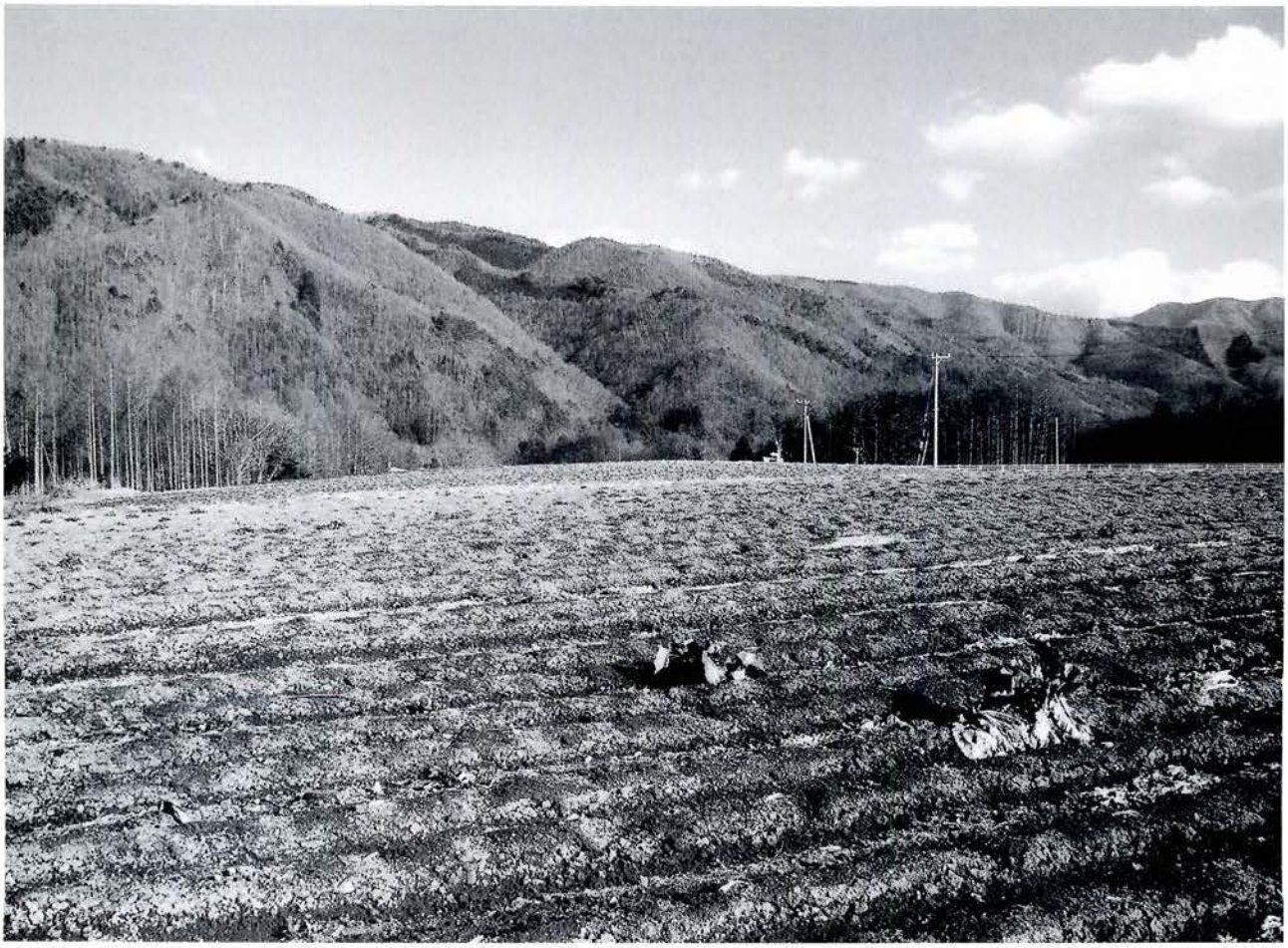
大原遺跡工事施工後状況（北より）

蒲原遺跡近景（南東より）

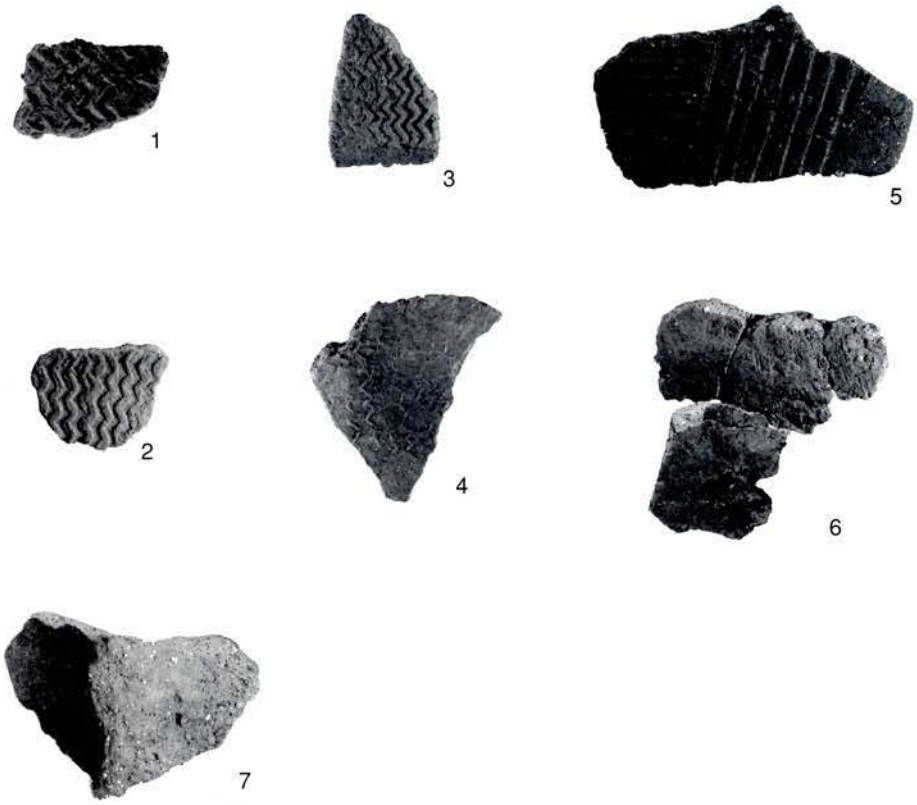
雨池遺跡近景（南西より）

図版 8

藤切遺跡近景（南東より）

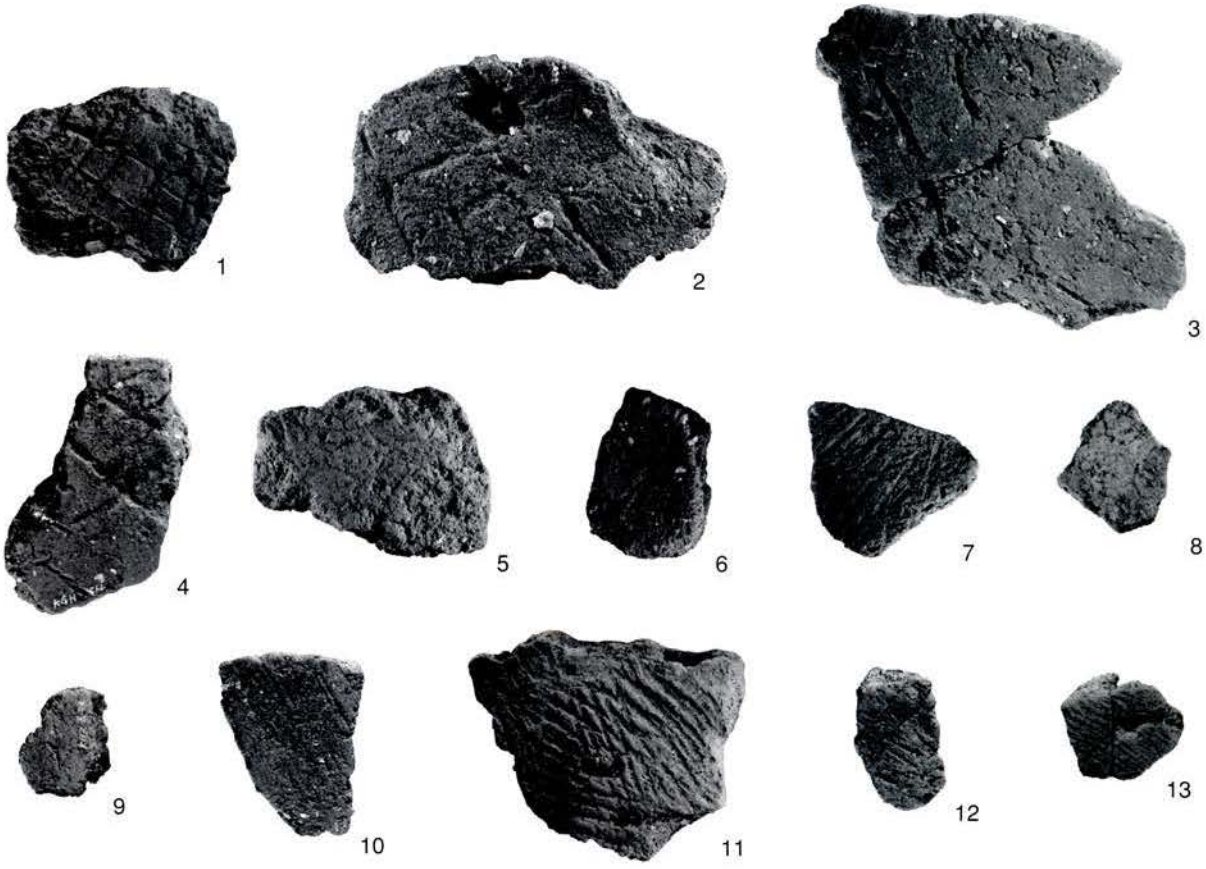


小沢原遺跡近景（南東より）



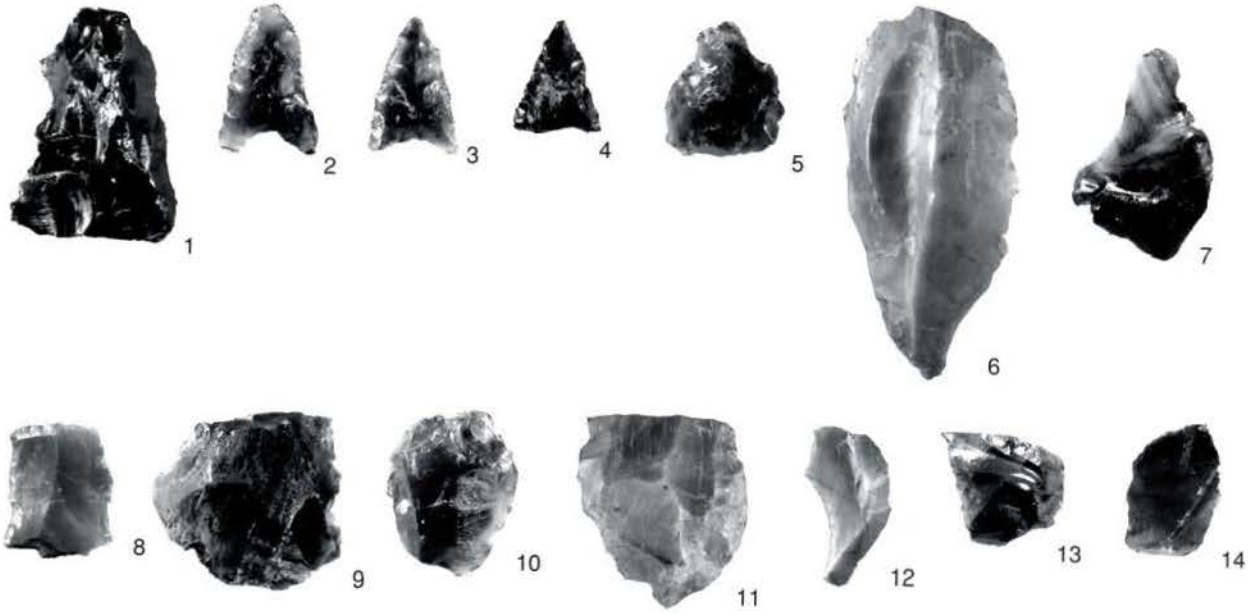
大原遺跡歴史時代の遺物

大原遺跡縄文時代の土器

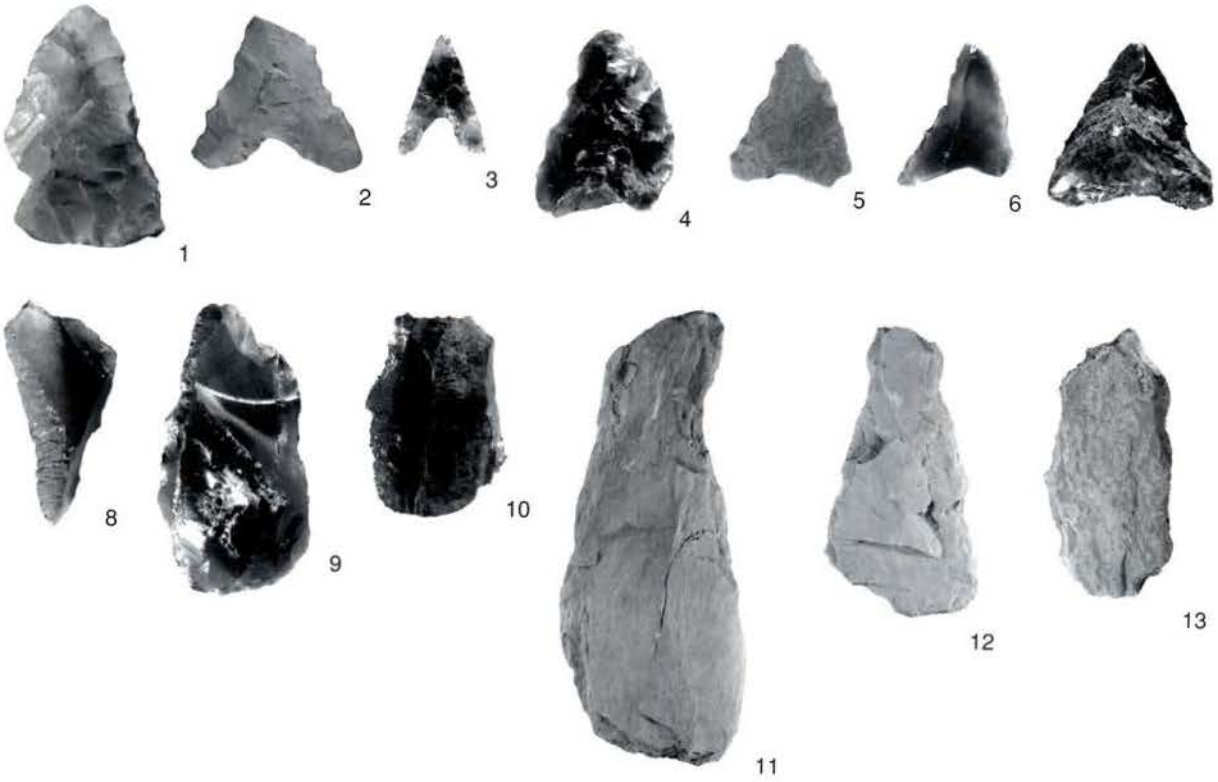


蒲原・藤切遺跡縄文時代の土器

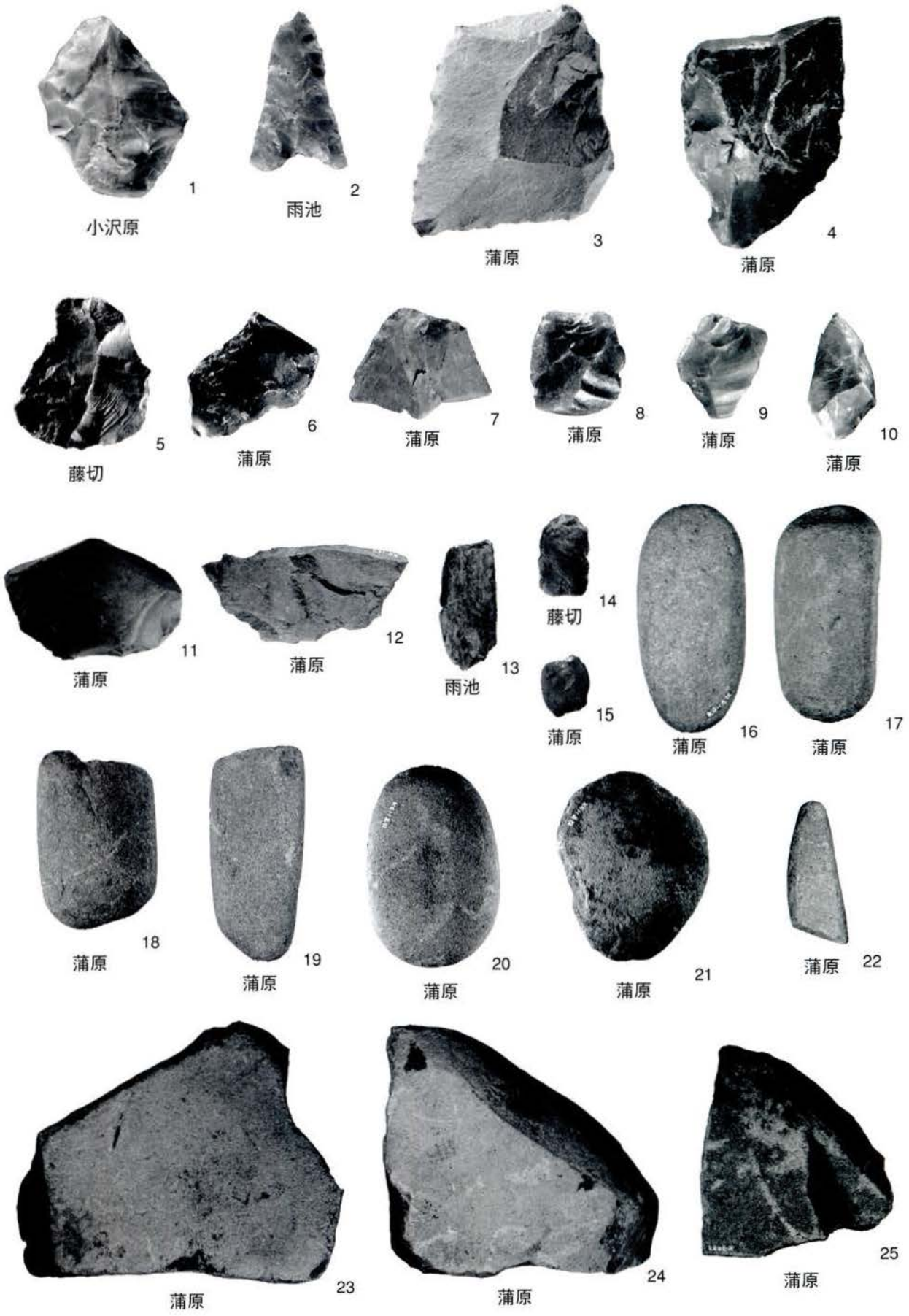
柏木遺跡縄文時代の石器



細畑遺跡縄文時代の石器



大原遺跡縄文時代の石器



蒲原・雨池・藤切・小沢原遺跡縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	けんえいにないていくせいはたちたいそうごうせいびじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	県営担い手育成畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	柏木遺跡・細畑遺跡・大原遺跡・小沢原遺跡・藤切遺跡・雨池遺跡・蒲原遺跡
編著者名	笹川正則　郡山雅友　百瀬忠幸
編集機関	木祖村教育委員会
所在地	長野県木曽郡木祖村薮原　1191-1　TEL 0264-36-3348
発行年月日	2005年2月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
柏木遺跡（かしわぎいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 4689他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	49	35′58′37″	137′44′30″	20040419～20040605	220㎡	県営担い手育成畑地帯総合整備事業に伴う
細畑遺跡（はそばたいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 3768他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	50	35′58′29″	137′44′39″	20040419～20040605	224㎡	
大原遺跡（おおはらいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 3726他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	51	35′58′24″	137′44′47″	20040419～20040605	1,920㎡	
小沢原遺跡（こざわはらいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 4826-1他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	48	35′58′31″	137′44′22″	20030415～20030430	試掘調査	
藤切遺跡（ふじきりいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 3658-4他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	53	35′58′10″	137′44′49″		分布調査	
雨池遺跡（あまいけいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 3651他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	17	35′58′03″	137′45′00″	20030415～20030430	試掘調査	
蒲原遺跡（がまはらいせき）	長野県木曽郡木祖村小木曽 3526他（ながのけんきそぐんきそむらおぎそ）	20425	52	35′57′54″	137′45′13″	20031112～20031130	試掘調査	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柏木遺跡	包蔵地	縄文時代	小竪穴状遺構 1基 土坑 13基 ピット 9基	尖頭器・石鏃・打製石斧	
細畑遺跡	包蔵地	縄文時代	土坑 13基 ピット 7基	石鏃・スクレイパー 楔形石器 二次加工のある剥片	
大原遺跡	包蔵地	縄文時代 歴史時代	土坑 2基 ピット 15基 掘立柱建物 1棟 土坑 2基 焼土 1基 ピット 13基	押型文系土器・貝殻沈線文系土器・中期末葉～後期前半土器 石鏃・打製石斧 スクレイパー・楔形石器 陶器	
小沢原遺跡	包蔵地	縄文時代		押型文系土器・早期末葉土器 石鏃・スクレイパー 二次加工のある剥片 打製石斧・磨石・台石 灰釉陶器	試掘・分布調査資料
藤切遺跡	包蔵地	縄文時代			
雨池遺跡	包蔵地	縄文時代			
蒲原遺跡	包蔵地	縄文時代 平安時代			

長野県木曽郡木祖村
県営担い手育成畑地帯総合整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

柏木遺跡・細畑遺跡・大原遺跡
小沢原遺跡・藤切遺跡・雨池遺跡・蒲原遺跡

発行日　2005年2月25日

編　集　木祖村教育委員会
〒399-6201　長野県木曽郡木祖村薮原　1191-1
TEL (0264) 36-3348

発　行　長野県木曽地方事務所
木祖村教育委員会

印　刷　鬼灯書籍株式会社